

第2章

前身各校

1 金沢医科大学

(1) 蘭学の勃興と蘭方医学	164
(2) 加賀藩における蘭方医学	168
(3) 蘭方医学からドイツ医学へ	173
(4) 官立学校医学部の成立	179
(5) 金沢医科大学の成立と展開	187
(6) 戦時体制下の医科大学	190
(7) 新制金沢大学へ向けて	195
注記・参考文献	198

2 金沢医科大学附属薬学専門部

(1) 起源	200
(2) 草創期 藩校の時代 (1867 ~ 71年)	200
(3) 形成期 県立移管より私立北陸薬学講習所時代 (1872 ~ 89年)	202
(4) 生長期 第四高等中学校医学部薬学科 ~ 金沢医学専門学校薬学科時代 (1889 ~ 1922年)	204
(5) 発展期 金沢医科大学附属薬学専門部時代 (1923 ~ 51年)	209
(6) 戦時体制から新制大学の発足まで	218

3 金沢高等工業学校・金沢工業専門学校

(1) 加賀藩の伝統と明治期の実業教育	223
(2) 県、市の高等工業学校設立要求と経過	224
(3) 金沢高等工業学校開校	231
(4) 戦前の発展	238
(5) 戦争の影響	240
(6) 金沢工業専門学校に改称し拡充	243
(7) 戦後の混乱	243
注記・参考文献	248

4 石川師範学校・石川青年師範学校・金沢高等師範学校

(1) 石川師範学校	248
(2) 石川青年師範学校	264
(3) 金沢高等師範学校	266
注記・参考文献	279

1 金沢医科大学

(1) 蘭学の勃興と蘭方医学

オランダ正月

日本は戦国時代から南蛮学の名で西洋の学問に接触する機会があったが、鎖国によってオランダ一国に交渉を限定されてからは、洋学はもっぱら蘭学の名で呼ばれるようになった。その端緒は新井白石の『西洋紀聞』や『采覧異言』に始まり、8代将軍吉宗の漢訳洋書の解禁、青木昆陽の『和蘭文字略考』などによって研究の道が開かれ、長崎は蘭学研究の門戸となった。豊前中津藩医の前野良沢は昆陽についてオランダ語を学び、長崎に遊学して一層学習を深めた。1771(明和8)年に若狭小浜藩医の杉田玄白とともに、囚人の死体解剖をみてオランダ医書の正確なことに感嘆し、桂川甫周、中川淳庵を加えてこの蘭書の翻訳に取り組み、1774(安永3)年、これを『解体新書』として刊行した(写真2-1)。これは晩年に杉田玄白が、門下の大槻玄沢の協力のもとに著した『蘭学事始』とあいまって、日本における蘭学の基礎を築いたものである。

金沢大学医学部記念館の資料室に「芝蘭堂新元会図」なる一幅の掛軸が展示されている(写真2-2)。別名「オランダ正月」とも呼ばれるこの図は、太陰暦がもっぱら行われて



写真2-1 解体新書(記念館資料室保管)

いた江戸時代に、当時の江戸における蘭学者の総元締めの立場にあった大槻玄沢が、1794（寛政6）年から毎年、太陽暦の1月1日に当たる日に、同志を招いて新年会を開催したが、1794年の閏11月11日に芝蘭堂で開かれた第1回新年会の有様を描いたのがこの絵で、市川岳山の筆によるものとされる（1902年複製）。今日、原画は早稲田大学図書館に蔵されており、陽暦の新年に集う蘭学者の盛んな意気とともに、当時すでに蘭学を媒体として、先進的な知識層が形成されていたことがうかがわれる。

大槻玄沢は奥州一ノ関藩医の家に生まれ、良沢、玄白に学び、長崎遊学の後、江戸に蘭学塾芝蘭堂を開き1827（文政10）年、71歳で没するまで40年間に94人の後進を養成した。その著『蘭学階梯』上下2巻は代表的な入門書として蘭学の普及に貢献した。1796（寛政8）年、芝蘭堂門下の稲村三伯によって最初の蘭日辞書『波留間和解』が著され、蘭学は各地に広まり、塾的組織が作られた。京都では藤林普山、小石元俊、辻蘭堂、新宮涼庭、大阪では緒方洪庵がその中心となった。洪庵の適塾からは、橋本左内、福沢諭吉、大村益次郎らが輩出し、全国から集まった塾生は636名に達している。その内石川県から適塾に学んだものは、金沢医学館の創世期に活躍した田中信吾、津田淳三、大田美農里、塾頭を務めた大聖寺の渡辺卯三郎など33名の多きを数え、帰郷後はいずれも北陸における医学の先駆者として活躍している。

1823（文政6）年、オランダ商館医師でドイツ人のシーボルト（Philipp Franz von Siebold）が来朝すると、たちまちその学識が知られ、1年後には長崎郊外に鳴滝塾を設けて、医学・博物学の教授に当たるようになった。その門下には塾頭になった美馬順三をはじめ高良斎、高野長英、土生玄碩など50名余りが集まり、医学の枠を乗り越えて、さながら近代的な科学発展の中心である趣きがあった。シーボルトがオランダ商館長に随従して参府した時、幕府の天文方であった高橋景保は、伊能忠敬の実測による『大日本沿海輿地全図』を自ら校訂してシーボルトに示したが、それは精度において外人を驚嘆させるものに達していたという。

このような状況下にあって、情報の中枢に位する幕府自身も蘭学に眼を開かざるを得なくなり、1811（文化8）年に蕃書和解御用方を設けて、大槻玄沢らに命じてショメールの百科辞典を翻訳し、『厚生新編』を作ったりしていた。しかしその範囲は、吉宗時代にみ



写真2-2 オランダ正月（記念館資料室保管）

られた実学的知識の摂取の域を出ておらず、派生する反封建的世界観やキリスト教に対しては、これを厳しく弾圧する態度をとった。たまたま1828（文政11）年、シーボルトの任期が満ち帰国するに当たって、その便船が海難に遭った。それに伴って積み荷検査が行われた際、禁制の日本地図や土生玄碩の贈った葵の紋服が発見され、シーボルトは間諜の嫌疑をかけられ国外追放となった。地図を贈った景保は獄死、玄碩はじめ蘭学者の中からも多数の処罰者を出し、いわゆる「シーボルト事件」として後世にその名を残したが、洋学の吸収が遅滞した。その後1839（天保10）年、渡辺華山、小関三英、高野長英らに降り掛かった「蛮社の獄」で洋学の弾圧は苛酷となった。

種痘と蘭方医学の普及

わが国では奈良時代の735（天平7）年に痘瘡が大流行した記録があり、以後明治に至るまで百回に及ぶ大小の流行があった。「天然痘予防規則」により強制種痘制度が確立した1876（明治9）年以降も、現在まで総計で368,162人が痘瘡に感染し、93,050人が死亡している。たとえ九死に一生を得たとしても、死ぬまで「あばた」を苦にして生きてゆかねばならず、痘瘡は人々に非常に恐れられた。まして有効な治療法がなく、かかれば隔離され見捨てられるしかなかった江戸時代においては、犠牲者の数は計り知れず、心ある医師達の種痘への関心は強かった。

痘瘡患者の膿疱の「うみ」や「かさぶた」を弱毒化し、人工的にほかの人に移し植えて局所的に軽い痘瘡にかからせ、自然流行から予防しようとする人痘接種法は古くからインド・中国・トルコあたりで行われ、わが国へは中国から伝わっていた。しかし人痘の接種によって、重症の痘瘡にかかって死ぬことも稀ではなかった。一方、エドワード・ジェンナー（Edward Jenner）が牛痘をジェームス・フィップス（James Phipps）なる8歳の少年に接種したのは、1796年の5月といわれる。彼の偉大さは、接種しただけではなく、牛痘に罹患した人に痘瘡ウイルスを接種してもそれが付かない事を確認している点である。

わが国における牛痘種痘法の全国普及の基点の1つは、長崎のオランダ商館付医官モーニッケ（Otto Gottlieb Johann Mohnike）による1849（嘉永2）年の牛痘苗輸入の成功に始まる。1847（弘化4）年に痘瘡の大流行があり、これを契機に牛痘輸入が2つのルートで普及した。1つは、越前藩侍医笠原良策が藩主松平春岳を通じて幕府の要人阿部老中、大屋長崎奉行へと正規の手順を踏んだ輸入計画であったが、これは結局不成功に終わった。

もう1つは佐賀ルートで、佐賀藩主鍋島閑叟は侍医伊東玄朴の建言により、出島出入医であった榎林宗建に命じてオランダ商館に直接牛痘苗の輸入を依頼した。1848（嘉永元）年に来任したモーニッケは痘漿を持参したが、これは既に効力を失い、牛痘ウイルスは死滅していた。そこで宗建は「かさぶた」の形で輸入することを提案し、翌49年7月パタビアから長崎、出島のモーニッケのもとに「かさぶた」が届けられた。7月17日、宗建はこの「かさぶた」を自分の子、建三郎とオランダ通詞の子2人に接種し、建三郎だけが善感

して牛痘苗の輸入に成功したのである。

佐賀ルートで渡来した牛痘苗は、越前計画の一役を担っていた唐通詞頼川四郎八の仲介により1849（嘉永2）年9月19日、京都の日野鼎哉のもとに届けられた。鼎哉は自分の孫や懇意な家族の子供にこれを接種し、越前の笠原良策にこのことを連絡した。予てから牛痘の輸入計画に没頭していた良策は、急遽10月5日、京都に赴き、鼎哉を中心とする種痘活動に参加した。一方、日野鼎哉から痘苗のことを聞いた大阪の緒方洪庵は、予め古手町（道修町5丁目）に種痘所（除痘館）を求め置いて、笠原良策に分苗を願い出た。11月6日、鼎哉とともに良策は大阪に出て、翌7日、大阪除痘館において洪庵らへの分苗の儀式を行う運びになった。良策はその後京都を発って11月25日、福井に帰り除痘館を開設している。

一方金沢へは翌50年2月8日、黒川良安の使者明石昭斎によって伝苗され、同月16日、良安、明石のほか津田随分齋、黒川元良を加えた4人により、金沢で初めて種痘が行われた。1855（安政2）年、津田らは金沢市堤町に私立種痘所を開設したが、1862（文久2）年3月には金沢市彦三の「反求舎」に、藩公認の「金沢藩種痘所」が設立され、良安がその棟取となった。この時をもって金沢大学医学部の始まりとしている。以上の経緯を見ても明らかなように、1849年7月、長崎に牛痘が入ってから京都へは10月、大阪11月、福井11月、名古屋12月、金沢翌年2月と、半年の間に種痘は全国的な規模で急速に普及している。長い鎖国制度下にもかかわらず、痘瘡という恐怖からの解放のためには何人も抵抗し得なかったのである。

それでも、その後種痘が一般社会に受け入れられるまでには、険しい苦難の道を迎えることになった。福井藩の笠原良策も大阪の緒方洪庵も、種痘普及のための公的援助を得られず、「悪説流布して、牛痘は無益のみならず、却って児体に害ありといひ、これを信ずるもの一人も無く之に至れり、茲において不得已（やむをえず）頗る米錢を費やし、一会毎に4～5人の貧児を雇い、且つ四方に奔走して之を論じ、之を勧め、辛うじて綿々その苗を連続せることあえて3～4年、ようやくにして再び信用せらるることを得たり。その間、社中各自の辛苦艱難せること、敢えて筆頭の尽くす所にあらず」という状況であった。

種痘が日本全国に広がった速さに比べると、公的に江戸幕府に種痘が認められるのもかなり遅れ、江戸お玉が池に種痘所が設立されたのは1858（安政5）年5月7日のことであった。歴史的にはこの日が東京大学医学部の始まりとされている。さらにこの江戸の種痘所が官許を得たのは、2年遅れの1860（万延元）年7月10日であった。しかし一旦種痘が受け入れられると、その後の西洋医学の普及は早く、翌年に種痘所は幕府の西洋医学所に改められ、緒方洪庵が2代目の頭取に任命されている。

(2) 加賀藩における蘭方医学

天下の書府 加賀藩

加賀藩はわが国最大の版図をもつ雄藩で、しかも藩祖前田利家以来、転封改易もなく一貫して前田家の支配にあり、歴代藩主は学芸の振興に意を用いた。3代藩主前田利常は幕藩体制の中で百万石の身代が固まると、人的資源に投資を惜しまず、家臣の数は15,000人を超えた。この施策によって世に「加賀は奉公人の学問所」といわれる程多彩な人材が集まった。その中には茶道・築城など幅広い才能をもった高山右近、書や陶芸の大家本阿弥光悦、茶道と建築の偉才小堀遠州などがあり、多くの人材が京都や江戸から加賀に参集した。

さらに5代藩主前田綱紀は、祖父利常の偉業を継いで文化面に力を注ぎ、新井白石をして「加賀は天下の書府なり」と賛嘆せしめた程天下の書籍を蒐蔵した。綱紀が最も情熱を注いだのは和漢の書籍や史料の収集であったが、綱紀自身も本草学に理解をもっていた。当時、本邦本草学の第一人者であった稻生若水は、一生の大著『庶物類纂』完成のために綱紀に仕えることを望み、1693(元禄6)年、念願叶って39歳の時前田家に抱えられ、著述の完成に専念した。惜しむらくは、正編の予定の3分の1(362巻)を仕上げたのみで61歳で没した。加賀藩細工所も綱紀の時代に完備し、全国から工芸技術の粋が集められた。

今日、綱紀のコレクションは国宝22点・重要文化財73点を数える前田育徳会「尊経閣文庫」に伝えられている。ただし、いわゆる「百万石文化」は加能越に自生したのではなく、利常や綱紀が京都・江戸から各分野での一流の人材を招き、最先端の技術を受け入れ、北陸の風土で熟成したものであった。

黒川良安と加賀藩

加賀藩における医官は、御医者・御外科・御鍼立・御口料の職種と順位が定められており、御医者 of の最初は1606(慶長11)年に前田利長に召し出された内山覚中で、300石を給されている。以来もっぱら漢方医が藩医に任官していたが、11代藩主前田治脩はるながが1808(文化5)年、江戸で病に伏した際、蘭方医宇田川玄真によって病気が治ったことを契機に、漢方医から蘭方医への関心が高まった。12代藩主前田斉広は早くから海外の情勢に心を寄せ、しばしば学者を招いて西洋事情を聴き、西洋医学の進歩を認識していたので、当時蘭方医として名声の高かった玄真の来任を強く懇望した。しかし玄真はこれを固辞し、代わりに高弟藤井方亭と吉田長淑の2人を推挙した。両人は30人扶持をも



写真2-3 黒川良安の胸像
(医学部玄関に展示)

って召し抱えられることとなった。加賀藩が食禄をもって蘭方医を抱えたのはこれが最初である。しかし両人は江戸在住の家臣であったから、国元金沢における医学への貢献は少なかった。

金沢大学の医学部正面玄関を入った左手の壁に「黒川自然翁」と書かれた大きなレリーフ像（写真2 - 3）がみられる。第13代藩主前田斉泰は、侍医として蘭方医黒川良安なひやすを採用したが、前述した種痘の普及も含め、良安が加賀藩の蘭学発展に寄与した貢献度は誠に大きいものがあった。

黒川良安は静淵と号し、越中大榎木村の医者玄龍の子として生まれた。1828（文政11）年、12歳の時、父に随って長崎に大通詞吉雄権之助を訪ね、蘭語を学びシーボルトにも親灸して広く蘭学を修めた。当時から既に高島秋帆らとも親交があった。その後江戸に上って坪井信道の門を叩き、坪井塾の塾頭として諸生を薫陶すること5年、緒方洪庵、青木周弼、杉田成卿らと親交をもった。次いで信州松代に佐久間象山を訪ねてその家に寓し、象山に蘭学を教え、象山からは漢学を学ぶ間柄となった。1840（天保11）年、金沢に滞在した時、加賀藩の執政青山将監に請われて、80石の禄にて加賀藩に仕える身となった。6年後の1846（弘化3）年侍医に推挙され、8年後の1854（安政元）年には壮猶館の翻訳方兼務を命ぜられた。

壮猶館そうゆう（写真2 - 4）とは第13代藩主前田斉泰により、藩学の源流であった文学校明倫堂と武学校経武館に加えて、蘭学および洋式兵学科を授けるために、新たに設立された藩校であり、その名は詩経の中の小雅采芣にある「克壮其猶」（よくそのみちをさかんにする）の文句に由来するといわれている。



写真2 - 4 壮猶館（広坂：石川県知事官舎横に現存）

第2章 前身各校

その創立には良安の尽力が大きかった。教授した学科は、砲術・馬術・喇叭^{らっぱ}・合図・洋学・医学・洋算・航海・測量学などで、砲術は蘭式に始まり、後英式に変えられ、洋学は蘭学を主とした。また七尾には附属軍艦所を置き、蒸気船・帆船の軍艦を購入して航海術の実習が行われた。当時各藩はそれぞれの財力に応じて軍艦や大砲の建造に余念がなく、良安は蘭方医でありながら藩の軍艦御用掛を兼ね、幅広い蘭学の知識を軍事面でも発揮した。

1867（慶応3）年、藩主前田慶寧は卯辰山に養生所の建設を命じ、同年10月その病院部門を完成しているが、より本格的な医学校と病院を建てることを決意し、良安に医学館設立計画主任を命じた。翌68（明治元）年7月、良安はその子、誠一郎と門弟横井三柳を伴い、再び長崎に赴き、医学校と病院の制度を調査した。翌年5月、製造人体（キンストレーキ）（写真2-5）、病院必需の機器・薬品および長崎病院教師マンズヘルト（Mansvelt, C.G.）の講義録を携えて帰国した。1870（明治3）年、藩の医学館創設については、その設計主任となり教授を兼ねて大いに尽くすところがあったが、翌71年8月職を辞し、20年後の1890年、東京本郷真砂町で永眠した。享年74歳、藩主から生前に自然の号を賜った。

良安の蘭学は窮理・化学・天文・地理・歴史・兵学・倫理の諸書に精しく、医学では難解とされた病理あるいは診断を得意とした。加賀藩には江戸に吉田長淑、藤井方亭のような蘭方医・蘭学者はいたが、金沢にあって西洋の医学を移植し、前後30年にわたって孜々として加越能3州の子弟を教育薫陶した良安の功績は大きい。1874（明治7）年に行われた内務省の全国医師数調査をみると、蘭方医の占める比率は石川が38.7%と最も多く、加賀藩における蘭学の普及ぶりを

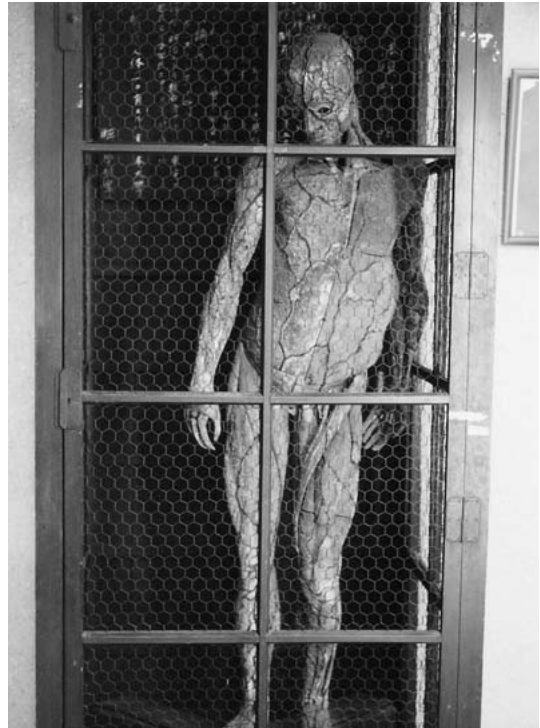


写真2-5 キンストレーキ（記念館資料室保管）

製造人体（キンストレーキ）（写真2-5）、病院必需の機器・薬品および長崎病院教師マンズヘルト（Mansvelt, C.G.）の講義録を携えて帰国した。1870（明治3）年、藩の医学館創設については、その設計主任となり教授を兼ねて大いに尽くすところがあったが、翌71年8月職を辞し、20年後の1890年、東京本郷真砂町で永眠した。享年74歳、藩主から生前に自然の号を賜った。

表2-1 全国主要都府県における漢方医と洋法医の比率

(1874年内務省調べ)					
	漢法医員	洋法医員	医員合計	洋法医(%)	
石川	284	179	463	38.7	
岡山	242	108	350	30.8	
東京	851	258	1,109	23.3	
千葉	742	159	901	17.0	
愛知	798	163	961	16.9	
宮城	425	82	513	16.0	
大阪	628	107	735	14.5	
福岡	591	94	685	13.7	
長崎	473	42	515	8.1	
京都	832	22	854	2.5	
全国合計	23,015	5,247	28,262	18.5	

うかがい知ることができる(表2-1)。この貢献度からみても、黒川良安が今日、金沢大学医学部の学祖と見做される由縁は首肯されよう。

養生所の設立から金沢医学館へ

1866(慶応2)年、前田慶寧が第14代藩主となったが、福沢諭吉の著書『西洋事情』に啓発され、卯辰山に貧民救済のために病院を建設する計画を立て、三浦八郎左衛門、不破亮三郎に主務を命じた。翌年の10月病院が完成し、養生所と名付けられた。養生所には診察局・外科施術局・薬局・棟取局・当直局・事務局・庖厨・浴室・病室が区分され、病室は上・中・下、三通りに区分されていた。このほか、医学教授所・会読所・生徒寄宿舎や癲狂院(精神病室)が付設され、舎密局・酢酸局・雷項局・普請室・種痘所が設置され、薬草栽培の菜園も開墾されていた。この養生所の設計平面図が真柄組建設より金沢大学医学部へ寄贈され、医学部記念館資料室に展示されており、当時の養生所の様子が詳細にうかがえる。

養生所の開設は、貧民の救済と医学研究が主な目的であり、黒川良安はじめ、津田淳三、田中信吾、大田美農里が棟取に任命され、黒川良安が指導的立場にあった。製薬に従事していた舎密局では高峰元樫が総理を務めた。舎密局は金沢大学薬学部の始まりとされている。藩主前田慶寧から命を受けた黒川良安は、長崎より帰郷後、大手町に医学館の設立を急ぎ、1870(明治3)年2月に卯辰山養生所から医育機関を移し、金沢医学館を開設した。

当時としては藩内唯一の専門学校であり、また最高の教育機関であった。また館内に病院を設けて病者を治療し、寄宿治療(入院)を認めた。こうして学校を主とし病院を従とする制度が初めて確立した。創立当初の教師は黒川良安、大田美農里、田中信吾、津田淳三、高峰精一(高峰讓吉の父)がその任に当たった。その「学科序次」は全5等10科より成り、予科として第5等は語学・数学、第4等は理学・化学、本科として第3等は解剖学・組織学・顕微鏡用法・生理学・動物学・動物生体試験、第2等は病理治療学・病体解剖学・薬性学・製薬処方学、第1等は雑科治療・施療実験で構成され、オランダ・デンマークの医学教育を範としていた。

翌71年3月、オランダ1等軍医スロイス(Pieter Jacob Adrian Sluys)(写真2-6)が来任した。彼の着任を契機にして良安はその職を辞し、医学館の指導者が交代した。スロイスは医学修学期間を5年と規定して授業科目を大幅に増加し、自らは理化学・動植物学・健康学・解剖学・生理学・病理学・薬剤学・内科学・外科学・軍陣外科および実験を担当した。スロイスの授業態度は厳しく「講義日に遅刻した者は講堂に入れず欠席扱い、検査日に無届け不参の者は破門」



写真2-6 スロイスの肖像
(記念館資料室保管)

第2章 前身各校

との掟が残されている。スロイスの授業は多くは口授通訳によるもので、生徒に聴講筆記させた。その講義録は金沢市立図書館藤本文庫、並びに大聖寺の稲坂暢蔵宅憶松閣文庫に保存されている。

廃藩置県と医学館の危機

1869（明治2）年6月、前田慶寧が版籍を奉還して金沢藩知事に任命された時は、その版図は藩政時代のまま、即ち富山・大聖寺両藩を除いた加越能3州であった。1871年7月の廃藩置県でこれが同名の県になった。ところが同年11月、大聖寺県が金沢県に合併されると、今度は同年12月、七尾県が金沢県から分離し、また富山県の代わりに越中一円を区域とする新川県が生まれた。つまり金沢県は現在の加賀地方だけになった。

廃藩置県の令が下ると、慶寧は藩知事を免ぜられ、8月には内田政風が新たに金沢県大参事（後の知事）に任命されて、藩庁を改め県庁とした。翌72年2月2日、内田は県庁所在地を加賀の石川郡美川町に移し、金沢県を石川県と改称した。当時の金沢は戸数27,744戸、人口123,453人（1871年7月）であったが、県庁の移転により約10万人程度に減少し、町は寂れ人心は動揺した。

創立以来順調に発展を遂げてきた医学館にも、突然予期せぬ悲運が訪れた。藩の諸制度が廃止されたため、医学館を含む藩立の諸学校は一斉に廃止の運命に達着したのである。これと同時に政府は学制の改革を行い、全国を8大学区に分ける学制を採り、従来藩以来の公立学校は廃止する方針をとった。かくして藩立の金沢医学館も一切の公費援助を打ち切られるに至り、同年4月12日、閉鎖の危機に見舞われることになった。

この時、津田、大田、田中は県令内田政風に請願して無条件で従来建築物・機械の一切を借用し、私立病院開設の認可を取り付け、約1年間、私財をもってこれらを維持した。

スロイスもこれに同調して生徒の教授、患者の治療を続けたが、スロイスの年俸7,200円は病院の年間総経費のほぼ50%に相当し、授業料や入院料、患者の治療費・薬代では到底購うことは困難であった。ちなみに本科1年生の授業料は20銭、5年生が40銭であったから、官費一切を絶たれた医学館が私費で維持できなかったのは明白である。医学館が採算を度外視して外人教師の存続に執着したのは、当時の文部省が明治5年の学制改革の中で、「外人教師にて教授する医学教則」を作ってこの制度を強いたためである。一方当時の授業内容をみると、医学教育はかなり高い水準にあり、外人教師に頼らざるを得なかったことも事実である。

かくて1873年に至り、金沢医学館の窮状を憂いた金沢町戸長らは、県庁に強く働き掛けて斡旋に努めた結果、毎月300円の補助金が県から支払われることになった。金沢町からも200円が支給され、病院は半官半民の形となった。5月に県が在来の医術開業者を調査した時には、その委嘱により学術と治療の試験を行い、次いで7月、種痘所を設けて広く児童に種痘を行い、8月には文部省の命により医学館を金沢病院と命名するよう通達を受けている。同73年9月には先に閉鎖した卯辰山の貧病院を復興したので、ようやく医学

の将来に光明がみえるようになった。1875年6月、金沢病院は官立に移行するが、その前年の9月にスロイスは任期満ちて帰国した。なお前年、美川町に移転した石川県庁が、加賀・能登2国を管轄することになったため、1873年1月14日、金沢町に復帰している。こうした行政の変動、病院の制度と人事の推移をみると、明治維新以来の動乱が収まり、一応の安定期に入ったことがうかがわれる。

(3) 蘭方医学からドイツ医学へ

石川県金沢病院と医学所の設立

1875(明治8)年2月、文部省は医術開業試験を東京・京都・大阪の3府に通達し、翌年各県に伝えた。試験科目として物理学・化学大意・解剖学大意・生理学大意・病理学大意・内科外科学大意および薬剤学の6課とし、なお眼科・産科・口中科(歯科)などを専攻するものは、その部分の解剖・生理・病理の大意、手術を検査すると規定した。こうして正規の医学校を経ないで医師となることは殆ど不可能となった。

石川県では、この年6月、待望の医学館の県移管が決まり、スロイスの後任として外国教師、蘭医ホルトルマン(Holterman, A.)(写真2-7)を迎え、従来の医学館は石川県(金沢)病院として発足することになった。窮乏時に病院を支えた津田淳三、大田美農里、田中信吾は揃って主務医として発令され、治療・教育に当たることとなった。この年、すべてが公費で賄われることになって前途が開けた病院は、学生教育の教則および病院規則を制定した。スロイスが就学期間を予科・本科を含めて5年としたのに対し、ホルトルマンは一歩進めて予科1年・本科5年とした。一方このような課程を履修できない学生のために、略則による医科2年の課程をも作った。当時の医学修業には容易ならぬ努力と費用がかかり、医学館創立以来の入学者数は319名に達したが、中途退学するものが多く、卒業できたものは僅か80名に過ぎなかった。そのため世間の需要に応じきれないので、略則医学生を募集し、医師の即席養成を図ったのである。



写真2-7 ホルトルマンの肖像
(記念館資料室保管)

石川県病院は医学館を継いだものであったから、当初から当然医育機構を含むものであったが、医学の進展とともに、医育部門の分離拡充が強く要請されるに至った。同時に富山・福井両地方民から病院誘致の陳情が相次いで行われた。1876年8月、遂に石川県病院から石川医学所が分離され、大田美農里が院長(病院用掛兼務)に、田中信吾が医学所長(医学所用掛兼務)にそれぞれ任命された。これが学校と病院の分立の始めである。同

第2章 前身各校

年10月、富山千石町に石川県富山分院が置かれ、田中信吾が現職のまま分院長兼任を命ぜられ、また越前福井に石川県福井病院を置き、馬嶋健吉を院長とした。翌77年、両病院にも医学所を併設し、生徒を養成した。1877年2月、富山分院を石川県富山病院と改称したので、石川県病院を石川県金沢病院に、石川県医学所は石川県金沢医学所とそれぞれ改称された。

大田、田中とともに長らく病院を支えてきた医学館主務医津田淳三は、1876年11月、54歳にして引退した（写真2 - 8）。淳三は資性豪気不屈、25歳で大阪の緒方洪庵の適塾に入門し3年間滞在した。学を論じては熱弁止まぬところから同輩の反発を招き、破門されるに至った。しかしその学徳は洪庵も認めるところで、塾頭であった同郷の渡辺卯三郎が辞め、塾頭を欠くことになった時、洪庵に請われて再び適塾に復帰、3年後に金沢に帰った。黒川良安は淳三の人となりを見込んで妹りせをその妻とした。著書に『脈論』があり、蘭書の翻訳も数巻に及んだ。1879年10月18日死去、享年56歳であった。

1878（明治11）年10月、明治天皇が北陸巡幸の際、金沢医学所に臨御され、伊東侍医、ホルトルマン教師が陪侍して、御前講演を聴召された。金沢医学所の建



写真2 - 8 津田淳三の肖像
（記念館資料室保管）



写真2 - 9 兼六園内に現存する金沢医学館

物は医学館から引き継いだもので、元は加賀藩家老の津田玄蕃の邸であり、金沢医学専門学校に至るまで引き続き使用された由緒ある建物である。これが文部省から県に還付され、県は教育記念物として永く保存するため兼六園内に移し、現在兼六園管理事務所として今日に至っている（写真2 - 9）。

ホルトルマンはスロイスの未だ着手しなかった局所解剖学・組織学・有機化学・毒物学などの講義を行ったが、その講義はあまりに精密にすぎ、かえって学生を倦きさせる傾向があった。今日、外科手術学6巻をはじめとして彼の講義録が多数、市立図書館および大聖寺稲坂氏宅に保管されている。ホルトルマンは短い4年の滞在中に、3人の子供をコレラで失った。1878年6月、彼は悲嘆の内に金沢を去って、新潟医学校に移り、1880（明治13）年8月まで滞在して故国に帰った。

1880年4月、オーストリア人のローレッツ（von Roretz, A.）（写真2 - 10）が後任として愛知医学校から来沢し、8月までドイツ語で講義している。これが蘭学からドイツ医学への転換期に当たり、彼が山形病院へ去るとともに、東京大学医学部卒業の外山林介、伴野秀堅の両医学士が教諭として来校した。当時東京大学医学部では、その講義の殆どがドイツ語で行われ



写真2 - 10 ローレッツの肖像
（記念館資料室保管）

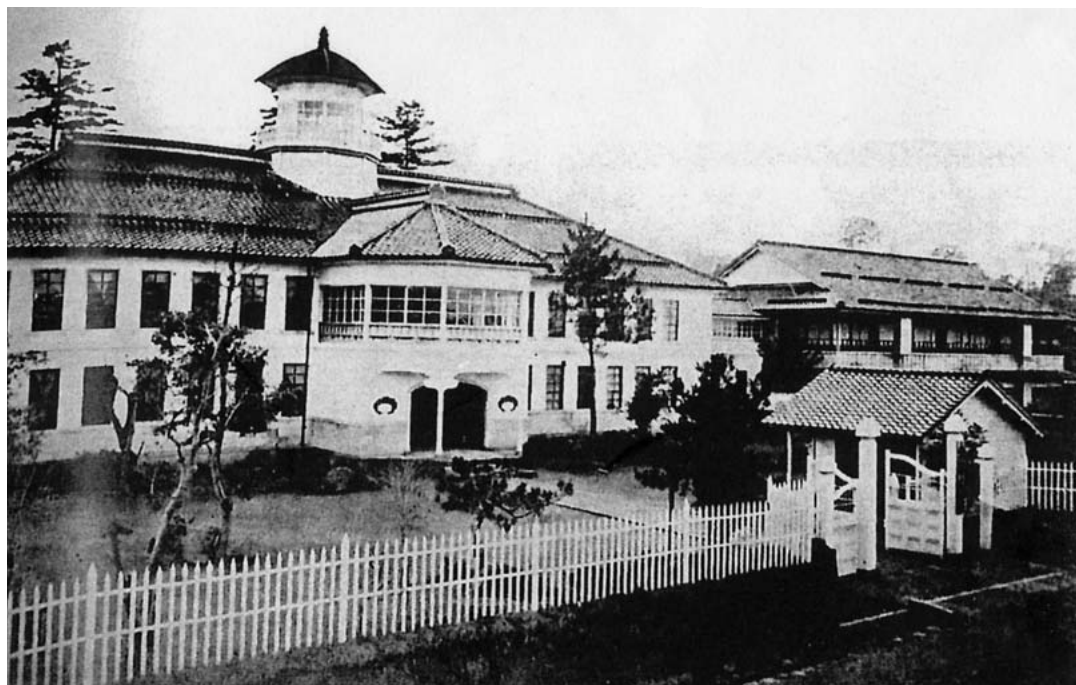


写真2 - 11 石川県金沢病院（1879年）

第2章 前身各校

ており、彼らは金沢の地で初めて蘭学者でしかも適塾出身者と接し、来るべきドイツ医学への橋渡しの役を果たした訳である。金沢病院（写真2 - 11）は1879年6月、殿町の松平大弐邸跡に新築落成し移転したが、規模の広大、外観の壮麗なことは北陸随一と称せられた。病院の旧建物は全部、医学所が使用することになり、9月には経費も医学所・病院両者を区別し、各々独立することとなった。

コレラの大流行と学会の成立

ホルトルマンの去る3年前、1877（明治10）年よりコレラの流行が相次いで起こり、1879年に至って大流行があった。9カ月間の患者合計が162,637人、その内死亡者105,786人（死亡率65%）の記録が残されている（表2 - 2）。北陸における79年の流行では患者総数29,808人、死者21,144人に達した。死者が相次ぎ、卯辰山の鷺谷火葬場では死さば体を捌ききれず、火葬場付近の野天で死体を井げたに積み上げて焼いたという。ロベルト・コッホ（Robert Koch）がコレラ菌を発見するのは、4年後の1883年で、このころはまだコレラが伝染病であること、患者の便が感染源として重要であるらしいことしかわかっていなかった。コレラはその後82年・85年・86年・90年・91年・95年と相次いで流行し、その都度はなほ高い死亡率を示した。

こうしたコレラの流行に際して、医師が一致協力して、お互いに治療意見を交換する必要に迫られ、1879年11月、ついに金沢の地に初めての学会、「金沢医事協同会」が組織される機縁となった。必要に迫られて学ぶために作られた学会であったが、その後、長く続いて8年後、金沢医学会に発展する源となる組織であった。さらに同年2月には、内務省が医術開業試験の制度を決め、日本官立医科大学（当時東京大学医学部のみ）並びに欧米の大学校医学科以外の卒業生が開業するに当たっては、理学・化学・解剖学・生理学・病理学・薬理学・内科学および外科学または専門各科の試験を実施する事を規定した。これによって医学所の卒業生は、開業医試験を受ける事を義務化されることとなった。明治維新から10年を経て、外からは疾病克服への要望が、内からは医学の質を向上させようとする気運が醸成され、医学界は次第に近代的体制へと向かっていった。

金沢医学校と地域病院の整備

1879（明治12）年11月、県は医学教育の統合強化を目指し、金沢医学所を金沢医学校と改称し、田中信吾を校長兼金沢病院御用掛に任じ、学事調査のため上京を命じた。翌年2月、田中信吾は帰郷し、学則および学科の改正を行った。医学館が修業年限を5年、医

表2 - 2 全国伝染病患者数

（1879年7月～1880年6月集計）

伝染病患者数	男	女	合計	百分率
コレラ	88,319	74,318	162,637	85.9
腸チフス	5,572	4,480	10,052	5.3
発疹チフス	1,439	902	2,341	1.2
ジフテリア	691	589	1,280	0.7
赤痢	4,381	3,788	8,169	4.3
天然痘	2,598	2,301	4,799	2.5
合計	103,000	86,378	189,278	99.9

学所が6年としたのに、ここでは医師速成を目指して修業年限を4年制と短縮し、国語をもって教育する学校として発足した。さらにかねての予定どおり、県は富山・福井の両医学所を金沢医学校に合併したが、現地での根強い合併反対の空気に配慮して、分校の形で旧地に存続させた。

これまで石川県は加賀・能登・越中・越前の4カ国に及ぶ大県であったため、各地の利害が一致せず、各地方の議員が医学所の争奪戦を演じて経費を分割したため、せっかく統合した医学所も再び分裂することになった。1880年6月に福井医学所、8月に富山医学所が再興され、さらに七尾にも医学所が設けられた。この年の2月には、大聖寺に金沢病院の分院が開設され、稲坂謙吉が院長に就任した。また3月には越中杉の木新に同じく分院が開設され、松田壬作が院長に就任した。

こうした医学所や病院の分散化は、経済的に共倒れの危機をもたらし、教育上も数々の欠陥が露呈されるに至ったので、田中校長以下全校生徒職員が4カ所分散の非を鳴らし、建白書を県令に提出して反対運動を行った。その結果、1881年、地方の反対を押し切り富山・七尾の両医学所が再び金沢に合併された。ただし、これより前2月に福井県が新設されたため、福井医学所および福井病院が分離独立した。

合併された医学校はさらに充実を図るため、理学士1名（今井省三）を雇い入れ、翌82年には校内手狭のため3講堂と東病室を増築し、寄宿舎を改築した。当時の医学校は生徒数240名、内医学生198名・製薬学生26名・予科生徒16名、一方病院は、入院患者数60名内外、外来患者800名内外で、田中の予言どおり病院は隆盛の道を辿っていった。

1880（明治13）年10月、黒川、津田に続いて大田美農里も老齢を理由に辞任した。大田は医学館設立当初からその運営に尽力し、石川県病院長兼医学所学長として医療に貢献した（写真2-12）。金沢病院新築のためにも、四方に奔走して資金を集め、北陸の地に一大病院を築くに至った。辞任後も病院および医学校の御用掛として奉仕し、晩年には金沢市医師会長も務め、1906（明治39）年4月藍綬褒章を授与された。



写真2-12 大田美農里の肖像
（記念館資料室保管）

医学教育制度の改革

1882（明治15）年5月、政府は1872年の改革をさらに進めるために医学校通則を改革し、医学校を甲乙2種に分け、甲種の修業年限は4年以上、乙種は3年と規定された。甲種医学校の卒業生は無試験で医師免許が与えられることとし、乙種医学校は速成のため簡易のものとした。両者で最も大きな差は教員の資格員数にあり、甲種医学校の教員中、少なくとも3名は東京大学において医学士の学位を得たものであることを要した。かくして

第2章 前身各校

東京大学を頂点とする医学教育制度のピラミッドが形成されることになった。

1882年には長崎医学校が直ちに甲種医学校となっているが、ほかの全国の医学校は乙種と規定されたわけであり、以後金沢も甲種と認定されるようひたすら整備を重ねた。以来、岡山・千葉・愛知・京都・大阪・神戸・和歌山・広島・三重・金沢の医学校が甲種と認定されるが、金沢の認定は84年まで待たねばならなかった。

金沢医学校が1882年末から84年にかけて、次々と東京大学出身の医学士木村孝蔵、佐藤廉、長谷川寛治、山崎兵四郎を招いているのは甲種医学校認可への努力の表れである。

一方、東京大学は甲種医学校を振興する責任を担うことになり、1879年に初めて医学士を送り出している。当時の東京大学の教授陣は内科教授のエルウイン・ベルツ（Erwin von Baelz）をはじめとして、すべてドイツ人教師によって構成されていた。金沢へ招かれた医学士も当然ドイツ医学の子であり、金沢の地へ蘭学に代えてドイツ医学をもたらす先駆者となった。最も前述のごとく、ホルトルマンが去った後、ローレッツが愛知医学校から来て衛生学・産科学などをドイツ語で講義しているが、彼は3カ月で金沢を去っているので、蘭学からドイツ医学への実質的な転機は、東大出身の医学士によってもたらされたといえよう。中でも木村孝蔵は蘭学の伝統を流し去る原動力となった。

東京大学出身医学士の甲種医学校における枢要な地位は、甲種医学校通則第10条「医学士ヲシテ主トシテ重要ナ学科ヲ分担セシムベシ」に示されている。即ちこの箇条の目的は、彼らが学んだ東京大学医学部の専門分科制度を普及させることにあった。しかし田中校長は、この分科制度に積極的ではなかった。彼の学んだ蘭方医学はこのような分科制をとれる状況でなかった上、学校出たての新学士が「1等教諭」として赴任して来ることにも首肯できなかった。木村孝蔵が後年、卒業生の訓示で述べるところによれば、

然ルニ、コノ蘭法医ノ今日ノ現状ハ如何デアルカ、一朝本元ノ和蘭ノ医学進歩ノ速力鈍リ独逸国ノ医学進歩隆盛トナリ我国ニ於テハ明治6、7年頃ヨリ独逸医学ヲ輸入シ東校ヲ置キ後ニ東京医学校、今ノ帝国医科大学起コリ独逸法ノ医師ハ医学士ノ看板ヲ真向ニ振り立テ進撃シタ、処ガ蘭法医ノ地盤ハ未ダ強固デナク且ツ実力ニ於テ乏シイモノダカラ一戦ノ下ニ敗レテ今ハ見ル影モナク漸ウ亦片田舎ニ追イ払ワレ僅カニ肩息ヲ吐イテ居ル（『金沢大学医学部百年史』）

こうしてかつては新しい時代の先駆者であった田中らも、ドイツ医学時代の奔流に流されていった。

1883年11月、医学校1等教諭佐藤廉は内科医長に、同じく木村孝蔵は外科医長に任せられ、翌年12月、校長田中信吾は学校を退いた。実際には、84年に入って久しく校長は学校に出仕しなかったという。田中は医員藤本純吉、伍堂卓爾、不破鎖吉および金沢病院事務長岡親明その他多数を引き連れ、尾山病院を組織し開業した。病院の位置は殿町の金沢病院とは目と鼻の先にある博労町であったから、患者はここに集まり、金沢病院は打

撃を受け一時寂^{さび}れたと伝えられる。

県ではかねてこの事あるを考え、岡山医学校から中浜東一郎医学士（ジョン万次郎の子）を迎えるよう予定していたので、知事岩村高俊は直ちに彼を発令した。1884年には1等教諭山崎兵四郎が眼科医長に、翌85年には1等教諭菅沼貞吉が婦人科産科医長を命ぜられた。ここに、当時4大学科といわれたすべてを分科制として完備し、制度上もドイツ医学への移行が完成したのである。

田中信吾は小松の生まれで、漢学者湯浅木堂の第2子である（写真2 - 13）。長じて田中謙斎の養子となった。1856（安政3）年、大阪の緒方洪庵の門に入り、7年間滞在し塾頭を務めた。1862（文久2）年故郷に帰り、加賀藩の命を受け、藩船発揮丸に船医として乗った。1865（慶応元）年金沢藩医学教師を命ぜられ、壮猶館で医書翻訳校正方を兼任した。黒川良安とともに養生所を興し、医学生の教育、病者の治療に当たった。棟取となっていたが、戊辰の役には陸軍に従い、帰って医学館文学2等教諭となった。廃藩置県で医学館が廃止となった際、津田淳三、大田美農里とともに医学館の経営に当たったのは前述のとおりである。以後、金沢病院主務医、金沢医学所学長、金沢病院長および医学校長を歴任、医学教育の発展に大きな貢献をした。1900（明治33）年1月23日死去。享年64歳、その墓は小立野天徳院にある。

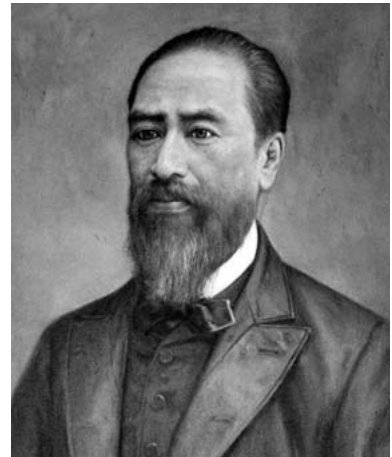


写真2 - 13 田中信吾の肖像
（記念館資料室保管）

（4）官立学校医学部の成立

第四高等中学校医学部から第四高等学校医学部へ

1886（明治19）年、文部省は高等中学校の設立を定め、全国を5区に分け、各区に大学予科としての高等中学校を1校ずつ置くことを決めた。石川県は新潟・富山・福井とともに第4区に属したが、この高等中学校が金沢に置かれることになった。当時、金沢には石川県専門学校や石川県甲種医学校があり、その設備も全国有数といわれていたので、新設高等中学校を北陸道に配置するとすれば、金沢が選定されるのが至当とみられていた。しかし、政府はその新設経費の一部を地元負担としたため、富山・福井は金力による誘致を画策した。当時の石川県知事岩村高俊をはじめ、石川県専門学校長・県会議長・県会議員らが運動して、78,023円の寄附を侯爵前田利嗣に請い、一般県民からの寄附を合わせ金沢に置く事を請願した。政府は遂にこれを容れ、同年11月、第四高等中学校を金沢に置くことを決定した。こうして1887年4月18日、第四高等中学校が開校され、初代校長に柏田盛文がなった。開校式は10月26日、文部大臣森有礼を迎えて行われた。

第2章 前身各校

政府は各県の医学校を官立として設備の充実を図るとともに、公立医学校は廃止する方針をとった。この時、岡山・長崎・千葉・仙台・金沢に官立の高等中学校医学部が置かれ、その後1892年に高等学校医学部と改称された。この施策のため、政府は1887年9月の勅令で「府県立医学校の費用は、明治21年度以降地方税をもってこれを支弁する」と命令した。この通達とともに、全国の多くの県立甲種医学校は廃校の運命を辿ることになり、公費の援助なしに独立して医学校を維持できたのは、京都（後の京都府立医大）・大阪（大阪大学医学部）・愛知（名古屋大学医学部）の3校に過ぎなかった。

1887（明治20）年8月、第四高等中学校に医学部が新設され、12月に木村孝蔵を医学部長とし、諸規定を決め、88年4月から開校するに至った。しかし、1892年、広坂から仙石町に跨る2万坪の土地に新校舎が出来上がるまで、医学部の教育は大手町の石川県甲種医学校の校舎で、病院における臨床実習は殿町の石川県金沢病院を借用して行われた。翌93年10月30日に落成式が行われ、31日に一般寄附者、11月1・2日に一般人、3日は各学校の生徒に観覧させた。観覧者は「雨天なるにもかかわらず、雲のごとく、蟻のごとく、実に数万の多きに達し、校舎の宏麗、各室の整備、器械、図書、薬品の夥しきに一驚を喫せざるものなし」という盛況であった。

第四高等中学校医学部の生徒定員は、4学年、200名と定められた。当時第4区内にあった石川県甲種医学校・新潟県甲種医学校・福井乙種医学校の在籍生、計170名が学力に応じて4年級に分けられ、1888年4月に入学した。入学生の等級別人数は、4年級32名・3年級34名・2年級40名・1年級64名で低学年ほど多かった。出身校別にみると、石川甲が101名・新潟甲35名・福井乙33名で、石川甲からの出身者が59.4%を占めている。出身地では石川県64名（37.6%）・新潟県38名（22.4%）・福井県35名（20.6%）・富山県22名（12.9%）で、北陸4県の出身者が159名（93.5%）を占めている。新潟県出身者がかなり多いことは、現代からみるといささか奇異に思えるが、その理由は学生達の上級志向と、編入学が容易であった（新潟は甲種であった）ことによる。1891（明治24）年の帝国統計年鑑によれば、金沢は、東京（人口139万）・大阪（48万）・京都（28万）・名古屋（16万）・横浜（12万）に次いで裏日本随一の都会（9万）であった。1887年、森有礼によって全国が5大区に分けられた時、北陸4県を占める第4区を中心として、高等中学校医学部が金沢に置かれる背景をなすのは、加賀百万石の余韻に負うところも大きい。

入学生を族籍別にみると、士族49名（28.8%）に対して、平民は121名（71.2%）を占めており、明治中期に高等教育を受けた生徒の内、平民の占める比率の最も多いのが医学部であった。この傾向は幕末に蘭学を志した者の出身が、下級武士や上級の農工商であったことと軌を一にしており、明治中期に至っても医師の職業は、社会的に中下層の者が身分格差を乗り越えるための飛躍台であったことをうかがわせる。

開学時の入学生170名の内卒業したのは128名で、転学者は7名（4.1%）、退学・除名・死亡者は計35名（20.6%）であった。転学者7名はいずれも第一高等中学医学部へ

転校している。

なお1894年6月、勅令75号で高等学校令が公布され、高等中学の名称は廃止され第四高等学校となり、したがって医学部も第四高等学校医学部となった。しかし県立病院と官立学校の併存という形態は、病院が官立に移管される1922（大正11）年まで続いた。

金沢医学会の発足と十全会の誕生

1887（明治20）年5月、甲種医学校が終わろうとする時、かつて金沢医学校で学んだ人達による会合が提唱され「医学二関スル諸科ヲ研究スル」目的で、丁亥医学会が結成された。これは同窓会と学会の性格を併せもった集会であった。それ以前に1879年、有志によって金沢医事協同会が設立され、研究活動が続けられていたが、89年5月、両者が合併して金沢医学会が結成された。初代会頭には木村孝蔵が就任し、月1回の講談会、隔月の会誌発行を行い、会員は医学博士・医学士・医師および医学生をもって構成する本格的な学会であった。92年5月の常集会は「鈴木本県知事も臨場せられ、一層の光栄をあたえたり」と記されており、当時の医学常集会がいかに社会的意義をもっていたかがうかがわれる。

1894年、第四高等学校の学生・職員・教授の間をより「円満融和に進行させる」ことを目的として、会をもつことが企画され、「十全会」の名のもとに、翌年2月、野田寺町（現在の寺町）妙慶寺で発会式を挙げた。初代会長は大島誠治、副会長は高安右人であるが、初期の役員・評議員中に多数の学生の名がみえるので、十全会の結成はむしろ学生の努力によっていたようである。

「十全」の名は、当時四高教授であった村上珍休が、校友会雑誌に付した「十全会雑誌」の名に由来するという。さらに「十全」の言源は、漢籍の十三経（孔子、孟子、毛詩、春秋左伝などが含まれる）の中の『周礼』^{しゅうらい}から取られたものといわれる。「十全」とは「治療をして十の内、十すべて完全なのを上とするが、これは十人のすべてを治すということではない。例えば十人とも不幸にして死ぬべき病であったとすればどうか、即ち、治す事の出来るものと不治のものをわきまえるなら、いかなる十人に接しても、皆当を得た治療をなすのであり、これを上とするのである」。換言すれば「医の力は十全ではなく、天の定める運命を十全に見透す」という意である。古今東西を通じて人の「死」が必然であるならば、「生」と「死」の見極めは医学の究極に位する判断であり、今日の医学を学ぶ者にとっても、「十全」は永遠の命題であろう。

金沢医学専門学校の独立と金沢病院の新設

1901（明治34）年、勅令24号で千葉・仙台・岡山・金沢・長崎に医学専門学校を置くことと規定された。かくてこれらの高等学校医学部は分離独立し、金沢では金沢医学専門学校が成立することになった。ただし、大手町から殿町にまたがって存在した県立金沢病院を臨床講義および実習場、四高内にやがて作る基礎講義場を分教場として出発したものである。

第2章 前身各校

その管理体制は、先の文部省直轄学校官制により前の第四高等学校医学部時代と何ら変わることはないが、1900年6月に「直轄学校長の職務規定」が制定され、これに従って医学専門学校は運営されることとなった。官制上の定員は、校長1人・教授13人・助教授5人・書記5人から成っている。初代の校長には高安右人が就任したが、管理機構の中に教授会をもたない医専校長の職務は大変な重責であった。

開設当時の講座は解剖学・生理学・病理学・薬物学・内科学（児科学）・外科学（皮膚病及花柳病学）・眼科学・産婦人科学・衛生学・法医学・倫理学・独乙語・物理学・化学・体操より成り立っていた。この教程は次の医科大学時代の雛形を成すものである。

1902年12月、予てから本学発展の原動力であった木村孝蔵が大阪府立医専に移る事になった。甲種医学校、第四高等学校医学部を経て金沢医学専門学校に至る20年間、文字どおり奮闘努力した木村の転任は多くの人々を悲嘆させた。外科医であった木村自身は、かねてより「学問なる世界の中に自分の領分を発見享有しなければならない、他人の発見せし処に借地住まいをすべきでない」と考えていた。しかし金沢医学校、金沢病院の設備は甚だ不十分で、何時希望が叶えられるか見通しが立たない状況にあった。校長職について自らの研究設備の充実を図る事も考えられるが、「私はまだ若いうちは当分校長職につき事を好みませぬ。今校長となれば勢い校長として公平に、まず外科以外の各学科を優先して整えなければならぬことは必^{ママ}常で有りまして、これは私の本目的たる研究に最も不利な点であります。好まない仕事を不利益と知りつつ為す事は出来ませぬ。」と、縷々大阪転任に至った苦しい心境を述べている。

木村が去って学校は医学博士を無くしていたが、翌1903年7月、校長の高安右人が、2年間のドイツ留学中に果たした仕事に対して医学博士の学位を授けられた。同年10月、「本学の名誉」たる学位の授与を祝う会が済々堂で開かれたが、さしもの広い済々堂も詰めかけた医師や650余名の学生で立錐の余地もなかったという。彼はベルリン市立病院で病理解剖を研修し、王立シャリテイ病院眼科部フォン・グレーフェ（Albrecht von Graefe）教授の処に滞在して帰国した。高安は1894（明治27）年から1924（大正13）年までの30年間、主事、医専校長、医科大学長を歴任したが、この激務の中で学位を得、かつ1905年に今日、高安病（脈なし病）として知られている疾患を発見している。

同1905年4月、本学卒業生の金子治郎がドイツ留学中の論文「鎌状縁および腱弓の人工作成」により、医学博士の学位を受けた。この祝賀会は本校にゆかりの深い養生所であった卯辰山で行われ、幔幕を巡らし600余名が集まってその榮譽を祝った。

1900年、新病院をどこに建てるかについて県会で議論がなされ「位置、水質、風景、空気、移転さすべき家屋の状況」を勘案して小立野が選ばれた。県は技師を福岡・長崎・熊本に派遣し、既に病院として完備していたこれらの病院の設計構造を見取り、文部省とも相談して1901年度より着工した。1905年に敷地総坪数22,260坪、建物坪数2,960坪、棟数43、病室82、収容患者数312名の新病院が落成し、8月9日に移転落成式が行われた。1901年度から5年間にわたった新病院建築の総工費は31万円に達した（写真2 - 14）。



写真 2 - 1 4 石川県金沢病院（1910年）

金沢医学専門学校は官立の専門学校として独立したといっても、金沢病院自体は県に所属しており、設立に要した経費のすべては県が負担している。ちなみに当時、県の年間総支出は100万円に満たない規模であり、病院建設の経費は県にとって大きな負担であった。

しかし、病院建設以後の経常経費は年間2～3万円であり、これは診察・薬価・入院料・手術料などの病院歳入でほぼ賄われる状態であった。以後、外来・入院患者数は次第に増加し、1904年1月中の外来患者数2,642、入院患者数2,371、その内月間の入院患者数400を超えた科は、脊柱四肢泌尿生殖器外科581、血液病および胸部内科507、眼科406であった。

その後も金沢病院の経営は好調に推移し、1910年度の外来患者数は76,085、入院患者延べ人数78,469、翌11年には外来患者数80,111（前年度比：4,026増）入院患者数延べ84,622（前年度比：6,153増）と急速に増加している。当時の報道によれば金沢病院は「近年稀に見る盛況を呈し、昨今のごときは内科・外科そのほか各科ともに1つの空室もなく日々数十名の入院患者を謝絶しつつありという」状況であった。その裏付けとして、1912年度の全国府県立病院の収支決算を比較すると、石川県金沢病院は収入113,463円、支出88,647円で、絶対額では大阪府の収入507,097円、支出489,927円に遠く及ばぬものの、収益率では21.9%と全国第1位の成績を上げ、2位広島島の17.9%、3位宮城の8.9%、大阪府の3.4%を断然引き離している（表2-3）。

1913（大正2）年の病院診療体制は、内科第1部及小児科部（教授1・医員3）、内科第2部（教授1・医員4）、神経科精神科部（教授1・医員3）、外科第1部（教授1・医員4）、外科第2部及耳鼻咽喉科（教授1・医員4）、皮膚及花柳病科部（教授1・医員1）

第2章 前身各校

眼科部（教授1・医員4）、婦人科及産科部（教授1・医員4）、調剤部7、技術部5、巡視3、管理部8、石川県警部1で構成されていた。

小立野台地に金沢病院が移ったので、隣接して金沢医専校を新築することが決議され、明治42年度予算として計上した35万円を都合により2分し、その半額16万円をまず支出して改築に着手した。この工事は、1911年初めに終わり、1912年度に至って本館並びに生理・衛生・細菌・病理・薬物・医化学の各教室が完成し、3月25日、大手町および仙石町の基礎校舎に別れを告げ、学校は小立野に移った（写真2-15）。ただし、解剖学教室と体操教室はまだ作られず、1914年まで旧地に残されることになった。

1915年5月11日、本校の小立野校舎への移転が完了し、これを記念して開校25周年式典が挙行された。この日を当時の新聞は「旺なる哉小立野の星、学園此処に移されて以来将に4星霜、これが野草茅屋の地は変じて殷賑の巷となる。医専学園の勢力や亦た偉大な

表2-3 府県立病院における収支状況

府県名	収入	支出	差し引き	収益率(%)
大阪	507,097	489,927	17,170	3.4
長崎	54,862	71,991	-17,129	-31.2
千葉	128,359	125,389	2,970	2.3
栃木	26,317	25,222	1,095	4.1
愛知	136,868	193,995	-57,127	-41.7
山梨	29,596	27,135	2,461	8.3
宮城	97,521	88,845	8,676	8.9
福井	24,284	22,336	1,948	8
石川	113,463	88,647	24,816	21.9
鳥取	18,231	18,625	-394	-2.2
島根	21,967	26,147	-4,180	-19
岡山	119,206	121,992	-2,786	-2.3
広島	80,295	65,952	14,343	17.9
愛媛	15,730	21,095	-5,365	-34.1
大分	43,314	69,043	-25,729	-59.4
佐賀	49,125	48,147	978	2
鹿児島	90,400	162,209	-71,809	-79.4
沖縄	10,209	26,538	-16,329	-159.9

注) 1912年度の病院収支、その他の府県は不明。

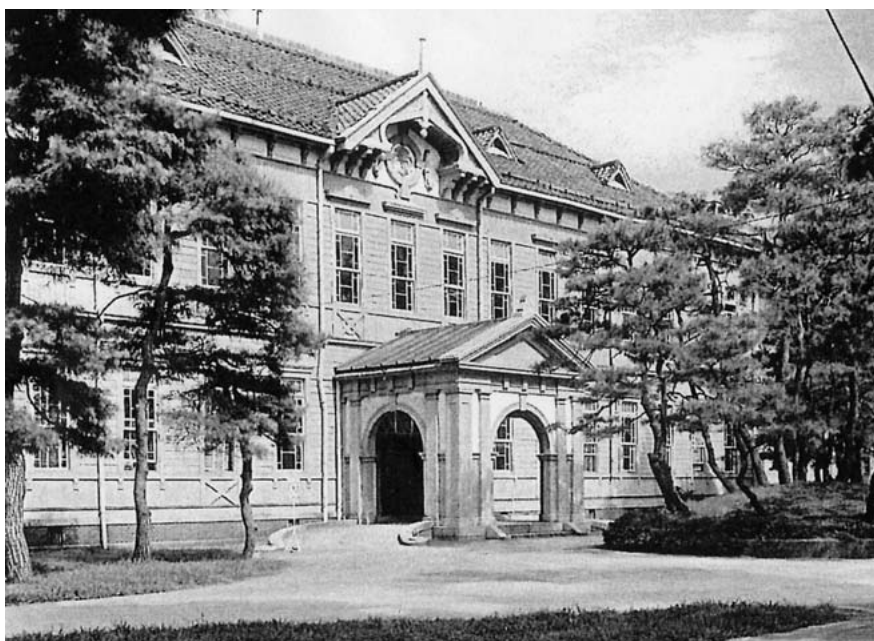


写真2-15 医学部本館（1962年）



写真2 - 16 当時の面影を残す開学当初の宝町キャンパス

りと言ふべし」と形容している（写真2 - 16）。

教育部門の整備と人事紛争

内科が2つに分かれたのは1897（明治30）年、外科が二分されたのは99年であったが、当時は内科・外科ともに未だ未分化で、後年内科から精神科・小児科が、外科からは耳鼻科・皮膚梅毒学科が分離独立した。

松原三郎は5年にわたるニューヨーク州立精神病理研究所での留学から帰り、1909年に教授として任命され、精神科は内科・外科・眼科・婦人科に次いで初めて独立した教授を迎えることになった。1912年には皮膚梅毒学科の教授として土肥章司を迎えたが、これは外科より分科したものである。同じく耳鼻科も同12年に外科の宮田篤郎が担当した。

従来、内科教授が兼務してきた小児科の担当者として、1914（大正3）年に洋行から帰ったばかりの林篤が当たることになった。林はその後、1922年6月に病院を辞めており、名実ともに独立した小児科となるのは次の泉仙助からである。

基礎医学に関しては既に「解剖（2人）」「病理」「衛生、生理、細菌」の4人の教授が担当していたが、1913年、医化学が新しく作られ須藤憲三が着任した。翌年、生理学が独立し、石坂伸吉が教授に就任した。15年には衛生、細菌学の教授として児玉豊治郎が着任した（当時のドイツ医学では衛生学の主力は細菌学で両者は分離していなかったが、1923年に衛生学から細菌学が独立する）。かくて1913～14年までにほとんどの教授が揃うことになった。

こうした医学校の整備過程において人の争いが起こるのは、歴史の常である。金沢医専

第2章 前身各校

は1916（大正5）年に早くもこの紛争を経験した。前年に卒業した助手・研究生の十余名を代表して解剖学助手岡本規矩男は、病理学教授福土政一に対し詰問書を出して辞職を勧告する事件が起こった。福土は新進気鋭の病理学者として学生の声望が高かったが、当時の東京大学出身教授の優れた学識、その強い自負に対して金沢医専卒業生の反発もあった。

後年、本校の解剖学教授となる岡本は、若くして頭角を顕わし、新しい脂肪染色法やゲラチン包埋法を発表して、医事集談会でも学問上福土と論争していた。この勧告を受けた福土はその意見書をストーブに投げ、辞職勧告を承諾の上「明日辞表を提出すべく就いては如何なる留任勧告を受くることあるも決して意思を翻し申すまじく云々」と答え、校長高安が懸命に慰留するも彼を引き止めることはできなかった。結局、福土は東大講師として去り、岡本は京大助手に転じて騒動は決着し、学園は正常化した。この辞任勧告は、岡本のパイオニア精神が爆発したものであったが、医専卒業生の間によろやく研究者としての自信が育ってきたという見方もでき、ドロドロした人事のもつれよりむしろ、学校創成期の勢いが余って起きた事件であった。

1920年末、既に官立5医専の内、新潟・岡山は22年に医科大学に昇格することになっており、23年には千葉・長崎・金沢が予定されていた。ここで起こった問題は医科大学を卒業すれば「医学士」であるのに対し、旧医専の卒業生は「金沢医学専門学校医学士」と限定される点であった。医専在學生は直ちに學生大会を開き、医専卒業生にもこの限定されない「医学士」の学位を与えられるべきことを主張した。医学校卒業者の資格は直ちに開業医としての個人の実益に結びつくため、何時の世にも紛争の火種となっている。この医学士称号統一運動は旧5医専の學生共々連合して行われた。医学専門学校が医科大学に昇格するためにはさらに大きな変化が起こりつつあった。1917年10月の勅令388号の大学令の中で、国家は大学を次の如く定義している。「大学ハ国家ニ須要ナル學術ノ理論及應用ヲ教授シ、並ビニソノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以ツテ目的トナシ、兼ネテ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ留意スベキモノトス」。かくして大学は教授陣に大学を卒業し、普く世界の潮流に触れた学者を呼ぶことを考えた。結果としては医学専門学校から育った学者が次々と学校を去ることとなった。

即ち内科第2部教授近藤清吾、小児科教授林篤、精神科教授松原三郎、衛生細菌学教授児玉豊治郎らが相次いで辞職していった。この後に、内科には大里俊吾、山田詩郎、法医学には古畑種基、生理学には上野一晴、耳鼻咽喉科には泉伍朗（後外科教授）、小児科には泉仙助、衛生学には星野鉄男、細菌学には谷友次が着任したが、いずれも若い東大出の學士であった。これらの優秀な人材は昇り籠のごとき勢いを大学に与えたが、反面からみれば、漸く伸びようとしている医学専門学校出身の學者の芽を刈り取る結果になった。

一方設備の面では、官立医科大学となる前に、病院の県付属体制を国家に移管する必要があった。種々折衝の末、1922年3月28日、金沢市公会堂で県立金沢病院の国立への移管式が行われた。当時の記録によれば、「県立に移行した金沢病院は明治38年より大正元年に至る間は年々歳入に不足を生じ、総計15万4千円の補足をしたが、翌13年より歳入

に余裕を生じ、本年度において負債額の全額を償却し、目下歳入出予算328,800円を算するに至った。即ち先に県債によって建てた金沢病院は、この年をもって負債を完全に終えたことになる。

(5) 金沢医科大学の成立と展開

金沢医科大学の発足と附属施設の整備

1923(大正12)年4月、官立医科大学官制の改正により、前年度に昇格した新潟・岡山に続いて、千葉・長崎・金沢の医専が医科大学として発足し、従来の専門学校は附属医学専門部となった。教職員の定員も大学長1・教授24・助教授23・助手62・事務官1・司書1・薬局長1・薬剤手10・看護長10・附属専門部教授7・助教授4と大幅に増員された。しかしながら実際の定員は官制に定められているものよりはるかに少ない数であった。即ち教授は医科大学時代を通じてほぼ20名に固定され、助教授は15~18名であった。この定員不補充の原因は予算の不足にあった。当時の医科大学長は附属医院も含めて大学予算出納責任者であり、経理の苦境を打開する手段として定員を充足しない方針を取ったのである。

医科大学はその講座設備費並びに維持費をすべて自己の収入支出で賄わねばならない状況にあったので、新設講座の実現は容易ではなかった。皮膚泌尿器科から泌尿器科を分離しようとする動きは絶えずあったが、当時1つの科新設には12~13万円、維持に2万円を要し、財政難から医科大学長によって拒否されている。今日のごとく、講座新設の予算が文部省より支給されるのとは趣を異にし、附属医院という大きな経営機構を抱えた医科大学長には、その後の歴史にみられない大きな権限が与えられていたのである。ちなみに1925年の教室費予算は総額12万円、各教室への配分は3,000~7,500円となっており、昭和に入っても大きく増額されることはなかった。

大学は4年制で、初めの2年間は基礎科目・解剖学・生理学・医化学・細菌学・薬物学・病理学を学び、2年に内科診断学と外科総論が加わった。3年4年は臨床科目・内科学・外科学・産科婦人科学・眼科学・皮膚科および性病学・耳鼻咽喉科学・小児科学・精神病学・衛生学・法医学を修め、最後に各科目について卒業試験が課せられた。授業料は年間75円であった。さらに大学には卒業後2年間の研究科が設けられ、研究の必要に応じて1年ごとの期間延長が認められた。

1926年5月11日、大講堂で医大昇格を祝う大学開学式が盛大に行われた。須藤学長の式辞に続いて、文部大臣、東大総長、慶応大医学部長北里柴三郎、侯爵前田利為、知事、市長、前医科大学長高安右人らが祝辞を述べた。実行委員には中村八太郎、泉伍朗、山田詩郎、山田邦彦が当たり、記念事業としては、式典・園遊会・来賓の学内参観・来賓の招宴・記念写真帳および大学施設要覧の作成・絵葉書の発行並びに一般市民への学内開放が企画された。参観第1日は来賓のみであったが、第2日・第3日の一般参観者はそれぞれ

第2章 前身各校

2万、1万5千に達し大変な雑踏であったという。

新しい医科大学の教授陣は、研究にも大きなエネルギーを注ぎ込んでおり、地方医師の医学知識の向上のため1925年から「医学講習会」を実施した。講習会は毎年1回、4週間以内、人数は1科40名以下とし、講習後修了証書を授与した。しかし参加者は必ずしも多くはなく、第1回（1926年）は33名、第2回は21名であったが、回を重ねるごとに参加人員は激減し、1933年の特別講演には2～3名となってついに休会となった。

国家財政と大学経営の逼迫

校費としての総予算は、やがて起こる満州事変直前の逼迫した国家予算の中で、1929年を境にして次第に縮小され、32年には2割程度を削減され、以後第2次世界大戦が終わるまで、遂に増加されることはなかった。1931年の内訳をみると、総支出1,197,000円の内28万円が俸給で校費は91万円である。その内病院および学用患者に59万円、研究費32万円（16万が教室研究費で16万が中央費）であり、この中央費は学長の強大な権力を象徴している。これらの支出に対する学校収入は、政府支出金がほぼ6割で、残りは病院収入によるものと思われる。この年大学は遂に赤字を出し、病院剰余金から補助を仰いでいる。

1905（明治38）年8月小立野に新設された病院は、全国の模範病院として喧伝されたものであったが、32年に入ると泉病院長は強くその改築を申し出て、文部省もその必要性を認めていた。同年3月、文部省建築課長が来校し、以来病院の設計プランを考えつつあった。既に改築を予測して外国の病院を視察していた須藤学長が、折悪しく1931年7月病に倒れ、翌年4月には学長も辞していたので、この計画は一時頓挫した。

当時の国家の緊縮財政の影響を受け、病院再建の予算は容易に通過せず、1934年5月に至って漸く設立が認められた。総工費490万円で改築延べ1万坪、竣工期間は12年の予定であった。この計画は1棟（現在の旧館6病棟）を38年に建てたまま、折からの日中戦争のため中断されてしまった。以後、残余の建物は遂に建てる事ができなかった。その後60年の歳月を経て、1998（平成10）年の病院再開発の決定によって、古色蒼然たる旧館1棟はその役割を終えることとなった（写真2 - 16）。

このころ、大学からの文部省への要求としては、前記の建設資金の設定と学用患者費の政府支出を求める声が強かった。大学は教育のために当然学用患者を置かねばならないが、病院支出の中で絶えず学用患者費を捻出しなければならなかった。しかし緊縮財政の中では、学用患者費を抑え、死体解剖数を減じ、実習教育を抑えがちであった。1935年の金沢医科大学の患者数は、一般患者数は入院3,665・外来21,032、計24,697、学用患者数、入院234・外来201、計435、合計25,132であった。この数字は、歴史的実績をもつ東大病院の総数114,221を別格としても、大阪大学の764,474の3分の1にしかならず、新潟・岡山・千葉・長崎・熊本の各大学も同様の実績で、病院経営の窮迫に苦しんでいる。当時の病院は収入支弁の原則によるものであったから、患者数の大きな病院の収入は当然

大きく、その病院発展の強い背景をなすものであった。したがって金沢のような中都市の大学病院はその経営が苦しいのは当然予想されることである。こうした状況に加えて、1927年に成立した健康保険法が漸く普及し、病院はこれらの患者に対しては「2割方安い料金でみる」よう決めねばならなかった事情も重なり、病院経営は苦しかったのである。

この難しい時代に、大学は1931年から学生定員を60名から80名に改めている。文部省は全国高校修了者の医科志望者が1,714名に対し、全収容数が785名にすぎず、929名もの高校浪人がいる事を理由に、各医科大学に定員を増加するよう学長会議を通じて申し入れていた。しかし各医科大学長の猛烈な反対を受けて実行できない状態にあった。

1930年、学長会議の席上文部大臣は「何とぞ火災に遭遇したりと思うてご辛抱を乞う」と頼み、文部省の強い要請で各医科大学とも増員に踏み切らざるを得なかった。この時、増加した学生に対する経費援助を要求したが、緊縮財政の下では遂に増額されることはなかった。財政逼迫のため同年、大学は各教室に対して定員の削減を求め、1930年に2人、31年に4人の定員を削り、32年はさらに1名を減らして56名の定員にするために苦しみ、結果的には病院規則の助手の定員を減らして報告義務のない有給副手を増やす方針を採った。

1930年といえば満州事変の前年に当たり、世界的大恐慌が日本にも波及して産業界は操業短縮に明け暮れ、ロンドン海軍軍縮条約を巡って政情不穏となり、浜口首相が東京駅で狙撃される事件が起きている。まさにわが国が世界大戦へと奈落へ落ちていく前夜であった。

大学と同窓会の衝突

医科大学の官制上では教授・助教授の進退に関する決定はもっぱら学長の権限であって、教授会の決定によるものではなかった。しかし教授の選考は教授会の合議によって決する風潮が一般となり、1927（昭和2）年、既に教授選挙に関する内規が決定されていた。しかし、漸く慣行となりつつあった選挙が学長権限とぶつかる事件が1932年に起きた。

須藤学長はその前年7月、脳溢血で倒れ病氣療養の身となり、中村八太郎が学長代行を務めていた。須藤は1932年4月、学長職を退き、後任に薬理学の石坂伸吉を文部省に推挙した。この新学長の下で折悪しく、金沢医専および金沢医大の卒業生と教授会とが対立する事件が起こった。

即ち須藤学長の医化学後任教授として、教授会は討議の末、1925（大正14）年に東大を卒業した助手の内野豊生を推挙した。当時医化学教室の助教授岩崎憲は東京薬学校出身で、医術開業試験を受けて医者になった後ドイツに留学、ダレム研究所のノーベル賞受賞者マイヤホーフの下で7年間研究を重ね、後に「アットメトリー」で学士院賞を受賞した程の学究であったから、同窓会は教授会の決定に一丸となって反対した。岩崎は地元为学校出身者ではなかったが、教授会の決定は東大閥一辺倒で地元無視の所作と感得されたのである。学生もこれに呼応し、授業放棄にまで至る勢いであった。学長自身、教授会が推挙した助手があまりに若いので気が進まず、容易に決断を下そうとしなかった。こうした選挙結果を無視する学長の態度を快しとせず、文部省まで陳情する有様であった。

第2章 前身各校

無論、文部省はこのような陳情に耳を貸すはずもなく、陳情書の支持者とみられる山田詩郎教授は辞職することとなった。結局、学長は教授会の上承を得た上、翌年1月岩崎憲を医化学教授として推薦するに至った。

岩崎憲の擁立をきっかけとして母校同窓生統合への自覚が生まれ、同窓会設立への機運が生じた。教授選が紛糾する最中の1932年7月13日、同窓会設立準備学内委員会が成立し、市内同窓の賛同を得て、全国の同窓生に趣意書が発送された。曰く「現在の十全会は同窓会として存在の意義少なきを思い、屢しば之が改善を企図したるも因襲の久しき到底改善の不可能なるを知ると同時に、前述の如き新時代の要求を充たすべき新鮮なる同窓会設立の極めて急務なるを感ず。即ち吾々は母校の健全なる発展と同窓の真の幸福を計らむために、母校出身者の凡てを網羅する強力なる真の同窓会を設立し、以って新時代に備えんと欲するものなり。」同年9月4日、大講堂で十全同窓会発会式が開催される運びとなった。その後、同窓会則が規定され、その会則に従って1933年4月15日、第1回十全同窓会総会が開催された。

同窓会が設立されるとともに今1つの問題が派生した。即ち、従来の十全同窓会は同窓会・医学会・校友会の3者を合わせたものであったが、このころになると、3者を結び付ける紐帯役をなしていた十全会誌が、昔日と全く異なるものとなっていたことである。この雑誌は初め同窓会員の通信連絡の役目をももっていたが、今や純粹に學術雑誌となり、同窓会誌としては相互通信の役割を離れてしまった。学生側からみれば、年額10円の会費は出しているも、難解で全く利用価値のないものになっていたのである。かくして、同窓会の分離とともに、校友会が医学会および『十全医学会雑誌』から分離するに至った。

(6) 戦時体制下の医科大学

軍国主義の台頭

十全同窓会の第1回総会が開催された1933(昭和8)年、中国におけるわが国の軍事行動は拡大の一途を辿った。ドイツではナチス・ヒットラー内閣が誕生し、国内では治安維持法によって左翼の一斉検挙が行われた。半年たらずの間に1,500名が逮捕され、拷問のあげく小林多喜二、岩田義道、野呂栄太郎が次々と死んだ。同年3月、日本は軍縮条約を不満として国際連盟を脱退した。その後は官僚もまた軍国主義に傾き、自由主義的教員を「赤化教員」と決めつけて検挙、追放が行われた。その数は思想事件98件、関係教員761名に及んだ。教科書も改定され、国家主義・軍国主義的色彩が濃厚になった。5月には京都大学で滝川教授処分問題が起こり、これに対して京大法学部教授・助教授・講師・助手ら39名が連名辞職をもって抗議、学生も学問の自由と大学の自治を掲げて鳩山文部大臣と対決した。その結果は政府の押し切るところとなり、各大学の指導的學生600余名が検挙され、滝川はじめ8教授が職を去った。

1937年7月7日、盧溝橋で日中戦争が勃発した。政府は「戦争」の名を避けて「事変」

と呼んだが、実態は日中戦争であり、以後政府の不拡大方針にもかかわらず、軍事的には一方的に拡大し、1941年12月の対米宣戦の布告へと発展していった。この間、生産資材原料は軍需が優先して使用するよう法律で規制され、次第に統制が敷かれていった。1938年4月には「国家総動員法」が公布され、その後は資金・資材・労務・物価・賃金・施設など一切の経済活動は政府が自由に統制できることになった。

戦時下の学制改革

戦争の影響は学園の至る所に及ぶが、まず受験生の減少として現れた。即ち1937年までは辛うじて入学定員80名に達していたが、軍需工業の発展・工業技術者の急激な需要増加・高等学校理科卒業生の減少などがあいまって、医科志望者は全国的に減少した。金沢医科大学でも第1次志望十数名となり、39年から高等学校文科生が無試験で第2次入学を許可されることとなった。さらに足りない人員は一般高専生からも募った。時代の要請でもある医者不足の対策として、文部省は高等学校生徒数を増加するが、戦局の拡大とともに軍部はさらに多くの軍医を可能な限り速やかに求めるに至った。この計画を遂行するため、軍部は修業年限4年の臨時附属医学専門学校の設立を計画した。この方針は、総動員法下では官制も出来上がらぬままに計画され実施されるのではないかと思われる程急速に進められた。

1939年2月、臨時附属医専の設置が文部省より秘密電話で大学に通達された。軍部は42年までに29,000人、44年までに51,000人の軍医を作る計画であった。当初私立医専を認可しようとの計画もあったが、政府はこれを採用せず、官立の医学校に附属医専を作る事を決めた。5月初めに至りようやくその要項が決まり、募集人員60名、入学試験は5月28・29日とし、30日身体検査、31日人物検査、発表6月2日、入学式は6月12日に行うというものであった。出願期間は5月25日までとなっているが、少なくとも5月3日の時点では秘密に保たれているから、はなはだ急なものであったことがわかる。

この臨時医専設置に伴う1939年度の設立予算・人員の予算などは全くなく、40年度にも配分はなく、41年度に至って僅かな予算を得ているに過ぎない。したがって、その教官職員は殆どを大学に頼っており、体制がほぼ整った1941年度の教官一覧をみても、大学教官との兼務が殆どであった。なお教官の中には佐官級の陸軍将校が配属され、教科に軍陣医学と教練が組み込まれている。

また戦時体制下において文部省は医薬制度調査委員会の答申に従い、1940年に学科課程の改革要綱を定めた。その要点は基礎学科を2年1学期で修了し、その後できるだけ臨床を履修させる方針であった。さらに翌41年11月1日、文部省は「昭和17年度在学年限マタ八修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」の通達を出し、大学および医専の修業年限の短縮を決めた。12月20日付の省令で「現在学部第2学年（医学部八第3学年）学生卒業期ハ昭和18年4月ナルヲ以テ授業（講義、実験、実習等）ノ進度ニ工夫ヲ凝ラシ、昭和17年9月マデニ最高学年ノ授業ヲ完結スルニ務ルコト」を求めている。即ち1941年度卒業

第2章 前身各校

生は3カ月短縮し、次年度より6カ月を短縮するものとした。

従来、4月に卒業し、翌年の入営期まで10カ月の余裕があったのに、この年は12月に卒業し、2月の入営、次の年は9月卒業、10月入営と年ごとに動員体制が強化された。このため在学中に徴兵検査を受けておく必要に迫られ、入営前の臨床卒業試験を考えると、基礎・臨床の講義は大幅に圧縮され、「せめて内科、外科を主として教える方針」を採らざるを得ないこととなった。1944年度からは医専入学生が160名の多数となり、教育は一段と困難になった。

学生の組織化と学徒動員

1940（昭和15）年11月、文部省は「学生修練組織強化二関スル件」として、学友会を報国団組織に変えるよう通達した。長い伝統をもつ十全学友会はこの趣旨に従い、十全報国団として改組された。その目的とするところは「今ヤ興亜ノ聖業日二進ミ皇国ノ使命益々重大ヲ加ウルノ秋高等学校教育ヲ刷新シ以ツテ負荷ノ大任ニ堪フベキ人物ヲ鍊成スルコト八目下喫緊ノ要務ナリ」とあり、学部・臨時附属医学専門部の職員（学長・教授・助教授・事務官・学生主事・薬局長・配属将校・講師・学生主事補・助手・副手）、研究科学生、専攻生および学生生徒をもって組織された。活動内容は総務部・鍛練部・国防訓練部・文化部・生活部の5部に分かれて、報国の精神に基づく心身一体の修練団体を目指したもので、まさに時代の精神を反映するものであった。

翌41年8月にはさらに訓令27号を発して、挙国一致体制を一層明確にする事を要求し、団の中に報国隊を作る事を命じた。即ち組織の軍隊化を目指したもので、隊本部、第1大隊（学部）、第2大隊（専門部）、特技隊（医療隊・防毒隊）および特別整備隊から成り、それぞれの中に中隊・小隊・分隊がある軍隊類似組織であった。こうした観念的な組織が実際どのように機能したのか明らかではないが、軍隊への入隊に際し学長が師団長宛てに報国隊除隊方を依頼しており、また父の死のため忌引きをする学生のために、師団長宛てに忌引き届けが出されている状況からして、日常生活にもかなり規制が及んでいたものと想像される。

1942年1月からは、学生の病院宿直勤労奉仕が始まった。学生に院内実習並びに病院の防空警備のためと称して夜間勤務を割り当てたもので、院内実習とはいいながら、出征で医局員の激減した各医局の手伝いという恰好であった。夏休みには、国民勤労報国令による学徒勤労働員として、学生は無医村へ報国隊活動に出かけた。当時の記録によれば、兵庫県有年村上灘村に行くよう依頼されていたが、その後、勤務場所は近県主要病院に改められ派遣された。この勤労奉仕は必須課程であり、学生は帰学後、報告書を提出することを義務付けられていた。学生は夏休み返上というのに暗さはなく、食糧の不足な時代に「食事はどれだけ食っても無制限」の状況を楽しむ気配すらあった。

1938年から敗戦の年に至るまで行われたものに「日本文化講義」がある。「国体、日本精神ノ真義ヲ明ラカニスルト共ニ時局認識ヲ深化セシメ、日本文化ノ創造ニ関スル指針ヲ

与へ、以テ教学刷新ノ目的ヲ達スル」ために文部省教学局が実施したものである。

以下に本学で行われたその演題と講師をみれば、講演の意義は自ずから明らかであろう。

昭和15年	日支事変*に対する欧米世論の動向	衆議院議員	鶴見祐輔
	世界文化史上一大革新の機	元資源局長官	松井春生
	我が国の鉱物資源について	東京帝国大学教授	加藤武夫
昭和16年	大陸における防疫について	陸軍軍医学校教官陸軍少将	石井四郎
	第二次世界大戦*と我が国の立場	衆議院議員	池崎忠孝
	医療と宗教	法隆寺管長学士院会員	佐伯定胤
昭和17年	現大戦の兵器	東京帝国大学教授	青木 保
	日本文化と科学精神	第一高等学校長	安倍能成
昭和18年	皇国史観	神宮皇学館大学長	山田孝雄
昭和19年	戦争と精神医学	東京帝国大学教授	内村祐之
昭和20年	新しき日本の進路	京都帝国大学教授	高田保馬

(*は参照資料のママ)

すべての講義を通じて、医大医専の学生共々出席がとられているが、95%に近い出席率であり、日本全体が挙国一致の雰囲気にもまれていたことが感知される。

結核研究所の成立

戦局たけなわの1941年1月、薬理学助教授岡本肇は結核研究施設の責任者として教授を拝命した。長い間医科大学長は附属病院を抱えての出納責任者として、新教室の設置を拒み続けてきたのであるが、このころに至ると、戦時下の物価上昇や経費不足で大学予算は一方的に赤字となり、かつての大学特別会計法の自主性は崩れ、政府の意向によって新施設が制定される状態となっていたのである。石坂学長は政府に戦時下の国民栄養を考えて「栄養研究所」を目論んでいたが、政府と話し合いの結果、結核研究所の設立という企画に変わった。しかし、金沢医科大学に結核研究所ができるのには、それだけの必然性があった。石川県は1927年以来、42年に至るまで、人口1万人当たりの結核死亡率は28.74～34.40人と、2位以下を断然引き離して全国1位を続け、多年にわたり結核に悩まされてきたからである(表2-4)。

1942年にはさらに研究所として昇格し、教授2名・助教授3名・助手6名の陣容となり、大里内科助教授の日置陸奥夫がこれに参加した。結核研究所の設立もあって、石川県では広く結核予防対策がとられ、その効果も次第に上がり、敗戦直後においては、結核死亡率は全国11位にまで低下した。これには政府が本腰を入れて農村結核予防対策に着手し、

第2章 前身各校

帰郷者結核検診・患者の療養指導・住宅の改善を行い、石川県を結核予防特別実施区域に定め、官民一体となって5カ年計画に取り組んだため、特に青少年の結核死亡率は1940年の5分の1にまで低下するという輝かしい成果を収めることができた。この成績は結核対策の効果を如実に示すものとして、世界の結核史上特筆すべき業績であった。

表2 - 4 全国府県別全結核死亡順位と人口1万人当りの結核死亡数

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5位
1927～31年 (昭和2～6)	石川 28.74	大阪 25.72	京都 25.47	東京 24.17	福井 23.12
32～36	石川 30.68	京都 25.76	大阪 25.31	福井 24.38	北海道 23.95
37	石川 34.4	北海道 26.39	京都 25.66	兵庫 25.55	大阪 24.81
38	石川 33.6	北海道 27.13	京都 26.17	大阪 25.48	東京 25.37
39	石川 30.51	北海道 29.46	京都 26.28	大阪 26.19	兵庫 25.94
40	石川 32.39	北海道 28.57	京都 26.28	大阪 25.78	福井 25.02
41	石川 29.84	京都 27.12	北海道 26.30	大阪 25.71	徳島 24.45
42	石川 29.74	北海道 28.08	京都 27.78	大阪 25.29	青森 24.78

敗戦直前の医科大学

1943年の初め、陸軍の要望で、医大・医専の最高学年に対して軍事講習の時間を設定することになった。学長はこれに対し「この種のことは応諾せざるべからざるものと考え、予め時間割において考慮し置く要あり」と説明した。翌44年、大学の定員を100名とし、医専定員を160名とした。

しかしこの年7月、マリアナ諸島を失ってからは、戦局は急速に敗戦への道を辿ることになった。11月以降、マリアナ基地からの米空軍の本土爆撃が始まり、1945年3月9日から10日にかけての東京大空襲を最初として、焼夷弾による都市の無差別爆撃が開始された。東京では22万戸が焼失、死傷者12万人・罹災者100余万人に達した。続いて13日に名古屋・14日大阪・17日神戸が爆撃を受けた。4月1日には沖縄本島に米軍が上陸、6月23日守備隊は全滅し、もはや敗戦は時間の問題となった。8月6日、広島に原爆が投下され、推定14万人の死者を出し、さらに9日、長崎の原爆投下により死者は推定7万人に及んだ。

このように追いつめられた情勢の中で、金沢医科大学も急速に疎開先を探す必要に迫られ、吉野谷・小野慈善院・若松療養所・医王園・白雲楼・美川町熊田邸・農事試験場・富山化学石動工場へと疎開しつつあった。また焼夷弾による類焼を防ぐため、8月9日、附属病院と校舎の1割を取り壊した。しかし8月15日、日本はポツダム宣言を受諾し、天皇の「終戦」の詔勅放送によって太平洋戦争はようやく終結した。

(7) 新制金沢大学へ向けて

戦後の金沢医科大学

1945(昭和20)年10月、連合軍司令部(GHQ)による「日本教育制度に対する管理政策」が出され、司令部から米国陸軍省に依頼して送られた米国教育使節団により46年3月、報告書が提出された。その中で「個人の価値と尊厳に対する認識」に立った教育理念が表明され、後に大学制度にも影響する6・3・3制が勧告された。連合軍軍政部司令官は46年5月29日付で金沢医科大学長宛てに通達を出し、「昭和20年8月以降の学制改革に関する日本政府の諸命令書」の提出を求めた。通達は敗戦後、学校教育の運営・実践について発せられた日本政府の指令、通牒文のすべてを提出するよう命じたもので、当時、連合軍によって教育制度の根本的な見直しが進められていたことを示している。

その結果、47年3月、わが国の新しい教育の基本として「教育基本法」、「学校教育法」が、同年7月にはわが国の大学の基準を示す「大学設置基準」が制定された。この学校教育法によって6・3・3・4制が制度化され、新制高等学校を卒業したものは、制度上の格差のない新制の大学に進学し得るという制度が規定された。ここに米国使節団の勧告に従い「少数者の特権と特殊利益が多数に開放されるため」、帝国大学や旧制医科大学は廃止される運命となった。

敗戦当時の金沢医科大学における学生数の動向をみると、1945年に行われた高等専門学校第2学年修了者および大学予科修了者に対する金沢医科大学入学検定試験では、97名が受験し、10名が合格している。この数は戦時中の1941~42年の志願者321~336名、合格者40~67名を大きく下回っており、戦後社会の混乱を裏付けている。しかし1945年、卒業生は医学科77名・医専76名、46年、医学科74名を数え、それまでの年平均である医学科75名・医専60名と変わっていない。また1947年度の入学試験募集定員は80名で、これも例年と変わりはない。

さらに48年における在学学生数は表2-5にみられるように、医学科は定員400を超える420名、医専は戦後募集がないため340名と僅かに定員を下回っている。なお医専は1951(昭和26)年に最後の卒業生35名を出して終わりとなり、医学科学生は新制金沢大学へ編入されていくこととなる。

教育については、1946年

表2-5 金沢医科大学医学科及び医専学生生徒数(1948年)

大学医学科学生生徒数		医学専門部生徒数	
1939年入学 (昭和14)	2	第1学年	0
		第2学年	0
40年入学	1	第3学年	36
42年入学	6	第4学年	167
43年入学	9	第5学年	137
44年入学	83	合計	340
45年入学	98	(定員数)	(350)
46年入学	61	医専卒業生	
47年入学	78	1948年 (昭和23)	72
48年入学	82	49年	135
合計 (定員数)	420 (400)	50年	155
研究科学生	5	51年	35
専攻生	80		

第2章 前身各校

10月に実施された「学科課程及び授業時間数調」が残されている(表2-6)。その内容は知るべくもないが、授業時間数の総計は4,116時間を数え、1940年に改定された学科課程と授業時間数は維持されている。また研究の指標である学位論文審査状況を教授会記録から調べると、1945年34編、46年21編、47年22編、48年36編、49年37編が学位を与えられており、戦後の混乱期にあっても地道な研究努力が続けられていたことがうかがわれる。

表2-6 医学科課程及び授業時間数

(1946年10月調べ)

科目名	授業時間数	科目名	授業時間数
解剖学、実習	770	内科学	518
生理学、実習	287	外科学	532
医化学、実習	224	産科学、婦人科学	210
細菌学、実習	252	眼科学	112
薬物学、実習	182	耳鼻咽喉科学	154
病理学、実習	441	小児科学	98
衛生学	98	精神病学	70
法医学	98	理学的診療学	70

医師国家試験とインターン制度の導入

連合国軍最高司令部は、日本の医療制度・公衆衛生行政・医師会組織などさまざまな改革を厚生省に指示し推進した。その中心となったのはGHQの公衆衛生福祉局長クロフォード・F・サムス(C.F.Sams)大佐で、戦後日本の医療・福祉制度や公衆衛生行政の骨格のほとんどを形作り、彼の考え方や個性が大きな影響を残した。

医学教育の改革と医師の資質の向上は、敗戦後の緊急課題であった。前述のごとく戦時中軍医を中心に多数の医師を養成するため、数年の内に医学専門学校を一挙に45校にまで急増させた。敗戦当時、日本には約77,000人の医師がいたが、内3分の2の48,000人が医専の卒業生であった。サムスの回想によれば「医専は臨床や教育上の施設が不十分で、臨床教育のための附属病院すら保有していなかった」。敗戦の年には「歯科医を1年以上経験した者は、医師の試験が受けられ、合格者は6カ月間、医師の訓練をした後免許を与える」という緊急措置令が出され、試験準備のため2カ月間の集中講義まで行われた。

このような医師の促成教育と戦後の混乱で、敗戦直後の医学教育と医療水準は大変貧弱な状態になっていた。サムスは従来の日本医学が「障壁主義とでも呼んだらよい排他主義に導かれている」こと、「近代的な実験と批判による理解方法の代わりに、正統主義が支配をほしいままにし、伝統に執着する古ぼけたドイツ式の体系が君臨している」ことに対し、その貴族主義と学閥重視の弊風を一掃するために改革を進めた。1946年2月、サムスは「医学教育水準改革に関する覚書」を厚生省に示した。さらに米国の医学教育制度改革のやり方になって、医学教育審議会を発足させた。審議会の発足総会で、「すべての医学生に対して一流の医学教育を施さねばならない」と医学教育の改革を勧告し、インターン(実地修練)制度と医師国家試験の導入を指示した。

これを受けて同46年8月、国民医療法施行令が改正されて、「医師、歯科医師の免許を受けるには、国家試験に合格しなければならない。国家試験の受験資格として、医師の場合は、所定の医学校を卒業した後、1年以上の診療及び公衆衛生に関する実地修練を経た

なければならない」とされた。従来は医学校を卒業して直ちに医師免許を得ることができたのに対して、これは大きな変革であった。同年7月、医学部長および医科大学長会議で医師国家試験実施要綱と要領が発表され、続いて開かれた全国附属病院長会議で「実地修練実修要項に基づくインターン病院と配置決定要領」が発表された。これによって第1回の医師国家試験は46年11月に実施された。全国で1,594名が受験し1,363名が合格している。金沢からは66名が受験し、52名が合格、その合格率78.8%は全国平均の85.5%をやや下回っている。

一方、インターン制度は1947年の学制改革を受けて、48年から本格的に実施された。本学では修練期間を46年10月1日から47年3月31日までとし40名を受け入れ、53名の志望者から抽選で選んでいる。修練内容は内科系10週・外科系10週・産科婦人科2週・公衆衛生4週を割り当て、各科から選ばれた医師3名が指導に当たっている。実施要項の中には「修練生の身分は別に考究の上定める」とあるが、その後何らの考究もなされなかったのが実状で、その不安定な身分がのちのインターン闘争の原因となった。

卒後研修の人材も設備も整っていない環境で、理念と制度だけが先走りした結果は、『部局編』で述べたとおり、学生運動に火をつけ大学紛争を招くこととなった。サムス自身、後に回想録の中で「私はインターン制度の決定が賢明であったかどうか、今でも自信がない」と述懐している。サムスの危惧したとおり、インターン制度は日本に根づかず、約20年後の昭和40年代に、大学紛争をきっかけとして廃止された。

北陸医学会の成立と推移

既に述べたごとく、1889（明治22）年に木村孝蔵を初代会長として発足した金沢医学会は、1948（昭和23）年8月、北陸医学会に発展吸収されることとなった。これより先、中央では同年2月6日、日本医会恒久化委員会および分科会長会議で、この会と日本医師会との合同が正式に決定され、日本医学会は日本医師会の一構成体となった。この合併が機運となって、石川・福井・富山の3県医師会および金沢医科大学を包含する北陸医学会設立の議となったのである。

大学では48年1月初め、既にこの方向に添って従来の金沢医学会を改組し、また雑誌改善の議が討議され、この委員として渉外委員であった岡本肇、平松博、石川太刀雄丸、秋元波留夫の4教授のほか、宮田栄、倉知与志、大谷佐重郎を委員として選びこれに備えさせた。また北陸3県の医師会とも北陸医学会の設立を巡って討議を重ね、9月に入って3県の医師会長と大学側の合議がまとまった。会長には石坂伸吉、副会長には佐口栄が選ばれ、北陸3県医師会にそれぞれの支部が作られ、大学内にも十全医学会ができた。かくして同年11月23日、北陸医学会創立総会兼第1回学術大会が大学において開催され、北岡正見博士（予防衛生研究所）による特別講演「日本脳炎について」と、69題の一般講演が行われた。

以後、北陸医学会学術大会は会長 会頭の体制で、1997（平成9）年までに51回開催

第2章 前身各校

された。当初北陸3県医師会と官立金沢医科大学（現金沢大学医学部）によって発足したが、医学校の新設に伴い、漸次金沢医科大学・富山医科薬科大学・福井医科大学が加わり、3県医師会と4大学の機関から構成されるに至り、1991年に会則および申し合わせ事項が大幅に改正された。即ち理事長 当番会長制となり、当番会長は各大学持ち回りとなつて、本来北陸3県医師会が中心となり、医学校が学術的協力をしてきた体制が完全に崩れる結果となった。また金沢大学十全医学会雑誌に掲載されていた分科会を含む学会記事も廃止された。

北陸医学会は明治の中期に全国に先駆けて創設され、第2次世界大戦中に一時中断したものの、戦後新生北陸医学会として再出発し、今日まで続いた伝統ある学会であるが、時代の変遷とともにその学術的意義が消褪して、1998年、事実上幕を下ろすこととなった。

【注記・参考文献】

1) 大学・学校史

『金沢大学医学部百年史』

『金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み』

『金沢大学医学部十全同窓会報』

『金沢大学十年史』

『北の都に秋たけて-第四高等学校史』 財界評論新社 昭和47年

2) 医学部事務簿冊関係（医学部庶務係所蔵）

教授会書類（昭和17～24年） 入学願書受付簿（昭和14～17年） 専攻生入学願書（昭和16～20年） 学生生徒募集（昭和22年） 学士試験（昭和17～22年） 陸軍関係書類（昭和12～18年） 文化講義関係書類、統計書類、人事に関する綴（昭和15～20年） 教員検定書類（昭和17～22年） 就職に関する書類（昭和18～19年） 休学・応召に関する書類（昭和15～18年） 来翰綴（昭和15～23年） 挨拶状綴（昭和17～22年） 十全学友会書類（昭和21～23年） 雑綴（昭和19～23年） 雑件（昭和19～23年）

3) 医学史

『日本医学史綱要』（上・下）富士川游 平凡社東洋文庫 昭和49年

『日本の医療史』 酒井シズ 東京書籍 昭和57年

『医学の歴史』 小川鼎三 中公新書 昭和53年

『おらんだ正月』 森銑三 富山房百科文庫 昭和53年

『緒方洪庵伝』 緒方富雄 第2版増補版 岩波書店 昭和52年

『緒方洪庵と適塾』 適塾記念会 平成5年

『緒方洪庵の蘭学』 石田純郎 思文閣出版 平成4年

『日本医家伝』 吉村昭 講談社 昭和46年

『戦後日本医療の歴史』 有岡二郎 日本医事新報3667～3799号 平成6～9年
『日本医学会総会』 百年のあゆみ 第25回日本医学会総会 中山書店 平成11年

4) 郷土医史

『石川百年史』 石林文吉 石川県公民館連合会 昭和47年

「加賀百万石」 北国新聞連載記事 平成10年

『刀圭雑話』 「医海時報」1001, 1006, 1015号 明治27年

『白神記』 笠原白翁 福井県医師会 平成9年

「黒川自然翁の顕彰に関する史料」 寺畑喜朔 『石川県郷土史学会会誌』31号

「金沢医学館関係の史跡について」 加藤豊明 『金沢市医師会史』 平成10年

「金沢医大浄化運動の真相と教授評判記」 板緑秀太郎 『金沢医大文人会』 昭和7年

「第四高等中学校医学部開学時の入学生徒について」 赤祖父一知 『北陸医学史』

19:11～19 平成10年

「十全医学会の源流と金沢病院医事集談会の沿革」 寺畑喜朔 『北陸医学史』

18:44～51 平成9年

「郷土医史資料」 寺畑喜朔・赤祖父一知 『石川医報』1088～1199号 平成8～11年

「北陸医学会の沿革」 赤祖父一知 『石川医報』第1191号 平成10年

『金沢の医学百年』 寺畑喜朔編 ヨシダ印刷 昭和51年

2 金沢医科大学附属薬学専門部

(1) 起源

金沢大学薬学部は、1867（慶応3）年に進歩的思想の持ち主であった加賀前田家14代藩主慶寧（よしやす）が福沢諭吉の『西洋事情』を読み、西洋では社会事業が盛んで公共施設も完備されていることを知り、貧民病苦の救済が急務と考えて設けた卯辰山養生所（棟取：黒川良安）で洋式による治療と教育をはじめたが、これに製薬所と薬圃が付設された時を創立時期としている。養生所の下手、子来坂（こぎさか）の北側にあった製薬所では薬圃の植物よりシロップ、エキスやチンキ類を調整するとともに、舎密局、酢酸局、雷汞局等もあり、硫酸、塩酸、酢酸や雷汞（火薬）を製造した。アドレナリンやタカ・ジアスターゼで知られる高峰讓吉の父で蘭医の高峰元桂（げんろく）は化学的知識があったので舎密局総理となり、鈴木儀六とともに医学の一般教育として薬学関係の化学、植物学、薬剤学が講じられた。金沢大学医学部は1862（文久2）年に種痘所を設けた年を起源としているので、これに倣ったものと思われ、金沢大学薬学部は百年祭を1967（昭和42）年10月28日に挙行している。

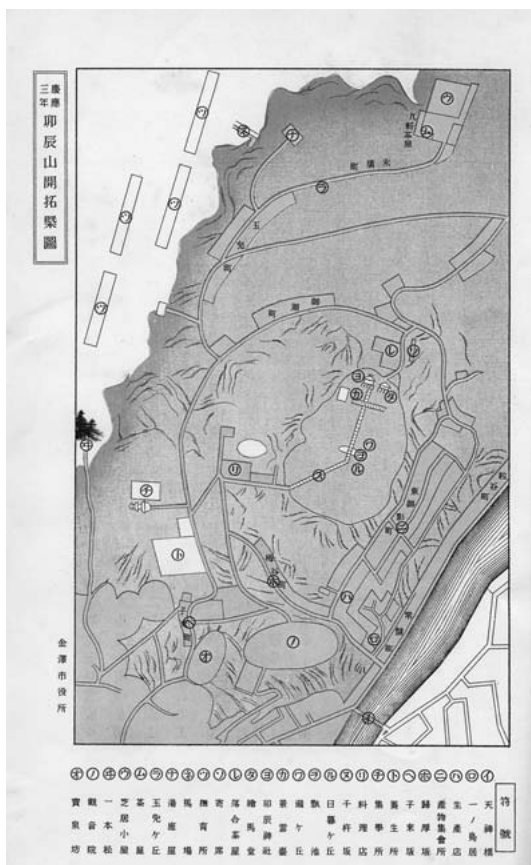


図2-1 養生所製薬所・所在地の図面
慶応3年卯辰山開拓築圖
（『稿本金澤市史』市街編第1、1916年より）

(2) 草創期 藩校の時代（1867～71年）

卯辰山養生所開設の翌1868（明治元）年、藩は養生所を医学校に改組し、70年に卯辰山は不便だとして大手町（現在の医師会館）に移り、医学館と改名し、卯辰山養生所は貧

民や服役中の病人専用とした。医学館は予科と本科よりなり、修業年限は5年であった。予科では理学および化学が課せられ、本科では医学系課目のほか、毒性学、製薬学、処方学、調剤実習等の薬学的課目が教授されていた。

1871年3月、オランダ一等軍医ペア・スロイスが着任し、「欧州においては薬剤師なるものがあり、医師と相併んで保健の責に任じている」と、薬剤師の必要性を説いた。その奨めによって希望した2、3人に薬学の講義をしたが、生徒は途中で医学に転向した。彼は医学講義と診察のかたわら理化学も教授していたが、医学館が入院患者の増加で狭くなったこともあって、薬学専修生を西洋式に養成する目的で理化学系の分離を試みた。

理化学校を開く 1871年7月、理化学校を兼六園内の「時雨亭」跡に設立し、「それ理化二学は百般の學術、技芸この学を基礎とせざるはなき故に、すべて學術に志す者は語学、数学をへれば理化両学を学ばずんばならず。之を習熟して後、始めて諸般専門の学科に就くべし」と述べた開設趣意書を発して学生を募集した。

当時の学科はスロイスの理科講義、化学原書輪講および理科学訳書輪講であり、梅本町に付設した実習場（約306坪）では製薬が行われていた。

しかし、1年を出ずに廃藩置県の大変革に遭い、さらに1872年4月の閉鎖令により、



写真2 - 17 蘭医ペア・スロイス



写真2 - 18 時雨亭跡

文部省の直轄化への努力も空しく、藩の諸学校は医学館をはじめとしていずれも廃止された。

(3) 形成期 県立移管より私立北陸薬学講習所時代(1872~89年)

1872(明治5)年4月、医学館は金沢町より従来の建物諸器材を借用して、私立の金沢病院と改名して診療と教育にあたったが、薬学はその医学所製薬学科として、病院薬局内に名脈を保持するだけであった。

初めての卒業生 1873年3月より石川県の補助が得られることになり、翌74年(9月に東京医学校製薬科が初めて学生募集をした年)には初めて4~5人の薬学志望者があった。その内、3名は1879年5月に卒業し最初の薬学修了者となったが、この中に堤従清(後述)がいる。

1875年8月より石川県立となり、翌76年8月には診療(金沢病院)と教育(医学所)に制度的にも分離し、薬学教育は医学所内に薬局学科として再発足した。

講義は普通植物学・物理学・無機化学・有機化学・薬用植物学・普通動物学・分析学・毒物学・製薬学・調剤学の10科目であり、実習は調剤実地演習・生薬学・製薬学・分析学の実地演習の4科目であった。

1878年7月、学科課程を改変し、教科として数学・物理・化学・普通植物学・普通動物学・薬物学・処方学の7科目としたが9月には毒物学を加え、さらに翌79年11月には製薬化学・分析学・調剤学を加えて数学と薬物学を削った。

1880年に金沢医学校製薬学科と改称した。修業年限は2.5年で、半年ごとに進級試験を行い、希望者にはさらに半年の補習をした。この年、東京医学校製薬科助教であった大井玄洞(加賀藩士)が帰郷し、ドイツ語に堪能だったので新しいドイツ流の生薬学を講じているが、84年に陸軍薬剤官に転じた。(後、累進して1896年陸軍中央衛生材料廠長になる。)このころより、金沢医学はオランダ医学よりドイツ医学へと転換しはじめている。

形成期の卒業生については、学校にも正式な記録がなく詳細は不明であるが、約20名と推定され、学校に残り教鞭を執りつつ修業した後、陸軍薬剤官になった者が多く見られる。鞭草会生まれる 1883年2月、渡辺為三郎(卒業生)の主唱で金沢在住の薬学関係者で鞭草会(石川薬舗会・県薬剤師会の前身)が結成され、薬学上の知識の交換や親睦とともに堤等を講師として講習会を開いて諸学科の授業を行った。講習を受けて薬舗試験に検定合格した者が多数あった。

乙種薬学校併設 1882年5月(医系)と7月(薬系)に、政府は甲乙2種の医薬系学校通則を公布した。金沢医学校は設備のほか、特に人的条件を補強して、84年12月、開業試験の不要な甲種医学校に昇格したが、製薬学科は教師に大学卒業生2名以上必要との甲種校資格の条件が整備できなかった。

1885年、甲種医学校は校則を変更して製薬学科を廃止し、薬学系は薬剤師の速成をはかるとした乙種薬学校として併設されることとなった。(甲種薬学校は東京医学校(現東京

大) 製薬学科のみが認められた。)

金沢ではこの通則より8年も早く組織的教育が始められているので、金沢大学薬学部は今日まで継続しているわが国で最も古い歴史をもつ学校と認められている。ちなみに、このころには1882年の大阪道修町の大阪薬舗夜間校、84年の京都(京都薬科大の前身)と名古屋、85年の熊本・新潟、86年の大阪薬舗学校(大阪薬科大の前身)、87年の仙台・福岡・岡山、22年の札幌等と多くの薬学校が設立されたが、短期間で廃止されたものも多い。また、富山薬学専門学校は1893年に共立薬学校として設立され、翌94年11月市立、1909年7月県立を経て1920(大正9)年11月に官立に移管されている。

薬剤師の育成をはかるとした甲種薬学校の教科は、物理学・化学・動物学・植物学・金石学・薬用植物学・分析化学・薬品学・製薬学・毒物学・薬品試験法・調剤学および英・佛・独語中の一語が課せられており、乙種薬学校では物理学・化学・植物学・薬品学・製薬学・薬品試験法・調剤学の7教科が課せられた。この制度は1887年まで続いている。

私立北陸薬学講習所の開設 1886(明治19)年文部省は全国を5区に分け、大学予科として一校ずつ高等中学校の設置を決めたのに対応し、石川県は旧藩主前田利嗣の寄付金と県民の義捐金を準備して、金沢に第四高等中学校を誘致した。

1887年4月、第四高等中学校設立の後、医学校はその医学部として8月に併設されたのに対し、乙種薬学校は移管されず廃校に追い込まれた。石川薬舗会は金沢薬学の室息を憂うとともに薬学修学中の生徒を救うため、非常な決意をもって私立薬学校の設立許可を県に提出した。幸いに県の補助600円が得られ石川薬館内(薬舗主の会館として西町3-8にあり、薬品試験所としても利用していた)に1888年1月、私立北陸薬学講習所を開設して学生を教育した。(所長は宮竹屋11代亀田伊右衛門で、講師は高等中学校教師の堤従清、旗善蔵、三木栄末が主として担当し、東大出の藤川次郎、卒業生の福島猪太郎等の陸軍薬剤官が協力した。)

第四高等中学校医学部薬学科の開設 卒業生の堤従清は薬学校の廃止となるや、大いに有志を説き、高等中学校医学部長の木村孝蔵の意を受けて設置運動に乗り出し、再三上京して当路者に面接し医学部に薬学科の付設を要請した。その熱心な努力により、1889年3月に薬学科付設の場合の学課目およびレベルの程度が決められ、同年4月、他の高等中学校医学部に先んじて、第四高等中学校医学部薬学科の開設が認可された(開講は9月)。薬学講習所の生徒は無試験で初級に入学を許可され、また各学年の生徒若干名の入学も許可されたので、薬学講習所は発展的に廃止され9月15日に閉鎖式を挙行した。堤従清は金沢薬学廃滅の危機を打開した大恩人といえる。(翌90年2月に岡山<第三>、6月に長崎<第五>、7月に千葉<第一>、8月に仙台<第二>の各高等中学校医学部が薬学科を付設している。)

堤従清助教授の経歴

1852(嘉永5)年、金沢市中橋町に生まれる。幼名を孝之助または鼎三と称したが、

第2章 前身各校

長じて従清と改名した。1878年金沢医学所薬局学科を卒業し、翌79年に同助教となる。1887年石川県甲種医学校助教諭、翌88年第四高等中学校助教授兼金沢病院薬局長を経て1901（明治34）年金沢医学専門学校となったのを機に辞職し、1903年富山薬学校校長に転出した。



写真2 - 19 堤従清助教諭

石川薬舗会の発足

1886（明治19）年1月、鞭草会を発展拡大して石川薬舗会が発足した。当初、会の活動は活発でなかったが、金沢医学校に物理・化学の教諭として東京大学・製薬学科1期生の納富嘉博が来任してより薬学振興の機運大いに高まり、87年4月には『石川薬叢談』1号を刊した（3年後『石川薬学月報』と改名）。さらに89年より全国各地に薬剤師会が生まれてきたので、1890年2月に石川薬舗会は石川県薬剤師会と改称し、今日に至っている。

（4）生長期 第四高等中学校医学部薬学科～ 金沢医学専門学校薬学科時代（1889～1922年）

1889（明治22）年、第四高等中学校医学部に薬学科が併設されることになり、長年にわたる政変や法律・規則の改変にもてあそばれてきた金沢の薬学教育も、官立学校として安定性を得て発展を期待される段階になったが、発足当初の教官陣は次のように不完全なものであった。

教 諭	納富嘉博	（物理学、化学、製薬学、理化実験）
助教諭	堤 従清	（動物学、植物学、調剤実習）
助 手	三木栄末	（生理）
	旗 善蔵	（博物）

は共に前身校卒業生

そして科目としては第1年は独逸語・動物学・植物学・物理学・化学・調剤学・体操（兵式体操）を、第2年は独逸語・動物学・植物学（及び実習）・化学（理論及び実習）・分析（定性・定量）・生薬学（記述・鑑別実習・顕微鏡用法）・製薬学（理論）・調剤学（理論・調剤実習）・薬局方（解釈・常臓薬・毒薬・劇薬・極量暗記）が、第3年は独逸語・体操のほかは実習のみが課せられ、薬学教育の原型が出来上がっている。

この貧弱な教官陣は1889年11月に東京より伊藤脩郎（助教諭）村山長之助（教諭）が、さらに翌90年11月には東京大学模範薬局より柴山正秀（教諭）の赴任を見て順次充実された。しかし、納富嘉博は同年に任期満了で退職し（郷里の佐賀県で翌年逝去）、伊藤脩郎はモルヒネの検査方法をめぐる薬舗会会員との論争が原因で同90年9月に辞任したほか、

表 2 - 7 1890 (明治23) 年当時の授業時間配当表 (週)

学 科	程度	学年 学期	第 1 年			第 2 年			第 3 年		
			1 期	2 期	3 期	1 期	2 期	3 期	1 期	2 期	3 期
外 国 語	独 逸 語		6	6	6	4	4	4	3	3	3
鉱 物 学	理 論		3								
物 理 学	理 論 並 実 験		4	3	2						
化 学	理 論 並 実 験		6	6	6	3					
薬用動物学	理 論		2								
薬用植物学	理 論		4	3	3						
	実習並顕微鏡用法			4	3	3					
分 析 学	理 論			3	3	3	3				
	実 習				8	3	8	8			
衛 生 化 学	理 論							3			
	実 習								7	8	8
裁 判 化 学	理 論								3		
	実 習									5	5
生 薬 学	理 論					3	3	3			
	実 習						3	3			
薬 局 学	日 本 薬 局 方								3		
	外 国 薬 局 方 要 領										
調 剤 学	理 論						3				
	実 習							3	3	3	3
製 薬 化 学	理 論					5	5	5			
	実 習								12	12	12
薬 品 鑑 定	実 習								6	6	6
体 操	兵 式 体 操		3	3	3	3	3	3	2	2	2
計			28	28	34	27	32	32	39	39	39

衆望を荷って薬舗会会頭に選ばれていた柴山は翌91年5月に結核で急逝するなど、教官陣ははげしく交替している。柴山の後任科長として大阪衛生試験所長心得であった桜井小平太が同年10月に補充された。

この時期の講座数は生薬、製薬、分析の3教室で、次に示す教官4名、助手2名の編成であり、医学部の12講座に比べて極めて淋しい陣容であった。

桜井小平太 (科長)	製薬士・教授	調剤学・定量分析学・薬品鑑定・薬局方
村山長之助	薬学士・教授	製薬学・生薬学・化学・植物学
堤従清	助教授	動物学・植物学・化学・定性分析
高山基重	講師 (東京大学選科卒)	化学・生薬学・製薬化学
三木栄末・堀大二郎	助手	

1887 (明治20) 年ごろともなれば金沢でも木根草皮を使う医師は漸く減少し、洋薬が代わって重要な位置を占めるようになった。政府は国内製薬産業の開拓のため、1884年に大日本製薬を東京に設立したが、金沢でも石見谷、小泉、渡辺等の卒業生の発起で、1890年に大日本製薬と金沢製薬の合資会社が設立された。高等中学校の卒業生3名を技師として、総員約20数名で、1886年公布の薬局方品の製造と化学的・衛生的試験および

第2章 前身各校

各種薬品の売買を行った。会社は翌年、作業場を殿町に移すほど漸次隆昌に向かいつつあったが、石見谷、小泉、渡辺等の中心人物が相次いで没したため、4～5年で閉鎖のやむなきに至った。

1892（明治25）年、第四高等中学校の校舎が落成し、医学部が大手町より広坂通りの本校敷地内へ新築移転したのに伴い、薬学科（187坪）も同敷地の一番奥の木造校舎に移った。

1894年4月に第四高等学校医学部薬学科と改称され、学制も改革して医学部を第六学科に、薬学科を第五学科にした。

第五学科の教科目は、外国語（独）・鉱物学・物理学・化学・薬用植物学・薬用動物学・分析学・衛生化学・裁判化学・生薬学・薬局方・調剤学・製薬化学・薬物鑑定の14科目であった。

第四高等中学校時代の5年間の卒業生数は第1回7名、第2回7名、第3回8名、第4回2名、第5回1名の計25名で、その内1・2回卒業生は北陸薬学講習所よりの転入生のため、それぞれ1890、91年の12月に卒業式を挙行している。また1890年公布の法律十五条の附則四十三条により医薬分業が骨抜きになった影響が、その後の卒業生数の減少に出ていると思われる。

1896年に高山基重は教授に昇任し、1903年に堤従清助教授は富山の薬学校に校長として転出した。堤の後任には大阪衛生試験所から教え子の林常雄が赴任して欠を埋めた。

1897（明治30）年ごろの薬学科の授業時間割を見ると、1年では語学、2年では実習に重点がおかれ、講義は分析・生薬・製薬化学など僅かであった。3年では終日実習を課したので、この時代の授業は生徒数1クラス数名のこともあって個人教授のようなものであったと思われる。

高等学校時代の6年間における全卒業生数は僅か38名であるが、1905（明治38）年ごろより学生数は2桁となり、さらに大正時代に入ると、各学年、約30名以上を維持するまでに生長した。

第四高等学校医学部薬学科はさらに1901（明治34）年4月、専門学校令により金沢医学専門学校薬学科と改称した。同時に角帽とMedical Academyの頭文字MAを組み合わせた横文字の校章（図2-2）が採用された。



図2-2 MAの前章

桜井小平太教授の退官 1891（明治24）年に赴任し

て以来、18年間も科長として校風の確立に努力し、生徒より慈父のように慕われていた桜井小平太が1909年に退官した。彼は薬学教育の完成には医薬分業が前提であると考え、分業運動に情熱を燃やしていたので、日ごろより医学部長と意見が合わなかったが、在外研究員として外遊する直前に再び論争をした結果、決然退官したものである。

桜井教授は、1856（安政3）年、東京に生まれる。1879年東京医学校を卒業して製薬

士になる。大阪衛生試験所長・心得を経て1891（明治24）年第四高等中学校教授となる。1909年退官し、東京にて数年、共立女子薬専校長を勤めた後、1932（昭和7）年6月77歳で逝去した。

1911（明治44）年3月、医専の本校は小立野に移転したが、薬学科は四高内に留まった。

1912（大正元）年9月、生徒の塚田弥三、石野金朔等は薬学科の生徒活動が医学科の「十全会」に含まれているのを遺憾とし、医専校長の許可を得て独立した「金沢薬学会」を分離設立した。9月29日に発会式を挙げ、『薬学会誌』第1号（図2-3）を10月15日に発刊した。この会は卒業生、在校生、職員一体の会で学内に起こった出来事は大小にかかわらず報告されていた。そもそも金沢薬学の同窓会機関誌の発行は極めて古く、1887（明治20）年の『石川薬舗叢談』発行に端を発している。さらに『石川薬学月報』と発展し、94年ごろには『甲午会報』となっていた。しかしながら当時は卒業生・在校生の数が少なく運営が甚だ困難であったので、2カ年で廃止された後此の年まで中断し、『十全会誌』に吸収されていたのである。以後、『薬学会誌』は毎年2回以上発行され、1945（昭和20）年3月に最終の80号（図2-4）を出している。（1945年以降、一時期中断していたが、53年9月に再発足した『同窓会誌』を経て現在の『薬学部薬友会誌』に続いている。）



写真2-20 桜井小平太教授

発刊の辞として「一国の富強は人民の愛国心の啓発にあるが、その愛国心は教育の隆昌にある。同じように一校の隆盛は学生の愛校心にあるが、愛校心の大なるは一致団結に若くはない。」と漢詩に託して設立の意義を述べ、「各人が在校生と卒業生の連絡を全うする目的の達成の為に尽力されんことを期待する」と所信を述べている。

大正の初めより富山薬専との野球交歓試合が始まった。

当時、薬専と呼ばれていた1914（大正3）年ごろの教授陣は次のごとくであった。

科 長・教 授	加藤静雄	衛生化学・裁判化学、薬品鑑定、薬品工業学
教 授	脇坂慶造	薬化学、分析化学、機械学大意
教 授	高山基重（休職中）	化学、薬化学、調剤学
助教授	林常雄（明治29年卒）	薬用植物学、生薬学、鉱物学、薬局方
助教授	内藤得之助（大正2年卒）	薬化学、製薬化学、薬品鑑定

しかし、脳溢血のため1913年末より休職中の高山教授は3年8月に免官となり、続いて1916年1月には脇坂教授が東京慈恵医専教授に、翌年10月には加藤科長が長崎薬専科長に転出するなど、この時期教授陣ははげしく交替した。後任として1916年5月に加藤直三郎（分析学）が、18年3月に西村真一郎（衛生化学）が、20年10月に瀬戸文雄（薬化学）が赴任しているが、一等薬剤官でもあった加藤直三郎科長が1918年9月、第三師

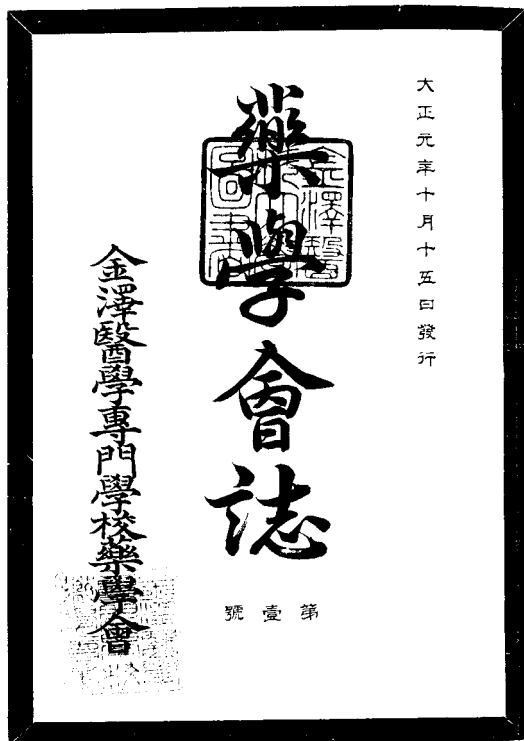


図2 - 3 金沢医学専門部『薬学会誌』第1号

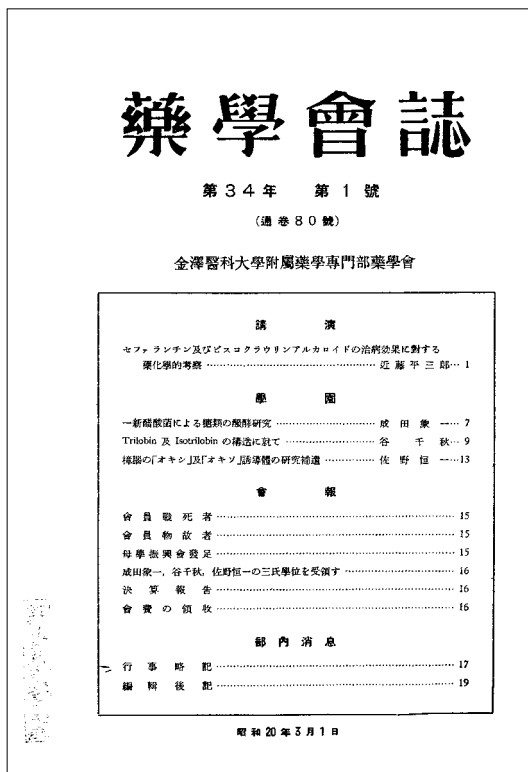


図2 - 4 金沢医学専門部『薬学会誌』通巻80号

団衛生部員としてシベリア出兵に動員（翌年3月に復員）されたこともあって、新任の西村真一郎が科長になった。しかし新情勢を変えるほどの政治力を発揮するいとまもないままに、学内に紛争が絶えず校風は沈滞した。

1916(大正5)年4月より学年開始月が9月より4月に改正された。また1914年より寄付を集めていた記念館が16年10月に開館となり、送別会などに利用されるようになった。

不運にも、この時期1914年7月に第1次世界大戦が起こった。従来わが国で消費されていた大部分の医薬品は欧米、特に独・奥からの輸入であったが、敵国となった故に輸入は途絶し、治療上大きな支障が生じた。政府の国産薬品の生産・開拓の要望に応じて、富山県は努力を重ね、薬業県としての地位を確立したが、石川県民の気風は進取的でないままに世情に対応できず、1916年に亜鉛華工場を設立し、19年6月に教授に昇任したばかりの内藤得之助教授が製品を市販化できなかった理由で、翌年1月に辞職に追い込まれた上、工場も閉鎖された例の示すように、保守的且つ消極的であった。

それ故か、地元賣薬産業の隆昌と県民の熱意により、1920(大正9)年11月県立富山薬学校が官立に移管された際、金沢薬専の富山薬学専門学校への合併問題が起こり、廃校の説さえ流布されるに至った。

このころ授業は四高の奥にあった古ぼけた六角堂の階段教室で聴講し、体操・武道・細菌および調剤は小立野の医専校舎に通って受けていた。

(5) 発展期 金沢医科大学附属薬学専門部時代(1923~51年)

1923(大正12)年3月、勅令93号が公布され各医専は医科大学に昇格したが、薬専は脱落し廃校になる噂もあって生徒間で昇格運動が強く進められた。1922年3月の官立医科大学官制(勅令143号第19条)では、新潟・岡山には医大附属病院をおき(12年開設)比較的古い千葉と金沢・長崎には23年に医大附属病院および薬学専門部を併置することが政府案に何故か決まっていた。この改組が転機となり、同年9月の関東大震災による財政難にもかかわらず、金沢薬専は多くの優秀な指導者に恵まれて隆昌への道を歩みはじめる。同時に科長の名称が主事に改まっている。

1923年5月に森元七教授(物理化学・無機化学)が発令された。

森元七教授の経歴 1895(明治28)年11月、滋賀県に生まれる。1922(大正11)年、東京大学理学部化学科を卒業し、翌年金沢薬専に赴任して25年より2年間独仏に留学した。1949(昭和24)年、新制大学になったとき金大理学部の教授に配置換となり、1973年10月逝去した。享年78歳。

1924(大正13)年、医化学担当の須藤憲三教授が金沢医科大学長(兼任)となり、薬学基礎科目の充実(理論化学と植物学を理学部出身者で補強して5教授になる)を図るとともに、同年9月に教官・生徒を六角堂講義室に集めて訓示し、「専門学校だからと研究等不要の空気があるが、高等の学術技芸を教授するには必ずや研究を背景とするゆえ、将来益々研究に努力し、この美風を生徒に及ぼすように致されたい」と研究を奨励したので、教授陣は大いなる驚きと刺激を受けた。1932(昭和7)年、脳溢血で倒れるまで在任したが、後任の石坂伸吉学長(薬理学)ともども、学長が薬学に関係の深い講座出身者であったことは薬学にとって幸いであった。

この年、内務省衛生試験所技師の柳沢秀吉(1904年卒)が卒業生として初めて薬学博士の学位を得た。

1924年9月には鶴羽松太郎教授(薬用植物学)が発令された。

鶴羽松太郎教授の経歴 1886(明治19)年8月、香川県に生まれる。1924(大正13)年3月、東京大学理学部植物学科を卒業し、同年金沢薬専に赴任。1949年、新制大学になった時、金大理学部講師に配置換となる。1980年1月逝去した。享年94歳。

1924年12月に退官した加藤直三郎教授の後任として、翌年4月に浅野三千三教授(分析学・有機化学)が赴任して6教室となった。1925(大正14)年4月、附属薬学専門部規則が改正され、教授7・助教授4となる。同時に医専の校章と角帽が附属薬学専門部に引き継がれた。

またこの年4月には、学科課程および授業時間表が改正された。修身があり独逸語の授業時間が多いのが目立つが、課目の変更は数科目に留まっている。さらにこの年から軍事教練が始まった。

1926(大正15)年ごろの教授陣および授業科目を次に示す。大正の初期と比べ非常に

第2章 前身各校

表 2 - 8 1925(大正14)年当時の薬学学科目

学科名	学年	第1学年	第2学年	第3学年
		毎週授業時数	毎週授業時数	毎週授業時数
修身		1	1	1
独逸語		11	3	4
鉱物学		1		
化学	理論及実験	7.5		
薬用植物学	理論	3		
	実習及顕微鏡用法	3		
生薬学	理論		3	
	実習		2	
分析学	理論	2	2	
	実習		9	
衛生化学	理論		2	
	実習			6
細菌学	理論及実習		2	
裁判化学	理論			1
	実習			3
薬局方	日本薬局方 外国薬局方要領			1.5
薬品鑑定				5
調剤学	理論		1	
	実習			2
薬化学	理論		5	
	実習			11
機械学大意			3	
薬品工業学	理論		1.5	1.5
	実習		不定時	不定時
体操		2	2	2
計		30.5	36.5	38

充実したものになっている。

西村真一郎(主事) 衛生化学・裁判化学

瀬戸文雄

薬化学

林 常雄

生薬学

森 元七

無機化学、物理化学

浅野三千三

分析学、有機化学

鶴羽松太郎

薬用植物学

村田金太郎、佐々木城臣 独逸語

浅野三千三教授は1929(昭和4)年9月に2年余の欧州留学を終えて帰国した。

小立野新校舎への移転 この1929年はあたかも、小立野の現在地に木造2階建430坪の新校舎が落成した年である。1棟だけの校舎であったが各階とも中央に廊下が走り、その両側に教官実験室と教授室があり、両端に4個の学生実習室があった。ほかには小使室と危険薬品庫および新炭庫が1棟ずつあるだけの医科大学部の一教室にも及ばない小規模のもので、全生徒および職員を入れるのは甚だ困難であった。生徒達は学長にもう1棟の増築を交渉したが、予算削減のために実現しなかった。結局、講義は医学部のものを借用する

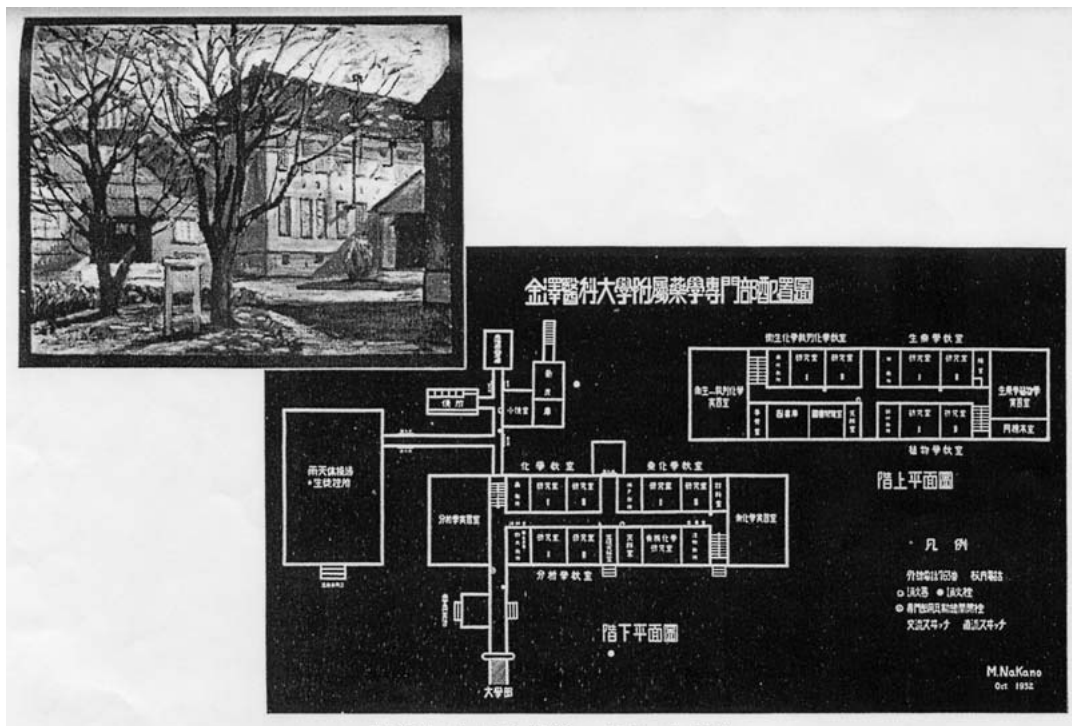


図 2 - 5 校舎の図

ことにして発足した。

しかし、9月10日から移転を開始し、職員学生をあげて広坂通りの四高旧校舎から機械設備を運搬して10月より授業を行うなど、学生達には校風を刷新し、学園の面目を一新せんと意識が高まっていた。

第1・第2講義室が建てられたのは1940（昭和15）年冬だが、全生徒が薬専内で講義が受けられるようになるのは、第3講義室が完成した42年4月になってからのことになる。

学生歌「名無草」作られる 1931（昭和6）年、3年生の本田豊男らは、郷土出身の詩人室生犀星の門を叩いて学生歌「名無草」を得た。学生達の希望に満ちた気持ちが偲ばれる歌詞で、現在も愛唱されている。

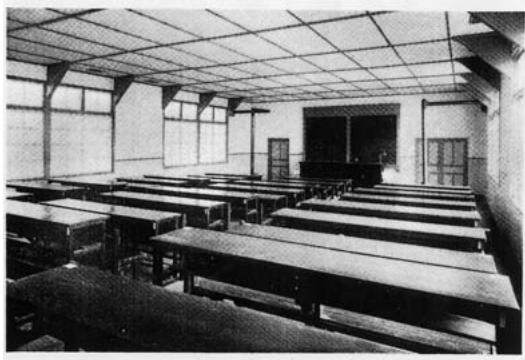
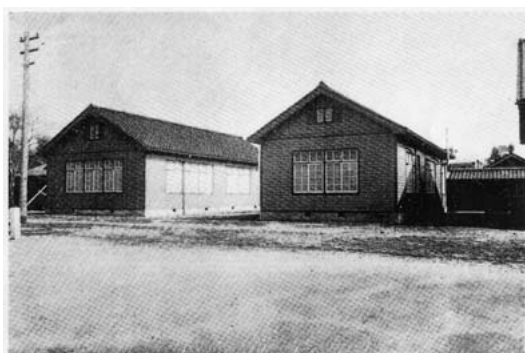


写真 2 - 2 1 第1・第2講義室の内外（昭和16年春頃）

「名無草」 (作詞：室生犀星、作曲：弘田龍太郎)

深雪(みゆき)のしたの	名無草	
けふは匂はむ	はるは来ぬ	
鐵(くろがね)いろの	とびらさえ	
打ちくだかれむ	汝(なれ)が日に	汝(なれ)が日に
はるの扉(とびら)よ	ひらかれむ	

浅野三千三教授による学風の刷新 同年、西村主事のあとを受けて浅野教授が主事となり、指導者として本格的な展開が開始された。教育・研究については自ら範を示し、卒業生の兼松鉄雄、太田次作、亀田幸雄、谷千秋等の協力のもとに行われた熱心な研究態度により、学内には研究的雰囲気醸成されるとともに、その講義や、学内でしばしば実施された学術講演会により生徒の向学心は大いに刺激された。

一方、生徒は一学年40名と僅少な上、主事以下全教官が勤労奉仕に参加させられるなど、学園内に家庭的雰囲気があった反面、校則はきびしく守るよう指導されていたし、また学習面では各学期の試験成績順に授業時の座席が決められていた。

また10月には、浅野主事が教授会・在沢同窓会と懇談して同窓会組織を改正し、附属薬学専門部は新会則のもと「金沢薬学会」として再発足した。薬学会誌も学術報文や講座のほか、講演内容や優秀な外国論文の抄録および教授推薦の新刊書の紹介も多く掲載されて学術的な雰囲気の高いものになり、頁数も大巾に増すとともにレイアウトも縦書から横書に組み直されて読みやすくなった。

一方、昭和初めの不況の時期と重なり、1932年よりクラス担当を教授陣が受け持つことになった。生徒は暑中休暇中に試験所や薬局などで実習を行うなどして就職活動をしていたが、学校側も主事以下、しばしば企業を訪問して採用を依頼するとともに、薬学会誌にも同窓生あてに就職依頼を掲載するなど、全学一体となって打開を図る努力がなされた。

さらに、1934年3月には塚本赳夫が、同年5月には浅野順太郎などの俊英なメンバーが陸続と教授陣に加わり研究に参加したので、金沢薬学専門部の評価は大いに高まった。

1933年5月、教授室で脳溢血症のため卒倒した林教授(生薬学)は9月に勇退し、翌34年7月逝去した。1928年に教職25年を記念して至誠をもって教育に当たった師恩を偲んで造られていた同窓生の寄付金による胸像は、1943年に戦争で供出されるまで2階の図書閲覧室に置かれていた。

林常雄教授の経歴 1876(明治9)年2月、金沢市に生まれる。1896年11月、第四高等中学校医学部薬学科を卒業した。1901年に薬専助教授となり、1914(大正3)年より薬

表 2 - 9 附属薬専各学年授業時間表

第 1 学年 第 2 学期 1931年 自 9 月 至 12 月		8-9	9-10	10-11	11-12	1-2	2-3	3-4
曜	時	8-9	9-10	10-11	11-12	1-2	2-3	3-4
月		鉱物 鶴羽	化(理) 森	独逸 鈴木	有機 浅野	独逸 朝廣		副科
火		分析 兼松	化(無) 森	植物 鶴羽	独逸 朝廣	定性分析実習 浅野		
水		機械 田淵	機械 田淵	独逸 鈴木	機械 田淵			
木		植物 鶴羽	修身 鈴木	化(理) 森	独逸 朝廣	植物実習 鶴羽		
金		有機 浅野	独逸 朝廣	分析 兼松	化(無) 森	教練 湯浅		
土		独逸 朝廣	化(無) 森	有機 浅野	植物 鶴羽			

第 2 学年 第 2 学期 1931年 自 9 月 至 12 月		8-9	9-10	10-11	11-12	1-2	2-3	3-4
曜	時	8-9	9-10	10-11	11-12	1-2	2-3	3-4
月		生薬 林	分析 浅野	独逸 朝廣	調剤 水谷	生薬実習 林		
火		裁化 渡邊	独逸 朝廣	薬化 瀬戸	化(電) 森	教練 湯浅		
水		生薬 林	有機 浅野	独逸 朝廣	薬化 瀬戸			
木		薬化 瀬戸	分析 浅野	生薬 林	独逸 鈴木	定性分析実習 浅野		
金		化(電) 森	生薬 林	衛化 渡邊	独逸 朝廣	分析実習 浅野		
土		衛化 渡邊	修身 鈴木	生薬 林	薬化 瀬戸			

第 3 学年 第 2 学期 1931年 自 9 月 至 12 月		8-9	9-10	10-11	11-12	1-2	2-3	3-4
曜	時	8-9	9-10	10-11	11-12	1-2	2-3	3-4
月		独逸 鈴木	薬局方 兼松	薬化 瀬戸	薬物 石坂	細菌 谷	教練 湯浅	
火		有機 浅野	薬化学実習 瀬戸			調剤実習 (甲)		
水		独逸 朝廣	薬化学実習 瀬戸					
木		独逸 朝廣	薬化学実習 瀬戸			調剤実習 (乙)		
金		独逸 朝廣	薬化 瀬戸	薬化学実習 瀬戸				
土		薬制 兼松	薬化 瀬戸	独逸 朝廣	修身 鈴木			

第2章 前身各校

表 2 - 1 0 卒業生就職別年表

	藥局開設	病院調剤員	藥種商	買藥營業 藥業	藥店勤務	陸海軍藥劑官	官公衛技術員	專門學校教員	中等學校教員	会社技術員	研究中	兵役	其他	不詳	死亡	合計
1890年 (明治23)														3	4	7
91		1												1	5	7
92	1	1											1	1	4	8
93															1	1
94	1														1	2
95	6													3	3	12
96	4	1					1	1						1	3	11
97	3									1			1			5
98		1													3	4
99	1						1								1	3
1900	2														1	3
01	1													1	1	3
02	2						1							1	3	7
03	2	1	1													4
04	4	3								1					1	9
05	4	1						1						5	5	16
06	5						1			2				2	4	14
07	3	1	1		1					1				5	3	15
08	4						2		2					4	2	14
09	7	1					3			1			1	3	2	18
10	7	2				1	1		1				1	3	8	24
11	5	2					3							5	4	19
12	8	1												6	4	19
13	11	1	1				2			3			1	5	7	31
14	6				1	2				3				8	2	22
15	9	1	1			2	3		1	3			2	4	5	31
16	8	1				2	2		1					7	3	24
17	7					1			1	4				9	5	27
18	14	2				1			2	1				5	4	29
19	14	4					3			1				11	6	39
20	9	2				4	3		1	3			1	10		33
21	12	1					3	1	5	1			1	5	2	31
22	12	3			1	1	2		3	1				11	6	40
23	12	3	1			1	2	2	2	3				4	2	32
24	10	5			2	1	3	1	3					6	2	33
25	16	10			1	1	3	2		2				2	2	39
26	13	7				3	1	2		2			1	7	1	37
27	13	5			1	1	3	1		2				4	5	35
28	9	18			2		2	1	1	4				2	3	42
29	11	14			3		2	2		2			1	2	2	37
30	9	10			3		3	2				1		6	3	37
31	4	5			9	1	2	3		3	1	4		3		35
32	2	8			7	1		3		2				10		33
合計	271	116	5		31	23	50	22	23	46	1	5	11	165	123	892

表 2 - 1 1 学科目の改正と授業時間割表

- 薬学教育の確立と明治23年以来の懸案解決 -
 昭和10年3月31日付で我校の学科目が次の様に改正発表せられた。

学科名		学年	第1学年	第2学年	第3学年
			毎週授業時数	毎週授業時数	毎週授業時数
修身	国民道德		1	1	
	倫理学				1
体操	教練				
	体操		2	2	2
外国語	独乙語		7	3	3
	英語		2	1	1
	羅旬語			1	
数学		2			
物理学		3			
無機化学		3			
無機薬化学			1		
無機薬品製造学		1	1		
無機化学 無機薬化学 無機薬品製造学	実習			(5)	
有機化学		2	2		
有機薬化学			2	2	
有機薬品製造学			2		
有機化学 有機薬化学 有機薬品製造学	実習				(12)
鉱物学		1			
薬用植物学		3			
同実習		(2)			
分析化学		3			
同実習		(6)	(3)		
衛生化学			3		
同実習			(3)		
細菌学				1	
同実習				(1)	
裁判化学			1		
同実習				(2)	
生薬学			3		
同実習			(3)		
薬局方				1	
同実習				(3)	
調剤学				2	
同実習				(2)	
薬理学			1	1	
臓器薬品化学				1	
理論化学			2		
電気化学				2	
薬事法令				1	
薬業商品学				1	
化学機械学		2			
特別講義				1	
計		40	40	40	
		内実習(8)	内実習(14)	内実習(20)	

備考 教授上特別ノ必要アルトキハ学科目又ハ其ノ教授時数ノ配当ヲ変更シ尙教授定時間外ニ於テ臨時講演ヲ聴カシメ又ハ実習ヲ課スルコトアルベシ

附則 本規程ハ昭和10年4月1日ヨリ之ヲ施行ス

本規程施行ノ際現ニ第2学年以上ニ在学スル生徒ニ課スベキ学科目及其ノ程度ニ関シテハ新旧規定ヲ斟酌シテ大学長ヲ定ム

第2章 前身各校

専教授として生薬学を担当していた。1934年7月逝去。享年56歳。

またこの年、薬学会金沢支部の安藤謙治、石黒伝六、英安吉の3名が発起人になり、優勝旗が寄付された。(この旗は現在も残っている。)

1935年2月14～16日には薬剤師会主催で県下初の薬学講習会が薬専部で開催され、各教授が講師となり実施された。

同2月、勅令第17号により附属薬専の教授定員が7名より8名になった。また4月より長期間存続して時代に合わなくなっていた学科目が改正施行され、1890年以來の懸案が解決した。

1936(昭和11)年8月、薬学部初めて事務室が設置され、高島参一郎が附属病院から配置換されて来た。

浅野教授の学士院賞受賞 1936年2月、「地衣脂肪酸並びにブルピン酸系色素に関する研究」で浅野教授の帝国学士院賞の受賞が決定した。金沢薬学会では創立25周年の西村・瀬戸・酒井教授への謝恩会を兼ねて36年6月9日に医大講堂で浅野教授の祝賀会を開いた。会する者450名で非常な盛会であった。この日は金沢薬学の歴史の中で最も晴れがましい日であり、薬専時代の頂点を示す日でもあったと言える。そして金沢薬専は研究のできる専門学校との評価を得て多くの人材を集めるとともに、その後の母校の歩みに大きな影響を与えることになる。学士院賞受賞の賞金一千元は学校に寄付され、その後、卒業生の学業成績優秀者へ浅野奨学賞として授与することになった。また祝賀会での剰余金で在学中無欠席の者に薬学会賞(置時計)を贈ることにした。

浅野三千三教授は1938年、東京大学教授として転任したが、在任中に金沢大学薬学部の学風を確立させた大恩人である。

浅野三千三教授の経歴 1894(明治27)年、千葉に生まれる。一高を経て1919年、東京大学医学部薬学科を卒業後、朝比奈・慶松両教授の下で研究した後、25年金沢医大附属薬学専門部に赴任した。1926年薬学博士となる。在任中は非常な努力により金沢薬学専門部の評価を大いに高めた。1938年12月に東京大学教授として転出するまでの間、36年には帝国学士院賞を受賞している。1948年4月、戦時中の多忙な生活が過重となってか東京大学教授在職中に惜しまれて逝去した。享年55歳。



写真2-22 浅野三千三教授

1937年、日中戦争勃発とともに日本は戦時体制に入り、薬学出身者で応召するものが続出した。また、医科大の志願者が定員に達しないため、政府はこのころより文科系学生、さらに薬学専門学校生の進学を認めたので、39年ごろからは、卒業後医科大学に進学する者が多く現れるようになった。

1938年1月、瀬戸文雄教授は神戸女子薬専校長に内定し3月に退職した。1920年に赴任し、豪快な性格で生徒達との逸話も多く残している。1894（明治27）年に静岡県に生まれ、1919年東京大学医学部薬学科を卒業した後、薬専には20年間勤務し、1956年12月逝去。享年62歳。

1944年6月塚本長太郎教授（薬化学）が瀬戸教授の後任として赴任した。

塚本長太郎教授の経歴 1910（明治43）年6月松山に生まれる。松山高校を経て1933年東京大学医学部薬学科を卒業。38年6月金沢薬専教授として赴任し、同年9月に薬博となる。52年に名古屋市立大薬学部に転出した。

1937年、県立衛生試験所の設立に関する建議書を県薬剤師は石川県議会に提出していたが、39年4月に実現して実施に移された。

1939年4月、浅野三千三教授の後任として、熊本薬学専門学校から鵜飼貞二が主事として来任した。この間は塚本赳夫教授が主事の事務取扱を務めた。

塚本赳夫教授は1939年12月に台北帝国大学教授兼薬局長に発令され、翌40年に転出した。塚本赳夫教授の経歴 1897（明治30）年5月東京に生まれ、二高、東京大学医学部薬学科を卒業後、帝国女子薬専教授を経て、1934年4月金沢薬専に赴任した。台北大学を終戦で引き揚げた後、九州大学薬学部および福岡薬科大学教授を歴任した。1977年1月逝去。享年79歳。

鵜飼貞二教授の経歴 鵜飼教授は進歩的な意見を持ち、講義に医学関連の解剖・細菌・薬理・医化学の授業を加え、さらに薬理学実習、商品経営学などを取り入れるために修業年限の延長、薬学部の分離独立も考えていた。（鵜飼教授の業績については『部局編』に詳記）

1939年、修業4年の臨時附属医学専門部の制度が制定された。

このころから戦地よりの同窓の便りが引きもきらず、また同窓誌には黒枠の写真が増してきた。

同年7月には薬学部報国青年勤労隊が生まれ、茨城県内原訓練所に入隊する。彼等の内10名は7月から8月末まで天津・北京において訓練を受け、8月末に全員帰還した。

同年11月には第1回体力章検定が市民グラウンドで行われた。

1940年4月には掛見喜一郎教授（分析学）が赴任しているが、1942年9月には京都大学附属病院薬局長として転出した。

掛見喜一郎教授の経歴 1908（明治41）年2月、大阪に生まれる。大阪高校を経て1933年、東京大学医学部薬学科を卒業する。菅沢教授のもとで副手・助手を務め、40年4月薬学博士となり、同時に金沢薬専の教授として赴任した。京都大学教授として在任中の



写真2 - 23 鵜飼貞二教授

第2章 前身各校

1971年4月に逝去した。享年63歳。

さらに1941年4月には金沢薬学会は報国団と改称している。在校生を会員よりはらずし、「今後本会は会誌の発行を主とし、母校同窓生間の連絡並びに斯界の進歩・発達に資すべき各種の事業を行う」と会則を変更しているが、1941年度より3カ月の繰上げ卒業が始まり、戦争の足音が段々と近づいているのが感じられる。この繰上げ卒業は、1942年度から45年度の間では6カ月に延長されている。

1941（昭和16）年12月8日、第2次世界大戦が始まった。

1915（大正4）年に開始されて以来、相撲には弱かったが、その応援風景では人気のあった金石海岸での相撲大会が1942年には中止となった。

同42年秋には桜井欽夫教授（薬化学）が赴任した。

桜井欽夫教授の経歴 1912（大正元）年東京生まれ。姫路高校を経て1936年東京大学医学部薬学科を卒業、41年5月薬学博士となり、翌42年金沢薬専教授となる。1950年退官し、癌研究会癌化学療法センターへ転出した。後、同所長を経て共立薬科大学学長となる。

1943（昭和18）年9月、塚本長太郎教授が応召を受けた。

同年12月には西村真一郎教授（衛生化学）が退官した。

西村真一郎教授の経歴 1923（大正12）年に東京大学医学部薬学科を卒業し、本学には1918～43年の間在職した。この間、1931年より2年間渡欧している。趣味は旅行および登山であった。新制発足後の1950年に東北薬大教授として再び教職に戻り、1957年9月逝去した。享年69歳。

（6）戦時体制から新制大学の発足まで

母学振興会の発足 1943年春ごろより母校の存廃の噂が出たのを契機として、翌44年春に母学振興会（会長石黒伝六）が発足した。母学の学園拡充の助成、会員の研究助成並びに成果の育成など、学園の振興・発展を図り、母学振興を通じて日本国戦力の増強に寄与する目的を唱えているが、これはまた、母校昇格の一布石でもあった。寄付金も集められ、その内1万円が戦時薬学研究会の設立のために寄付された。

1944（昭和19）年4月に主事の職名が変更され、部長となる。

同年6月、西村教授の後任として平本実教授（衛生化学）が任命され赴任した。

9月の新学期よりMedical Academyの頭文字MAを組み合わせた横文字徽章（図2 - 2参照）が廃止され、生徒間で公募して「薬学」となった。

このころには戦局は一段と厳しくなり、3年生は浅野川上流の浅川小学校近くの畑まで通って食糧増産に励んだり、2年生は7月から9月の間、藤沢、武田、わかもとの各製薬会社に勤労働員され、その下の学年は1945（昭和20）年6月から終戦まで富山化学や日本曹達に動員されるなど、この前後の時期は勤労働員、疎開などで正常な授業がされないうちに、1945年8月15日に終戦を迎えた。

食糧事情が急速に悪化する中、疎開した実験器具の回収作業が進んでいた最中の1945年10月に浅野順太郎教授が死亡した。この金沢出身の優秀な研究者に対する母学の期待は大きかっただけに、その死が惜しまれた。

浅野順太郎教授の経歴 1898（明治31）年10月に石川県河北郡高松町に生まれる。四高を経て1928年、東京大学医学部薬学科を卒業。天然物化学の研究では天才と言われ、1932年薬学博士となり1934年5月より本学教授として赴任した。1945年10月、病気のため在職中に死亡した。享年48歳。

浅野教授に代わって1946年には吉岡一郎（衛生化学）教授が赴任したが、翌47年には立地研究所を経て、大阪大学薬学部・教授に転出した。

大橋力（1945年9月卒業）の話（要約）

昭和18年から昭和19年の一学期までは講義、実習に特別の変化はなく、学生食堂では毎月8日の開戦記念日には赤飯が出されており、放課後に歩兵第七連隊で級友とともに山砲や重機関銃の分解搬送、組み立ての実習に参加した記憶がある程度で金沢は平穏であった。昭和18年10月に19歳以上の生徒には徴兵検査があったが、自分は昭和19年に検査を受けた。

2年生の2学期の9月初旬に学徒勤労動員に出動した。2年生は武田製薬、わかもと製薬、藤沢製薬に配分された。私の属した藤沢製薬では2、3名ずつ製薬、製剤や研究室部門に配属された。助教授や講師の若い先生が月曜から土曜まで毎晩7～9時の集中講義を会社の寮でしてくれたが、これは昭和20年3月13日の大阪大空襲まで続けられた。

手当での支給があり、休日には六甲山、吉野山、箕面公園へ行ったり、松竹や宝塚少女歌劇や映画鑑賞のほか、京阪神の市内観光をして過した。20才未満の者もいたが、一率にタバコと酒の「配給キップ」が分配されたので「大衆ビアホール」の列に並んだり、タバコとビールの切符を交換するなどいろいろな経験もした。大阪大空襲で市内は灰塵に帰したが配属の各工場は郊外にあったため被害は全くなかった。

昭和20年5月に勤労動員が解除され、全員無事に復学した。5月21日（月）より授業は再開され精力的に授業が続いた。7月上旬に就職について一人ずつ質問があったが、軍隊から生還する自信もないだけに返事が出来なかった。その後2日間ほど天秤、冷蔵庫、薬品などを湯涌温泉近くの農村へ疎開した。また延焼防止のため別棟の小使室を皆で壊した。金沢市の爆撃も近いと思われていたころ、期末試験やその他の指示もないままに夏休みに入った。原爆が落とされ疎開が激しくなり、先生や級友の消息も全く分からなくなり、9月には軍に入隊予定の筈だが、その連絡も一切ない状態であったが8月15日夕暮れ、疎開先のラジオで戦争が終わったことを知った。9月5日に友人が卒業証書を持ってきてくれたので9月1日に卒業したことが判明した。

田辺建雄（1947年3月卒業）の話

「勤労働員の思い出」

勤労働員は2年生の時、つまり昭和20年6月4日から8月15日までの2ヶ月間余りであった。入学以来、勤労働員があるかもしれないということで授業の進度は早かったようである。我々のクラスは日本ソーダ高岡工場と富山化学石動工場の2班に分かれ、私は石動工場の方の隊長に命じられた。校門での出発式で読んだ宣誓書は今も手元に残っている。

工場での作業は塩化リンを作る行程であった。塩酸の入った蓋のしっかりしない20ℓ入り容器2セットを背の高いタンクに持ち上げるのは重く危険であった。学友の出島君と勤員の時の話をすると、何時もこの話がでる。この他、欠乏気味の食料のことで会社や宿との交渉に苦労したことも強く脳裏に残っている。

6月14日より約1週間、私だけが命じられて義勇隊幹部訓練養成実習のため、三重県の菟野に行った。これは敵の本土上陸を想定した訓練であったが、上空には敵機がよく飛んでいたのを覚えている。その帰路、焼け野原となった福井市を通ったが、空襲の残り火がちょろちょろ燃えていたのが印象的であった。

8月1日には富山市の空襲を工場の防空壕の中で見た。焼夷弾が夜空にチカチカと花火のように落ちるのが美しかった。ほどなく富山市の上空は焦げるように真っ赤になった。翌日、救助にいった人の話では道に死体が散乱していたという。悲惨な話である。しかし勤員中には宿の後の堤で盆踊りをしたことなど楽しい思い出も多い。

8月15日に終戦となり、私はすぐ指示を求めて日帰りで学校に行った。全員、その晩に郷里に帰るようにとの指示を受けたが、私は残務整理のため数日、石動に残った。一人で宿の窓から眺める立山連峰は以前と変わらぬ落ち着いた峰々に見え、「国破れて山河あり」という有名な杜甫の詩が思い出されて仕方なかった。

9月、2学期は通常どおり始まった。

戦後第1回日本薬学会学術大会 1947年5月、戦後第1回日本薬学会学術大会が金沢で開催された。金沢は戦災に遭わなかった上、県・市当局や業界に沢野外茂次、安藤謙治、石黒伝六などの有力関係者が多くいたため食糧などの特別手配もされた。幸い天候にも恵まれて参加者は2,000名を超える大盛会だった上、金沢薬専の存在も十分にPRすることができた。

同47年11月、進駐軍の指令により、石川県に限定された範囲での北陸総合大学設立準備委員会が設置された。その最初の構想は医学部薬学科設置案であったが、当初は薬学科が学部として参加する客観的情勢は極めて乏しかった。鶴飼主事は学部として参加するた

め、金沢地区軍政部と接触して援助を求めるとともに、この間だけでも十数回も上京して文部省などの説得に悪戦苦闘を重ねた。

1948年1月に北陸大学設立要項を文部省に提出しているが、3月末に学部独立の構想は了承され、薬学部を含めた医・工・理・法文・教育の6学部編成が指示されたので「北陸大学準備委員会」は「金沢大学実施準備委員会」と改称して同年7月10日より作業を始めている。

同48年、米国薬剤師協会長ジョンキンス博士の一行が来朝して日本の薬学教育を調査し、勧告書をマッカーサー元帥に提出した。その勧告に従い、日本薬剤師協会内に薬学教育委員会を常置し、生物系の薬理学および生化学の科目が補充されるとともに、終戦後久しく休会中の北陸薬学会が日本薬剤師協会北陸支部の学術発表機関として復活し、発会式を兼ねて第1回学術発表会が翌49年10月23日に金沢大学薬学部で行われた。(この組織は1955年10月に日本薬学会北陸支部に改組された。)発表会后、薬学部創設記念会が同窓生250名が参加して尾山クラブで開かれた。

教官の資格審査の結果では全員が合格したが、森元六および鶴羽松太郎の両教授は理学部に配置転換されることになった。

浅野・鶴飼の両主事が指導した金沢医大附属薬専の時代は研究心大いに興り、1923～51年の29年間の卒業生1,112名(うち女性5名)の内、博士号を取った者は第1号の柳沢秀吉をはじめとして80名を超しており、大学教授も久保田晴寿(徳島大・元学長)のほか、33名を数え、アカデミックな学風であったことを示している。

1949年5月31日、新制大学が発足し、懸案の金沢大学薬学部となる。北陸帝国大学の設置は当地方の永年の願望であり、1911(明治44)年以降幾度も議会では可決されながら成就しなかったものが、皮肉にも敗戦によって薬学は学部として発足することになった。

1951年3月に金沢医科大学附属薬学専門部は最後の卒業生を送り出し、栄光の歴史に幕を閉じた。ちなみに、創設より附属薬専時代までの卒業生数は約1,670名(内、生存者は約480名)である。

1953年3月、新制大学第1回生が卒業した。翌54年4月に鶴飼学部長は数々の業績を残して、静岡薬科大学長として転任された。

新制大学として発足した後の学部は、火災による本館主要部分の焼失(1957年5月)、1963年までかかった再建工事、豪雪の年(1963年4月)の第17回薬学大会(一部)、64年の大学院修士課程設置、66年4月に製薬化学科を加えて2学科13講座で学生定員80名になる等々の歴史を刻みながら、67年10月28日、殆んど完工していた6階建製薬化学科棟に付置した同窓会寄付の講堂で百周年記念式典を挙行し、同時に『金沢大学薬学部百年史』を刊行している。

第2章 前身各校

第2節あとがき

金沢大名譽教授だった三浦孝次著の『加賀藩の秘薬』という396頁の本がある。これは先生が石川県薬剤師協会の依頼により着手し、途中1957年の薬学部火災で原稿および資料が焼失したため中断していたものを、薬学部百年祭を機に刊行の気持ちを再燃され、構想を新たにして筆を執り完成されたものである。1967年に石川県薬剤師協会より非売品として刊行され、会員に配布されたものであるが、その第二部の「秘薬の解明」で金沢大学薬学部百年の歩みを記述されている。多くの方々はすでに鬼籍に入っておられて聴くすべもないままに、この著書を基盤にして『薬学会誌』1～80号、『医学部百年史』、『薬学部百年史』、『日本薬学会百年史年表』などを参照して記述の責を果たした。

新制大学の学部になるまでの足跡を振り返る時、幾度も廃校に追い込まれた時もあるれば、大きく躍進した時期もある。それはあたかも国家の盛衰と同じようである。その都度、誰かが立って危機を打開し、あるいは躍進の原動力として事に当たられたが、これらの先人達の深い愛情が金沢大学薬学部の歴史を連続して保たせた原因になっていることを痛感し、敬意を表する次第である。

金沢は百万石の藩政時代の豊かさが大きな原因で、文化的には高度だが、保守的で進取的でない風土がある。このため実業の製薬産業が発展せず、医師会の保守的な力も強い。また薬学の非社会的な雰囲気もあって、長い間、本校は研究的な雰囲気を重視するアカデミックな学園への志向に存在意義を求めた。浅野・鶴飼以前の卒業生の多くが、安藤謙治・石黒伝六（金沢）、中田清兵衛（富山）、沖勘六（名古屋）、富士谷文蔵（四国）などの様に各地の薬業界の指導者として活躍しているのに対して、この時代以降は大学教授あるいは研究者として展開しているのが目立つ学園であったと言える。異色者の一人に民族学や文化史的な視点から医療や薬に関する研究に取り組み日本医薬史学会の会長として活躍した宗田一（1996年逝去を機に国際日本文化センターに膨大な蔵書が寄付された。）もいるが、反面、これは地域社会との密着性を薄め、薬剤業務やプロパー業務の軽視に連った。また一学年が40名の少人数のため、師弟関係は密接で家族的な雰囲気の学園を長所としていたが、一方、卒業生数の少ないことが社会的発言の幅を狭めたとも言える。旧帝大系薬学部の設立（1950年九州、51年大阪、54年北海道、57年東北）により母校の学術的学園としてのユニークさが薄れ、これ等学校の博士課程の無条件付置により予算と人的戦力に差が生じ研究的能力は相対的に低下した。1985年、大学院博士課程の発足をみて制度上はやっと追い付いたが、現在の社会はさらに進んでおり、薬学に医療への直接参加および環境汚染問題などでの役割も求めている。社会における薬学部の存在意義を認識し直し、出血を覚悟しながら再編成して再出発することが要求されているのではないだろうか。

3 金沢高等工業学校・金沢工業専門学校

(1) 加賀藩の伝統と明治期の実業教育

加賀金沢の伝統的な産業が非常に高いレベルで育ち、かつ現在なお懐古趣味に止まることなく成長している事実を、広岡治樹氏は次のようにとらえている。

本物が求められる現代に、素材において本物を見つけようとする、伝統的な産業に目を向けなければならない場合が多い。一方、伝統的な産業が懐古趣味のなかで生きようとする、産業としての力も、それに携わる人々をいきいきとさせる雰囲気もなくなってしまふことが往々にしてある。そんな意味で、加賀金沢は非常に面白い土地である。一方で、言うまでもなく京都を除けば伝統的な産業がこれほど高いレベルで息ついている土地はない。

中略 かつて、中心となる産業は藩・殿様のおかかえであった。

藩はそれを保護したのではない。産業の主体者となったのである。今でいえば公共投資に近い感覚だろう。それが豊饒の産業文化の引き金となった。⁽¹⁾

加賀藩が外様で百万石という大藩のゆえ、幕府との軋轢をさけるためにも、様々な文化政策が奨励された。加賀藩が最も文化政策に力を入れたのは、五代藩主綱紀（1645～1723年）の時代といわれる。代表的な例をいくつか挙げてみよう。

加賀友禅 もともと加賀にあった無地の梅染めの技術に、京都から1712年に招かれた宮崎友禅齋が京友禅の技をプラスし、新しい加賀友禅が確立した。

金沢箔 1593（文禄2）年、藩祖前田利家が金沢で金銀箔の製造を命じた。十円玉ほどの金を畳1畳ほどの大きさにまで打ち延ばす職人の技である。

九谷焼 大聖寺藩祖の前田利治が九谷の金山で磁鉱を発見したことに始まる。

かくして金沢の絹織物・陶器・刺繍などは伝統工芸として明治期に入ってもなお盛んに継承され、京都に次ぐ工芸の街として全国にその名を知られるようになった。しかし、これらは工業の立場からみると、いずれも美術工芸的な家内手工業にすぎず、機械工業に至っては皆無であった。これは北陸地方に工業・商業の高等教育機関が欠如していたことによるものと考えられる。全国的にみれば、すでに仙台・米沢・桐生・東京・名古屋・大阪・熊本には高等工業学校が、京都には高等工芸学校が、東京・神戸・長崎には高等商業学校が、さらに盛岡・鹿児島には高等農林学校が設置されていた。金沢市には工業学校が設置されており、陶磁器・蒔絵・彫刻・金工・刺繍・絵画・染色技術などが教授されていたが、いかんせんその程度はいまひとつであった。ここに地元官・財界一致して高等工

業学校誘致の機運が高まったのも至極当然の帰結であろう。かくして1912（明治45）年3月、県会より内務・文部両大臣あてに建議書が提出され、時を同じくして金沢市からも金沢高等工業学校新設に関する意見書が知事並びに国会に送付されたのである。

（2）県、市の高等工業学校設立要求と経過

石川県県会よりの建議書

日露戦争後、わが国の産業は急速に発展拡大し、特に綿糸紡績・織物・ガス・電気・造

高等工業学校設置に関する建議

古来、北国の地工芸を以て名あり、絹織物・陶器・刺繍の如き現に輸出貿易品として声価噴々たり。而して其工芸進歩の比較的遅々たると機械工業の振興せざる所以のものは、惟うに高等教育機関の欠如せるに由るにあらずんばならず。蓋し既に工業教育の素地あり、技芸手工の素養あり竿頭一步を進めて高等工業教育を施さば其従来の工芸に顕著なる進歩を来し時代の必要に応ずべき工業の勃興すべきや曠々火を睹るが如きものあらん。

金沢市に工業学校の設置せられて20有6年、其授くる所の陶磁器・蒔絵・彫刻・金工・刺繍・絵画・染織技術に至りては大いに見るべきもの少なからずと雖も、其教育の程度卑近にして且一定の階級に止まり未だ現今以上の発達も示さざる所以のものは之を指導誘掖すべき高等工業教育に欠くるあるに外ならず、是れ北国工業家の常に遺憾措く能はざる所なり。況んや機械工業・化学工業等必要なる智識に至りては全然欠如せるものありて百般工業進歩の途を杜塞せるは北国人士の毎に痛歎する所なるをや。

顧ふに東京における多種高等技芸学校の外、関西には京都・大阪・神戸・名古屋等に、九州には長崎・鹿児島、中国には山口、東北に在りては仙台・盛岡・米沢等の各市に農商工各業に関する高等教育機関ありて、井然分布し以て地方民業発展の素地を造れり。然るにひとり北陸七州の地に在りては一も這般の設備あることなく七州五百石の野首をして空しく啓蒙の指南を搜索せしむ、是教育機関布置の宜きを得たるものと謂ふ可けんや。

金沢市には既に工業学校の設置あり、之を廓入して高等工業とせば其設立費の如き甚だ多きを要せざるべし。仰ぎ願くば速やかに吾人多年の希望を容れて北国の中央なる金沢市に高等工業学校を設置せられんことをここに本会の意見を具して謹んで建議候也。

石川県会議長 饒谷与右工門

内務大臣 原 敬 殿

文部大臣 長谷場純孝殿

船・機械器具・肥料・セメント・製糖・ビールなど重工業、化学部門の新興産業が勃興してめざましい進展を遂げていた。したがって、技術者の需要は旺盛であった。石川県でもこれがために高等技術教育機関設置の必要性が高まった。1911（明治44）年11月の県会で高等工業学校の誘致運動を議決し、1912年3月10日、これに基づき飭谷議長名で李家知事を通じて内務・文部両大臣あてに前掲の建議書を提出した。

金沢市会よりの意見書

金沢高等工業学校新設に関する意見書

時の古今、地の東西を論ぜず国家の福利は実業教育の施設に随伴せり。故に国力の許す限り之が発達に務むべきは為政者の責任なりとす。然るにわが文部当局者の施政を勘案するに実業教育機関の布置に偏倚あるが如し、請ふ其事実を列挙せん。

中央部には京都高等工芸・大阪高等工業・神戸高等商業・名古屋高等工業の4校あり、東北部には東京高等商業・同工業・同美術・仙台高等工業・米沢高等工業・盛岡高等農林の6校、西南部には山口高等商業・長崎高等商業・熊本高等工業・鹿児島高等農林の4校ありてわが北陸に一校も有せず、是果して布置の上に於いて偏倚ならざるか。日本海岸の大部分を占むる地方にして実業専門の教育機関を欠く。地方人民の一大不幸のみならず国家の為大いに遺憾とせざるを得ず。

聞説きくたらく前田侯爵家の先代利光、綱紀の二君は其当時において工業は富国の基礎なりとし鋭意その発達を奨励したる結果、工業歴史に今尚嚇々たる光輝を放ちつつある加賀羽二重、陶・銅・漆器、越中の木工・金工等は夙に世界に宣伝せらる。輸出羽二重の今日あるは亦其余光に外ならざるべし。当局者豈夫れ光輝ある歴史を有する我金沢市に前代の遺範に依りて今日より二十六年前に工業学校を設立し現に県経営として美術工業に関する学科を置き広く子弟を教養しつつありと雖も其程度に於いてはまだ満足すること能はず、且夫れ近事中学の卒業者にして高等工業の教育を受けんと希望するもの甚だ多し。而して学費の不足或いは監督の不安より止むを得ず他の学科を選択する者少なからず、是即ち当該機関の設置なきが故なり。

以上陳述したる如く布置の偏倚に顧み工業の歴史に鑑みて速やかに金沢高等工業学校を新設せらるるに於いては学資に豊富ならざるも監督不安のため躊躇する者も相率いて水の低きに就くが如く入学せん。

是我金沢市が地方発展の為国家百年の福利の為に高等工業学校の設置を切望して止まざる所以なり。若しそれ用地の負担の如きに至りては今より甘受を期待せん。

閣下幸いに、文部当局に謀り金沢市の意見をして速やかに徹底せしめられん事を。

第2章 前身各校

同じく1912年、金沢市会も高等工業学校の設置は市の発展上、重要でありこれを遂行する必要があるとして調査委員10名を任命した。

1月18日の市会は満場一致で高等工業学校を金沢市に設置する事を議決し、前掲のような意見書を作成して石川県知事並びに国会に送付したのである。

石川県会・金沢市会ともに前掲のような長文の建議書・意見書を提出したのである。

両者の共通点は、まず第一に前節でも詳しく述べているように文部省の直轄学校が北陸地方に1校もないことで、実業教育の機会均等を強く要求している。

また石川県の工業の実態はおおむね家内手工業にすぎず、絹羽二重・陶磁器・漆器などおよそ近代工業に縁遠いものばかりであった。この点北陸地方が、東京・大阪から遠距離にあって、産業振興策の圏外に置かれていたと見られるのも無理からぬことであった。

県立工業昇格案

1887（明治20）年、岩村高俊県令（4代知事）時代にわが国最古の歴史を持つ県立工業学校として金沢区立工業学校が開校している。その学科は染織科・窯業科製陶部・同陶画部・漆工科描金部・図案科絵画部など美術工芸的なものであったが、石川県会はこの学校を母体として機械工業主体の高等工業学校に昇格させる計画を練った。

一方金沢市会は必ずしも県立工業の昇格を良しとせず、新設に要する校用地の望みがあれば多少の犠牲を払ってもこれに応じる気構えを持っていたようである。

不況の影響

かくて石川県会からの金沢高等工業学校設置の建議書は、1912年3月25日の衆議院に上程されたが、同様の建議書が福井県からも提出されていたのであった。石川県案は第28議案、福井県案は第29議案となって委員会に提出されたが、委員長戸水寛人（石川県選出）は「両案を合して北陸地方に一つの高等工業学校を設置することに修正す」と報告し、衆議院で可決採択されたのである。福井・石川両県は誘致運動に鎬しのぎを削った。日本の国力は日露戦争後は政府の積極的な戦後経営方針により、また日銀の金融政策のおかげで大いに繁栄したものの極めて不安定で一時的なものであり、1907年にアメリカ・ヨーロッパで発生した恐慌によりわが国の生糸などの輸出は多大の影響を受けて激減し反面輸入は高水準を維持した結果、貿易収支は悪化し、日本の景気はどん底に沈んでいった。このように明治から大正にかけて日本経済は重大な危機に陥り、到底高工新設など不可能な状態であった。

金沢商業会議所の請願

1914（大正3）年3月に至り、金沢商業会議所の高工誘致運動を再燃した。横山章会頭ほか議員一同が参集して総会を開き、かねてから懸案の金沢高等工業学校新設のため県下産業人・財界人は奮起すべしとし、県市一体の運動を展開すべきであると決議して衆議院議長大岡育造あてに次の請願書を送付したのである。

高等工業学校を金沢市に設立する件に付き請願

北陸地方に高等工業を置くことに付いては明治45年第28回帝国議会において衆議院より政府に建議せられたるところに有之候。

金沢市は其位置よりするも其人口よりするも將た其歴史よりするも北陸地方工業の中樞たるべきは多言を要せず。既に設備頗る整頓せる県立工業学校ありて県下及近隣工業界に多大の貢献をなしたる事例に徴し国立高等工業学校を北陸に設くるに方り其位置を金沢市に撰ぶは最も適當の事と存候。

此件に関しては既に明治44年石川県会より、45年金沢市会より共に当路に要望したる所に之幸に此議政府当局の容るところとならんか県市民は歎んで荷い得る限りの犠牲を提供するに躊躇するものに非らず候。

当市に於いては旧藩時代より各種の工芸旺んに興り工芸的素養由来すれところ最も遠く且深きもの有之候。加ふるに北陸線全通以来隣県市民の熱烈なる希望を容れ国立工業学校を金沢市に設立せらるるあらば其効果最も著しきこと謹んで請願仕候也。

金沢商業会議所会頭 横山 章

衆議院議長 大岡育造殿

(2)

金沢商業会議所はさらに1916年10月、県立工業試験場設置建議書を県知事あて提出して工業立市による金沢市の発展を強調したのである。

このようにして高工誘致運動は全県挙げて行われたが、中でも県選出の戸水寛人、横山章（前金沢商業会議所会頭）、中橋徳五郎3代議士の尽力は大きかった。

設置の夢実現

北陸に高等工業1校新設という案が国会で採択されながら実現までにはさらに数年間を要した。1914年7月に勃発した第1次世界大戦は1918年12月まで続くが、これによって戦争当時国の窮乏とは裏腹にわが国には軍需品や食料品の注文が殺到し、「大戦景気」を招いた。これを契機に産業界も好況を来し、化学工業・機械工業・金属工業・造船・鉱業など急激な発展を見るに至った。これにより高等工業学校増設の機運もようやく熟したのである。しかし誘致運動は全国的に盛んとなって、金沢市も安心してはいられぬ情勢になっていた。そんな中、1916年8月1日、文部省はついに高等工業学校増設の経費15万円を計上し、閣議で建設地を決定する旨発表したので関係者は色めきたった。候補地としては金沢のほか横濱・広島・静岡・浜松などが挙がっていたが、工業立地に優れた横濱や広島が有力な対抗馬であった。

言論界でも全県民の一致協力を叫んだ。すなわち北国・石川毎日・金沢毎夕・新愛知・

第2章 前身各校

北陸の5新聞社代表が参集して次のような決議文を県知事・金沢市長・県会議長・会議所会頭・衆参両院議長等に送付している。

決議文 今回政府が新設せんとする高等工業学校は従来の関係に徴するも亦配備の上よりも推定するも当然金沢市に設置すべきものと認む。仍って下記の新聞社は歩調を一にして運動の衝に立つものに対して後援、督励して以て目的の貫徹に力む。右決議する。

大正5年8月6日⁽²⁾

かくして陳情は全県超党派の運動として盛り上がりを見せた。東京市京橋区に事務所を置き、本多政以男爵、横山章代議士、辰村県会議長らが隈重信首相、武富蔵相らを訪れて陳情した。一方、県選出国議員らは文部省に赴き、高田文相、梅原次官、松浦専門学務局長に対して同様の陳情を行った。

かくて1916年8月16日、閣議が開かれて、文部大臣より「まず敷地の寄付を受ける事を条件とし、その次年度より高工を建設する」旨の発言があり、建設地を金沢・広島・横浜とすると発表したのである。

石川県は横山代議士から私財10万円の寄付を受け、このうち6万円を敷地の購入、整地等に計上した。

かくして念願の高等工業学校は文部省の第11高等工業学校の呼称のもとに手続きが取られた。

1919(大正8)年、内閣は原敬首相に替わっており、中橋徳五郎文部大臣のもと「高等諸学校創設及拡張費支弁に関する法律案による高等教育機関拡張6か年計画」案が議会で可決され、金沢高等工業学校がこの計画の中に包括され建設の軌道に乗った。

中橋文相の立案した6か年計画では、高等学校10・高等商業7・高等農林4・外語学校1・薬学専門1などに加えて高等工業6校の合計29校の新設と、既設高専・大学の拡張、官立医専5校・東京高商の大学昇格などが目論まれており、石川県では金沢医専の大学昇格、金沢高等工業の新設が含まれていたのであった。

1911(明治44)年に石川県会で初めて高工設置建議案が取り上げられて以来、実に10年の歳月を経て日の目を見るに至ったのである。この間知事は李家、坂、熊谷、太田、土岐の5氏、金沢市長は山森(2期)、飯尾の2氏が務めており、内閣も西園寺公望、桂太郎、山本権兵衛、大隈重信、寺内正毅、原敬氏らに替わっている。文部大臣も次々替わったが、最後の原内閣のとき石川県出身の中橋徳五郎氏であったことも幸いであった。

建設にむけて

いよいよ学校敷地選定の段階となったが、約15,000坪という広大な土地であり、県・市当局は地価の高騰を慮って極秘理に調査を始めた。候補地として金沢市郊外の石川郡三馬村泉・同崎浦村笠舞・同村上野新・金沢市横山町の4カ所が挙げられた。いずれも閑静で教

育環境に優れていた。しかしひとたび候補地に内定するや地元の誘致運動は激烈となった。

1918年2月に文部省から建築課長が来県して最後の調査をした結果、建設地として崎浦村に白羽の矢が立てられた。これは小立野に居住する県会議長飭谷与右工門や上野新区長上野八三郎らが地元からも寄付金を集め、県当局と地価の交渉を行うなどした努力が実ったものである。この地は小立野・紫錦台の一角で、寛永6年に辰巳用水が完成し、同7年余水〔あまった水〕をもって新たに開発を命じられて上野村となり、延宝6年には上野新と称したところである。敷地予定地は田植え前には菜種やれんげの花盛り、春から夏にかけては緑の田園風景となり、そして秋には黄金の稲穂がゆれる水田地帯で、近くには犀川・浅野川の清冽な流れがあり、風光明媚な一帯で学校建設用地としては恰好の場所であった。買収面積は16,553坪、買収価格は35,766円であった。なお崎浦村は1936年金沢市に編入されている。

同18年4月、創立のための予算72万円の寄付が石川県知事から申請され許可されている。その後寄付者が増加して総額は75万円に膨らんだ。

内訳	石川県 負担	220,000 円	金沢市 負担	130,000 円
	県民個人寄付	400,000 円		
県民の大口寄付者名	前田利為侯爵	200,000 円	横山 章	100,000 円
	横山隆俊男爵	30,000 円	横山俊二郎	10,000 円

校舎の建設

1918（大正7）年3月4日、建設敷地が崎浦村上野新に決定されるや直ちに文部省測量班による測量が始まり、約1カ月で終了した。

同18年9月には名古屋高工教授青戸信賢が金沢高等工業学校創立事務取扱いに決まり来県し、文部省建築課金沢出張所の監督のもとでいよいよ建設工事が始まった。

創立のための予算は、当初1918年度から21年度までの継続事業として72万円が計上されたが、大正時代は第1次世界大戦の影響で景気は上向き、物価の高騰は著しいものがあった。卸売物価指数は1914年を100とすれば1918年には227に達していた。このような悪条件が重なったため校舎建築には1年間の延長が余儀なくされ、また創立費も72万円から下記の如く大幅に増加した。

創立関係費用

	予 算	決 算
建築費	467,400 円	771,599 円
設備費	220,000	374,000
事務費	32,600	50,470
計	720,000	1,196,069

第2章 前身各校



写真 2 - 2 4 新築校舎全景

工事の進捗は第Ⅰ期工事が1918年10月3日着工、1921年4月6日完成、ついで7月18日に第Ⅱ期工事が、さらに翌年10月16日に第Ⅲ期工事完成した。しかし物価高騰による工事延伸で、すべてが完工したのは着工から5年が過ぎた1923年6月29日であった。新校舎は写真2-24のような偉容で、左手に本館、正面に講堂、右手奥に機械工場の煙突が見える。「規模の宏大は北陸一の校舎とって過言でない」と激賞した報道がされた。建物の詳細は次のとおりである。

第Ⅰ期工事

本館（教室・事務室）	362.87 坪	108,222 円
特別教室（2棟）	80.00	20,120
生徒控室	60.00	9,510
車寄せ	5.00	1,423
宿直室・小使室	24.75	3,695
便所（3棟）	22.00	5,096
職工控室・物置・銃器室	68.00	8,744
応用化学工場・実験室（2棟）	290.00	89,946
機械工場・実習室（2棟）	320.00	97,741
汽缶室・動力室	77.25	27,662
溶解炉室	9.00	6,100
材料試験室	40.00	10,283
薬品庫	12.00	6,100
硫化水素室	4.50	1,760
材料庫	40.00	6,778

第Ⅱ期工事

講堂兼図書閲覧室	155.10 坪	58,802 円
雨天体操場兼柔剣道場	100.50	20,304

水力実験室	48.00	7,920
圧力給水槽室	6.00	1,416
応用化学科製図室	40.00	9,193
セメント試験室・印刷室・青写真室	75.50	16,927
書庫・倉庫	40.00	16,512

第Ⅲ期工事

守衛詰所	6.75 坪	2,295 円
板金工場	37.50	8,100
同 付属室	40.00	4,980
流速計検定付属室	2.55	630
有機分析室	12.00	3,000
物 置	70.00	7,678
渡り廊下（各期毎に増設）	209.77	34,655

なお敷地総面積は16,553坪でその内訳は次のとおりである。

校舎 敷地	9,048 坪	54,288 円
運動場敷地	5,358	32,148
構 築 物	2,147	12,883
計	16,553	99,319

（3）金沢高等工業学校開校

初代校長と開校時の教授陣

1920（大正9）年11月26日、勅令第551号で文部省直轄学校官制を改正し、それまで第11高等工業学校として取り扱われてきた本校は、正式に金沢高等工業学校として追加登録された。

校長には事務嘱託として学校創立に当たっていた名古屋高工教授、従五位勲六等、青戸信賢（あおとのぶかた）（写真2 - 25）が任命された。青戸は当時44歳、東京帝国大学工科大学土木工学部卒業の俊才で、1909（明治42）年には土木工学研究のため欧米に留学の経験もあった。職員定員は教授5人・助教授1人・書記3人でスタートしたが、1922年には教授16人・助教授7人・書記3人に充実されていた。

学科は最初、土木工学・機械工学・応用化学の3科でスタートした。学科長には土木工学科：大串栄太郎、



写真2 - 25 青戸信賢校長

第2章 前身各校

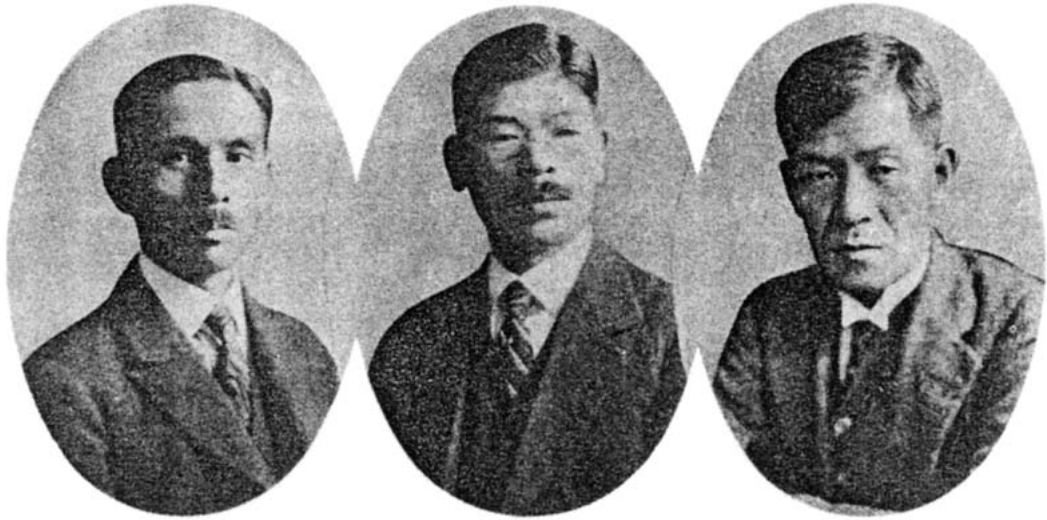


写真2 - 26 赴任当時の3科長（左から大串、田淵、上田各教授）

機械工学科：田淵京次郎、応用化学科：上田嘉助の各教授が任命された（写真2 - 26）。いずれも40歳未満の新進気鋭の士で、澁刺たる空気がみなぎっていたのである。なお、教務課主幹には普通学科主任で英語担当の大土井源教授があたった。

上田嘉助教授の回顧録から当時の様子的一端を覗いてみよう。

私は留学生から帰朝後の大正10年8月25日付で金沢高等工業学校教授に任ぜられたが、金沢に赴任したのは9月の初めで既に4月に開校していたので、新入生は第2学期に入っていた。既に中本教授が万事をやってくれていたので、有機化学の講義をはじめた。私は創立委員の一人でもあり、年齢的にも若いし、また私なりの夢もあったので、中本教授と共に何らかの特色あるものにしたいとの理念に向かって、私の夢を具現すべく邁進した。

特に実験実習を重視してカリキュラムに実験時間を多く課して、実験設備を充実することとして、米国留学中の体験を生かして思い切って、実験用具を完備した。更に、実験研究を促進するために最終学年の二、三学期には卒業研究を課して、卒論を提出せしむることにした。

この研究重点方針の促進のためには、当時の高工としては思い切って、内外の化学関係の純正・応用両面の学術誌のバックナンバーを揃えて研究に資し、更に、三年生には準正課として雑誌会を週一回課して学生に輪読せしめて、研究に対する意欲を促進せしむるなどの高工としては一つの特徴を実現したのである。この研究に対する重点方針は後に、卒業生から多くの学位取得者を見るに至って結実している。

私は化学工業は、原料から化学の原理に基づいて付加価値の大きい製品を生産するもので、化学装置が重要な役割をするものであることに思い合わせて、幸いに機械科の田淵教授をお願いして、応化の学生に機械工場実習を課し、更に、機械学に化学機械を取り入れることをお願いしたのである。後年榑場教授の発意によって全国にさきがけて化学機械科が設けられ

て田淵、上田両教授の理念が実現したことになったのである。(学科増設については後述する)

中略

創立時代の校風樹立に触れて見ると、初代青戸校長は人格の陶冶を強調して実業専門教育がとかく職業的に傾いているのは慨嘆に堪えぬ、専門教育の主たる目的は、人格の修養にある。所謂、人間を造るにある。人間が出来たなら学業の大成は自ら期して待つ可きであると「堅実雄大」の校風の樹立をモットーとされたが、この美風はよく実現して校風の特色となった。 中略

私は応用化学科、化学工業科と名称は変わったが第一回から第二十八回まで、創立から最終回まで頑張って創立のビジョンをも確固たる信念を以て実行したと自負している。この間に初代の青戸校長・二代森校長・三代横山校長に上司として仕えたが、特に金沢高工の生みの親ともいべき青戸校長の勇退後の胸像除幕式(昭和17年5月16日)における挨拶は深い感銘を残している。その一節を特記すると、「本校と私との深い因縁からしまして、本校舎に愛着を持つばかりでなく、敷地にも一木一草に至るまで無限の愛着を感じるのであります。ここに私の胸像が建設されましたので、常時胸像を通じて学校を見得る事となりました。学校へ来てても来なくても金沢にいてもいなくても胸像を通じて学校を見、そうして学校の発展も卒業生の御出世も眺めうるのでありましてこの喜びは何にも譬えようもないのであります。」(「回顧録」上田嘉助)

第1回入学宣誓式

1921(大正10)年3月中旬、第1回入学試験が新築なった校舎において行われた。受験生は339名が全国から参加し、倍率は2.8倍に達した。

4月6日に112名の合格者が発表された。科別および出身地別内訳は次のとおりである。

	合格者数	志願者数
土木工学科	40名	76名
機械工学科	40	100
応用化学科	32	63

出身地別では、北海道3・新潟7・京都7・愛知2・静岡2・岐阜4・福井4・石川59・富山6・鳥取2・島根2・岡山4・徳島2、そのほか東京・大阪・広島・埼玉などが1名であった。

第1回の記念すべき入学宣誓式は4月8日、講堂が未完成のため本館2階の機械科大製図室で行われた。なお開校式は講堂等校舎の一部が未完成のため、全学年が揃う3年後に延期された。

当時世の中は日増しに軍事色が濃くなっていく中、金沢市に初めて近代科学教育の殿堂ともいべき高等工業学校が誕生したのである。北陸毎日新聞では新しい校舎の全景写真を掲載し、“設備は細心の注意が払われ、各室とも採光よく、- 中略 - 規模の広大は北陸一の校舎といって過言でない”と絶賛している。

第2章 前身各校

この他工事に従事する者、もしくは従事しようとする者に知識技能を授ける目的で修業年限1カ年以内の別科生を募った。入学資格は年齢15歳以上で尋常小学校卒業以上の学力を有するものとし、第1回入学生として14歳から46歳までの87名が合格した。

健実雄大な校風

創設期に学生心得・校章・校歌・校旗などを定めて健実雄大な校風の発揚に努めた。

学生心得 本校学生たる者は徳性を涵養し、智能を錬磨し以て国家有用の工業者たらんことを期すべし。居常守るべき道多端なりと雖もここに其の大綱を挙示すること左の如し。

志操を強固にし学芸に勤勉し誠実周密事を処するの習慣を養成すべし

身体を鍛練し精神を修養すべし

規律を守り責任を重んじ謹恪重厚の風を持すべし

師長を尊敬し礼儀を敦くし学友を親愛し協同融和すべし

学生に向かって開口一番青戸校長が発した言葉は「質実剛健」であった。学生たる者の、かざり気なく強く正しく行動せよ。志操強固・誠実周密・謹恪重厚・礼節融和を学生精神の糧とするよう訓したのであった。

校章 制帽・制服を定め、制帽には青戸校長の発案による校章(図2-6)が使われた。

これは「高工」の文字を簡単にそのまま図案化したものだが、質実剛健を主唱する校長の気風のあらわれといえよう。また逆三角形でいかにも不安定に見えるが、これは力学上「不安定の安定」と称する自慢の形であるといわれた。

上着の左襟には図2-7に示す真鍮製金色章を付した。

またボタンは図2-8のデザインであった。

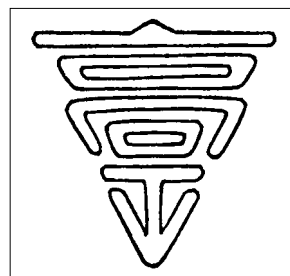


図2-6 校章

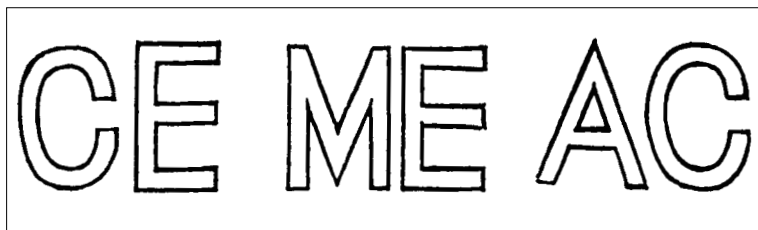


図2-7 襟章

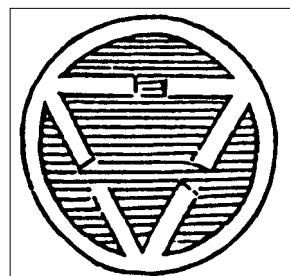


図2-8 ボタン

校旗 紫地に金で「高工」の文字が入った校旗は1924年新調されたが、金沢高工を象徴して燦然と輝いた。

校歌 校歌は教職員学生から募集された。10数人の応募の中から1等水上次吉、2等亀田外、3等横井元雄の作が選ばれ、これを元に川路柳虹が作詩、弘田龍太郎が作曲した。

“春の光に目醒めたる 花乱れさく丘のうへ”で始まる校歌は、白山の秀峰を仰ぎ、工

業の繁栄を志す若い学生の士気を高揚するものであった。

開校式

1923（大正12）年6月2日、新装なった大講堂において待望の金沢高等工業学校開校式が挙行された。学校の建築設備もようやく完成し、また学生も3学年がそろい、工業教育の殿堂として前途洋々の船出となった。

この日文部省から大臣代理として粟屋実業学務局長はじめ武部宗教局長、柴垣建築課長ら来賓約4百余名、それに教授学生3百余名が出席して盛大に開催された。式では来賓各位の祝辞が述べられ、全国の帝大総長や高工校長からの祝電披露があり、最後に一同校歌を斉唱して式を閉じた。石川県知事山県治郎、金沢市長相良歩両氏の祝辞要旨は、以下のとおりである。

石川県知事祝辞（要旨）

現下我が国の急を要する所は大いに近代工業の振興を期し速やかに欧米に対比し遜色なからしむる一事なり。

翻って石川県は往時百万石提封の跡、美術工芸に因縁深く名工雅作の輩出を見たるも民情動もすれば進取の概を欠くの嫌なきを保せず、現下時運の要求に鑑み新産業の勃興を策さむには大いに現代工業を勸奨しその教育を普及するの要を感ずること甚だ切なり。今や本校は北陸地方に於ける斯界最高唯一の權威として金沢に位す。県民の歡喜何そ之に加へむ。希くは校運の隆昌と相ともなって本県工業界に寄与する所愈々大いなるものあらむことを。

金沢市長祝辞（要旨）

去歳偶々金沢高等工業学校の本市に設置せらるるに会す。地方の子弟入りて以て工業の教育を学ぶべく当業者憑りて以て斯業の智力を啓沃するを得へし。

今や正に創立2年を経、設備概全きを致し、盛んに開校の式典を挙げらる。真に欣慶に堪へざるものあり殊に別に開かれたる展覧会は此地未だ曾て有らざるの催行なり。之を觀て科学の大いなる威力を察し工業の新なる規模を知り奮起せは亦延ひて国家の広益なり。盛会を祝す⁽²⁾。

College Song music by R. Hirota



金沢高等工業学校
金沢工業専門学校
校歌

川路 柳虹 作曲
弘田龍太郎 作詞

図 2 - 9 College Song

第2章 前身各校

カリキュラム

開校当初の各料のカリキュラムは表2-12・2-13・2-14各表のとおりであった。

表2-12 土木工学科

学 科 目	第1学年毎週授業時数			第2学年毎週授業時数			第3学年毎週授業時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修 身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体 操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
英 語	4	4	4	2	2	2	2	2	2
数 学	5	5	5	4	4				
物 理 学	2	2	2						
地 質 学	3								
製 図 学	3	3							
応 用 力 学		3	3	3	3	3			
応 用 機 械 学			2	2	2				
電 気 工 学							1	1	1
家 屋 構 造		2	2						
施 工 法	5	5	3	3					
鉄筋混泥土工法					2	2	2	2	
橋 梁				3	4	4	4	4	
道 路	2	2							
鉄 道				4	3	3	3		
衛 生 工 学					2	3	3	2	
河 海 工 学					2	3	3	3	3
発 電 水 力 学						2	2	2	
測 量	5	3	3	3					
土木行政及工業経済							2	3	3
製 図 及 実 習	7	7	12	12	12	14	14	17	27
計	39	39	39	39	39	39	39	39	39

表2-13 機械工学科

学 科 目	第1学年毎週授業時数			第2学年毎週授業時数			第3学年毎週授業時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修 身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体 操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
英 語	4	4	4	2	2	2	2	2	2
数 学	5	5	5	4	4				
物 理 学	4	4	4						
製 図 学	3								
冶 金 学		2	2						
応 用 力 学		2	2	2	2	2			
機 構 学		2	2						
電 気 工 学							3	3	3
蒸 汽 缶			2	2	2				
蒸 汽 機 関				2	3	3	2	2	
内 燃 機 関							2	2	1
水 力 機 械					1	2	2	2	2
特 種 機 械						3	3	4	5
工 作 法	3	3	3	3					
工 場 建 築							1	1	1
工 業 経 済							1	2	2
製 図 学	9	7	6	10	11	12	10	9	10
実 習 及 実 験	8	7	6	11	11	12	10	9	10
計	39	39	39	39	39	39	39	39	39

表 2 - 1 4 応用化学科

学 科 目	第 1 学年毎週授業時数			第 2 学年毎週授業時数			第 3 学年毎週授業時数		
	第 1 学期	第 2 学期	第 3 学期	第 1 学期	第 2 学期	第 3 学期	第 1 学期	第 2 学期	第 3 学期
修 身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体 操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
英 語	4	4	4	2	2	2	2	2	2
数 学	2	2	2						
物 理 学	4	4	4						
機 械 学				3	3	3			
鉱 物 学	1	1							
冶 金 学				2	2				
無 機 化 学	3	3	3						
有 機 化 学	3	3	3						
物 理 化 学				1	1	1			
電 気 化 学				2	2	2			
製 造 化 学				6	8	8	6	6	6
試 金 術 学				1	1				
電 気 工 学							2	2	2
化 学 分 析	15	15	16	16					
工 場 実 習					14	17	21	23	23
工 場 建 築							1	1	1
工 業 経 済							1	2	2
製 図	4	4	4	3	3	3	3	3	3
計	39	39	39	39	39	39	39	39	39

記念展覧会

各科が独自の展示を行い、約10万人の観覧者が興味深く見学した。

土木工学科：トンネル型アーチを入ると上水道の水源地・トンネル・地下鉄道・吊橋橋梁・港湾などの模型が展示されており、また測量機械の説明もあり賑わった。

機械工学科：飛行機用エンジン・機関車など人目を引く展示物が並び、また工場では各種の機械類が唸りを上げていた。



写真 2 - 2 7 開校式典の記念ゲート

第2章 前身各校

応用化学科：大香水塔で見物人の目を引き、顔料製造や砂糖の精製の実演が行われ、石鹼・香料・ポマードなどの即売品も人気があった。

祝賀演劇

翌3日夕方からは講堂で祝賀演劇が催された。出し物は次のとおりであった。

各科合同	アインシュタイン相対性理論劇		
土木工学科	順番	(菊池寛作)	
機械工学科	噫無情	(ユーゴー原作)	
応用化学科	親	(曾我迺家五郎作)	

(4) 戦前の発展

志願者の激増

金沢高工が新設された1921(大正10)年ごろ、わが国の経済情勢は不況のどん底にあった。その1923年9月には関東大震災の発生で東京は壊滅的な打撃を受けた。

昭和に入っても不況は深刻化するばかりであったが、一方第1次大戦後の産業開発意欲は旺盛で、政府も不況打開策としてより高度の新産業育成と産業合理化の

推進、新輸出市場の開拓を積極的に打ち出したため技術者人材の要求は各産業部門とも盛んとなった。その影響を受けてか本校志願者の数は表2-15に見られるように、1928(昭和3)年以降驚異的に増加し、37年には10倍を超える難関となった。志願者の出身地は地元石川県はじめ北陸地方はもとより、北は北海道から南は九州・沖縄まで全国に及んだほか、当時の朝鮮・台湾・満州など外地からの応募もあった。

卒業生

1924(大正13)年3月15日、第1回卒業式が挙行され、3学科から91名の若人が巣立っていった。1937年までに1,472名を社会へ送り出したのである。不況の風は深刻であったが、新卒業生は各方面に前途洋々の船出をした。就職先を見てみると時局を反映したも

表2-15 金沢高工の志願者・入学数(創立から1937年まで)

	志願者数	内訳 (土木・機械・応化)			入学者数	内訳 (土木・機械・応化)			倍率 (平均)
		土木	機械	応化		土木	機械	応化	
1921年 (大正10)	239	76	100	63	112	40	40	32	2.1
22	301	128	111	62	118	41	42	35	2.6
23	221	76	82	63	103	43	32	28	2.1
24	299	117	75	107	110	40	40	30	2.7
25	301	104	121	76	104	40	38	26	2.9
26	372	150	151	71	112	41	42	29	3.3
27	362	170	120	72	102	37	38	27	3.5
28	725	289	301	135	117	41	43	33	6.2
29	530	253	198	79	123	45	48	30	4.3
30	647	245	273	129	126	46	46	34	5.1
31	680	226	352	102	133	49	48	36	5.1
32	772	272	317	183	127	46	47	34	6.1
33	727	266	318	143	129	46	46	37	5.6
34	696	248	280	168	123	46	47	30	5.7
35	973	273	478	222	124	43	46	35	7.8
36	909	321	373	215	128	46	47	35	7.1
37	1,261	327	570	364	124	45	47	32	10.2

のが多い。日本曹達・日本電気・東洋レイヨン・日立製作所・新潟鉄工所・古河電気・鐘淵紡績・三井物産など大会社のほか、舞鶴海軍工廠・中島飛行機・帝国火薬・広島陸軍造兵廠などの軍需部門、さらには南満州鉄道・朝鮮窒素肥料・台湾製糖など外地への雄飛もあった。

校舎等増築

1923年に開校式を挙げて校舎の完工を祝ったが、その後必要に応じて逐次増築された。1933年までに建てられた主な建物は増築順に、高熱電気化学実験室・写真石版室・危険薬品庫・生徒控室（増）・機械製図室・電気工学実験室・蒸気試験室・測量器械室・電気実験室・特殊化学実験室である。

また、1928年には外国人教師のため市内石引町の土地約140坪を購入し、木造2階建45坪の官舎を建築した。

機械工学科の火災と復興

1935年4月12日早朝、機械工学科鋳物工場から出火した。折からの東南風にあおられて200余坪を消失、損害は総額22万円になった。出火原因は不明であった。早速復興計画が練られた。校長らは文部省に報告ならびに復興費用捻出を依頼、また教職員・卒業生ら一丸となって寄付金募集に奔走した結果、翌36年4月までに完全復興を果たしたのである。その結果、全国高工の中でも最高水準の設備を有する木型工場・鋳物工場・材料試験室などが完成した。

金沢工業会は1口1円で復興基金を募ったところ、3,100円が集まったので復興記念の映画館を建設して母校に寄贈した。1937年5月16日の開校記念日に映画「球磨摩川下り」を上映して完成を披露した。収容人員150名で、各種工業フィルムを利用して全学科の授業に活用された。

教職員の動き

1921年の開校時、校長1・教授6・助教授3・講師7・書記2・嘱託員3および雇員8の計30名で発足したが、37年には教授20・助教授5・講師8・助手1・雇員30などのほか、戦時下を反映して将校が配属されるなどして計76名に充実していた。開校以来1937（昭和12）年まで17年間、一貫して教壇に立ったのは青戸校長をはじめ12名に達し、学校発展の礎となった。また第1回卒業生の喜多山健児（土木）、鈴木広芳（機械）、大野正巳（応化）、第2回卒業生の割沢善次郎（機械）、石名田喜久男（応化）の諸氏が母校に残って教鞭を執った。

学園生活

質実剛健と自由開放 健実雄大の校風の下、学生はあくまでも質実剛健の日常生活であっ

第2章 前身各校

たが、反面のびのびと大成させるため自由開放の教育方針でもあった。学校と民有地との境界は塀や柵を設けず、校門には柱はあるが扉はない。これもそのあらわれであろう。

寄宿舎を設けず、一切を学生の意思に任せて下宿にした。しかし無責任に放任するのではなく生徒監大土井源教授は下宿先の事情などに気を使った。

校友会 課外活動も活発で、創立の1921（大正10）年には既に校友会が組織され、次の3部に分かれてスタートした。

運動部（剣道・柔道・野球・庭球） 学芸部（演説会・雑誌編集）

常務部（庶務・会計・陸上運動会・旅行・送迎会）

1937年までには相撲・卓球・山岳スキー・馬術・射撃・籠球・排球・音楽部などが増設されている。

運動部の戦績は主なものだけでも、

剣道	中部日本高専	1925年	11月	準優勝
馬術	全国高工馬術大会	31年	10月	優勝
相撲	学生相撲大会	32年	5月	優勝
柔道	全国高工柔道	同年	7月	準優勝
射撃	全日本学生射撃	37年	10月	個人優勝
排球	明治神宮大会	同年	11月	第3位

など目覚ましい。

校友会誌の発行 会誌第1号は1924年3月発行された。A5版143頁の充実感あふれる小誌であったが、文学的色彩が濃く、26年には発行者名が校友会文芸部に改められ、さらに36年の第16号からは「北都」と改題されている。また1931年には短歌・俳句が収録された純文芸誌「詠草」が発行された。

（5）戦争の影響

臨戦体制

1936（昭和11）年2月26日に起こったいわゆる2・26事件以来わが国は戦時体制に移行し、軍国日本の悲惨な運命を辿り始めるのである。かかる非常時局に直面して平和な学園は一変して臨戦の様相となり、本校においても多大な影響を受けざるを得なかった。まず関係者の応召が相次ぎ、1937年の事変発生以来わずか半年でその数は実に50名に達した。学内では防護団が組織され、勉学もそこに防空演習に時間が割かれた。

1940年には文部省の方針により校友会を解散し、新たに金沢高等工業学校報国団を結成したが、戦争は勉学にも影を落とした。

学科増設等

時局を反映して軍需関連産業である機械器具・金属・化学・電気・ガスなどの工業が脚

光を浴びて技術者の要請が強まり、政府は学生の増募、学科の新增設を次々行ってその確保に努めた。本校に関係するものについて1937（昭和12）年以降を示す。

- 1937年 臨時別科として工業技術員養成科を設置。
- 38年 機械工学科学生35名増募。
- 39年 機械技術員養成科を設置。
 応用化学科学生35名増募。
 化学機械科（科長：榎場重男）および電気工学科（科長：益田経次郎）を増設。いずれも学生定員40名。
 両学科新設に伴い隣接地8,206坪を買収、3カ年計画で校舎1,590坪を増築した。
- 40年 土木工学科・化学機械科・電気工学科学生各40名を増募。
- 43年 機械工学科・応用化学科に工業教員養成所付設。

戦時中の本校志願者数、
 入学者数は表2-16のと
 おりであった。

なお、化学機械科および
 電気工学科のカリキュラム
 を表2-17・2-18と
 して次頁に示す。

表2-16 金沢高工の志願者・入学者数(1938年から1943年まで)

	志願者	入学者	土木	機械	応化	化機	電気	倍率
1938年 (昭和13)	1,187	163	42	84	37			7.3
39	1,111	279	47	80	72	40	40	3.98
40	775	403	88	79	78	79	79	1.92
41	1,051	373	79	77	71	68	78	2.81
42	1,051	384	78	79	71	76	80	2.73
43	1,132	362	70	77	71	68	76	3.12

創立20周年

創立20周年の1940（昭和15）年は丁度「紀元2600年」に当たり、10月12日に盛大な開校記念式典が挙行された。戦時下であり工業の使命を十分に強調したものであった。当日は金沢工業会後援の物故工業会員の慰霊祭が執行され、戦死者7柱を含む137柱の霊が祀られた。

校長の交代

1941年3月、本校創立以来21年の長きにわたり学校の施設充実と経営発展に努力し、全国有数の高等工業教育機関の地盤を築いた青戸校長が、後進に道を譲るべく勇退された。後任には山梨高等工業学校土木科長、高等官二等、従四位勲四等森慶三郎が任命された。森校長は京都帝国大学土木工学科を卒業後、大阪市や京都市の水道技師を歴任、「水工学」などの著書がある水道工学の権威であった。

その年12月8日、わが国は真珠湾攻撃に始まる長く辛い太平洋戦争へ突入した。

1942年当時の各科主任（科長の呼称を廃止）は以下のとおりである。

- 土木工学科 教授 永井 時一
- 電気工学科 教授 京藤 睦重
- 機械工学科 教授 島崎 潔
- 基礎学科 教授 広瀬 光家

第2章 前身各校

表2-17 化学機械科

学 科 目	第1学年每週授業時数			第2学年每週授業時数			第3学年每週授業時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修 身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体 操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
外 国 語	4	4	4	3	3	3	3	3	3
数 学	6	6	5	3	3				
物理学及実験	4	4	4						
無機化学	2	2	2						
有機化学	2	2	2						
物理化学				2	2	2			
製造化学				3	3	3	2	2	2
応用力学		1	2	2	2	2			
機械設計法	2	2	2						
機械工作法	3	3	3						
工業材料				2	2	2			
工業熱学				2	2	2			
粉碎及濾過器					1	1			
蒸発及蒸留器				2	2	2			
乾燥及調湿器					1	1			
吸収及吸着器					1	1			
流体力学及輸送機							4	3	2
圧縮機械							2	2	2
蒸気罐及原動機				2	2	2	3	3	3
電気工学及実験							3	3	5
工場建築								2	1
工場管理法及工場管理法							2	2	2
特別講義							3	2	3
設計製図	7	6	6	5	5	7	7	7	
化学分析実験	6	6	6	2	2				
実験及実習				6	5	7	7	7	13
合 計	39	39	39	39	39	39	39	39	39

表2-18 電気工学科

学 科 目	第1学年每週授業時数			第2学年每週授業時数			第3学年每週授業時数		
	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期	第1学期	第2学期	第3学期
修 身	1	1	1	1	1	1	1	1	1
体 操	2	2	2	2	2	2	2	2	2
外 国 語	4	4	4	3	3	3	3	3	3
数 学	6	6	5	3	3	1	1	1	
物理学及実験	4	4, 実3	4						
応用力学		1	2	2	2	2			
機素設計法	2	2	2						
工 作 法	2	2	2						
電気材料				2	2	2			
電気及磁気学	3	2	2						
交流理論				3	2	3			
電気磁気測定法				2	2	3			
電気機器				2	4	4	4	3	2
原 動 機				2	2	2	2	2	2
発電所及変電所							2	2	2
送電・配電及高電圧工学							3	2	2
電灯及屋内配電			2	3					
電熱工学					2	2			
電気運輸							2	2	2
高周波工学及電気通信							3	3	3
電 氣 化 学							2	2	2
土 木 工 学				2	2	2			
特別講義									2
電 氣 法 規							1	1	1
工場建築								2	1
工場管理法及工場管理法							2	2	2
設計製図	8	6	6	6	6	6	5	5	6
実験及実習	7	6	7	6	6	6	6	6	6

応用化学科 教授 上田 嘉助

庶務課 教授 大土井 源

化学機械科 教授 長谷川猛虎

1943年10月に至り、森校長が室蘭工業専門学校長に転任となり金沢を去った。森校長は1941年3月の着任であるから太平洋戦争真っ只中で、学校運営に最も苦心した時期であった。

森校長に替わって横浜工専教授正四位勲五等、横山盛彰が着任した。横山校長は京都帝国大学化学科出身で、後に初代金沢大学工学部長になる。

(6) 金沢工業専門学校に改称し拡充

1944(昭和19)年4月、金沢高等工業学校は、その名称を金沢工業専門学校に改称された。これは戦時非常措置方針に基づく理工系専門学校の拡充に伴うものであった。

この年、学生定員40名の第二機械科を、また翌45年には第二土木・電気通信の2科を増設して合計8学科とし、既設の学科も学生定員を増加して新入生は640名を数えるに至った。1944・45両年の入学者数を表2-19に示す。

表2-19 1944(昭和19)年・同45年の入学者

	志願者	入学者	土木	機械	応化	化機	電気	第二 機械	第二 土木	電通
1944年	3,067	467	80	119	79	74	75	40		
45	1,801	640	95	135	95	95	85	45	45	45

なお1943年からは入学試験の問題は文部省で統一して作成された。また試験場も大阪・東京でも分散して行われた。

また同43年からは機械工学科と応用化学科に修業年限3カ年の工業教員養成所が付設された。1学年機械35名・応化40名の定員で工業学校教員の養成を図った。

一方戦時体制による技術者の需要急騰で、1941年には12月に、42年以降は9月に繰り上げて卒業式が行われた。戦争末期の1945年には、1年生は文部省指定の軍需工場に動員され、入学式も工場で行われた。

(7) 戦後の混乱

日中戦争以来8年間続いた戦争は、1945(昭和20)年に入ってますます熾烈さを増した。国では1,500億円の巨費が投じられ、200万人の命が奪われた。本校でも焼夷弾の落下の際に延焼を防ぐため、校舎の渡り廊下は窓や腰板がすべて取り払われた。製図室・大教室・講堂などには陸軍航空廠・陸軍第7研究所・理化学研究所・住友通信工業の技術研究所が疎開しており、機械類が搬入されて、一部兵器の生産も行われていた。学校の周りには多くの防空壕が掘られたが、その資材として校門前の名物トガの並木が悉く伐採され

第2章 前身各校

て当てられた。全国で140万人の学生が学徒動員され各地で軍需産業に従事した。金沢工専でも例外ではなく、多くの学生が全国各地に散っていた。

1945年8月15日の終戦で一時は茫然自失の状態であったが、やがて長い悪夢から覚めて授業も再開された。しかし、食料難は深刻さを極め、全国の学生の半数は栄養失調を来していることが判明した。文部省はこの苦境を脱するため自宅通学を本位とする学生の配置を認める方針を打ち出したので、本校でも10月9日現在で87名の転学申し出があった。

物資欠乏・物価高は学生の生活をおびやかし、家庭教師・筆耕・新聞配達などアルバイトで生活費を捻出していた。さらに冬の訪れとともに燃料不足がこれに加わり、学生の欠席率は常時2割を超えたため、金沢市内の大学や高専では冬休みの繰り上げ延長が行われた。

終戦前後の思い出話を、当時学生でその後母校で教鞭を執った3人に語ってもらった。



写真2 - 28 ストープを囲んで

その1 戦後の思い出 谷本 明(化機昭25)

「朕深く世界ノ大勢ト帝国ノ現状ト二鑑ミ…」の戦争終結の大詔をラジオ放送で拝したのは、現在の七塚町白尾海岸で真夏の砂浜に海水を播き濃鹹水を製造作業中の昼休みであった。この放送を聴いて、ただ茫然自失であったことが憶い出される。

昭和19年春以来の学徒動員で、現片山津ゴルフ場での海軍予科練や小松飛行場の整地作業、暮からの金沢市の旧大和紡績へ疎開していた陸軍の立川航空工廠での航空機用エンジン製造に従事させられ勉学はほとんど行なわれない状況下にあった。戦争中の食糧不足は終戦になったからと言え直ちに良くなるものではなく、また、戦後になっても寺町の奥にあった陸軍の兵舎の後片づけもあり急に勉学に戻っても身が入らない。昭和21年春より上級学校の入学試験が実施されたが、金沢には医科大学のみで高等学校へ進学しても都会へ出なければ大学へ進学は出来ず、家庭事情より全く不可能のことと、この時は四高受験が見事に不合格となり、翌22年に金沢工業専門学校に入学した。この方が実社会へ出て直ぐに役立つことが分かったためであった。また化学機械科を選択したのは、化学と機械のことを学ぶことが出来るという簡単な理由だけであった。

昭和21年春に文部省より学制改革案が発表され、昭和22年より6・3・3・4の学制が実施された。専門学校は昭和24年に大学へ昇格するか高等学校になるかが決まることになっていた。ところで金沢大学は、明治44年ごろから北陸帝国大学の設置運動がなされ、帝国議会で一時は建議案が可決されたが、政変その他で実現をみず、戦後になってGHQ民間情報局の国立大学は一府県一大学の新制大学設置方針により昭和23年3月より、医・理・薬・工・法文・教育の6学部編成で創立事務が推進されることになった。大学名称は原則として都道府県名を用いることになっていたが、文部省の要望により金沢大学の名称となった。

昭和22年に入学した化学機械科は名前の通り機械の授業が強く、それに化学の基礎的学問を学んだが、基礎が不足していたため最終結果のみを使用できるハンドブック工学の技術のみを理解するにとどまった。昭和24年には労働運動が盛んになり、就職は困難を極めた。



写真 2 - 29 工作実習風景

その2 金沢大学と私 山本善一（工化昭23）

昭和23年金沢工専を卒業後すぐ学校に残り、停年退官するまで通算48年も母校にお世話になった。この機会に終戦から大学創立前後の学内の様子を振り返ってみたい。

昭和20年8月に終戦を迎え、茫然自失している暇もなく、9月から復学したが正常な講義が続けられるような状態ではなかった。学生の生活費が月300円程度のとき白米一升30円のヤミ価格が横行する程食糧事情が悪かったので臨時休講が頻発した。苦しい中でも学生の意気は高く、ラグビー、バスケット、野球、相撲などのスポーツに青春のエネルギーを発散していた。昭和22年10月、金沢市で開催の第2回国民体育大会にご臨席になった天皇陛下（昭和天皇）は29日金沢工専に行幸になり、横山盛彰校長以下教職員と学生一同が校門前で奉迎した。少しお疲れの様子に見える陛下の歩みとは対照的に、校門周辺で警備していた進駐軍のMP（憲兵）の精悍な表情を忘れることはできない。

金沢工専の大学昇格への熱意は昭和22年ごろから具体化し、6月にその準備委員会が開かれた。昭和23年の医・薬・工・理・法文・教育の6学部からなる北陸大学設立の構想を基礎に、昭和24年金沢工専を母体とする金沢大学工学部が誕生した。この時期、教職員は工学部の第1回生を受け入れる準備に忙しかった。一方、大学設置基準に照らして教官の審査が行われた結果、教官の人事異動も多く、学内の雰囲気は一変した。当時の事情を知る人は今では少ない。



写真2 - 30 天皇陛下の行幸

その3 工業専門学校時代の思い出 武部 幹（通信昭23）

昭和20年8月15日、工専1、2年生は各地の勤労働員先の軍需工場で終戦を迎えた。1ヶ月後に小立野の木造の校舎で授業が再開され、朝の登校時は狭い湯涌街道は学生で溢れた。戦時中の入学定員が多かったためである。衣食住の不足、ストライキの頻発、エネルギー不足で国鉄（現JR）の列車運行の削減等、社会は混乱に満ちていたが、学生にとっては、久しぶりで学びの生活に戻り、諸先生の講義を聞いているうちに、次第に眼前に深く広い学問の世界が広がって行くのを感じ、このうえなく嬉しく思ったものである。紙不足のため、新刊本が少なく、街の古本屋は学生で大賑わいであった。授業で配られるプリントも先輩のプリントの裏を利用したものだった。一方、戦時中、県下に疎開していた陸軍やNECの研究所より、当時の最高級測定器や研究用真空管が学校に寄贈され、学生実験で使うことが出来たのは、幸せであった。その中に金属円盤への録音機が含まれており、秋の復活最初の工専祭で訪れた市民に録音サービスをできたことは良かったと思う。工専祭では、京大の湯川博士の講演会も開かれ、ノーベル賞受賞者の声に直に接して、皆感激したものである。筆者の学んだ電気通信分野は、戦時の4年間に1/4世紀分の進歩を遂げたと言われるが、その成果として、ラジオ放送において、振幅放送に対し、音質の良いIFM放送、極超短波通信用のマグネトロン、速度変調管、進行波管等電子運動を巧みに制御した真空管、パルス通信や、レーダー等の話が講義でも聞かれ、その未来の発展に胸を躍らせたものである。原爆で終戦になったこともあり、原子力への関心は一般に高く、物理教室の寺田先生のそれに関する講義をお聞きしたことを覚えている。このように物質的には恵まれなかったが、多くのことを学び、充実した学生生活を送れたことを、いま振り返って当時の諸先生や社会や父母に感謝する気持ちで一杯である。



写真2 - 31 工専祭

【注記・参考文献】

第3節

- (1) 『加賀金沢の伝統の仕事』 広岡治樹：龍文社
- (2) 『金沢大学工学部五十年史』 1970年

4 石川師範学校・石川青年師範学校・ 金沢高等師範学校

(1) 石川師範学校

別伝習所と集成学校

これまで石川県師範学校の創設は、1874（明治7）年8月15日石川県集成学校の開校とされてきた。「校舎は金沢の小立野石引町の辰巳御殿（兼六園）成巽閣にあった石川県英学校の一角に置かれた。当初校長を置かず、5名の教員が教授法の実際と校務分掌に当たり、60名の生徒を指導した。」とされるのがその始まりである。

しかしながら、石川県教育会金沢支会編『金沢市教育史稿』（1919年）には第6章「中学校」の項目中に「第8節 別伝習所」を取り上げ、次のように述べる。

別伝習所は明治六年十二月金沢区内の各小学校より上級生中年齢十三歳以上の優等生を選抜し転校を命じたる者にして、漢文（教師豊島洞斎）、和文、理科、博物（高橋富兄）、習字（山納賢太郎）、数学（加藤和平）、体操（大野某）等の学科を研究せしめ、旧経武館を以て其校舎に充てたり、七年五月英学校創設の際生徒の一部は之に転じ、一部は仙石町旧明倫堂なる変則学校に移して閉鎖したり、蓋別伝習所創設の目的は、該校卒業生を以て小学校教師に充てんとせしもの如くなりしが、此時既に集成学校（後の師範学校）創設の計画成りしを以て、別伝習所を解散したるなり（石川県教育会金沢支会編纂『金沢市教育史稿』、1919年）

すなわち、1874年8月15日の石川県集成学校の開校に先立ち、1873年12月には「卒業生を以て小学校教師に充てる」目的で、「別伝習所」が開設されていたとみられる。残念ながら、現段階ではこの「別伝習所」に関する一次資料を見出すことができないが、この「別伝習所」を「集成学校」に先立つ石川県師範学校の前身として位置づけておきたい。

なお、付言すれば、文部省が最初の「師範学校」を東京に創設したのが1872年6月であり、ついで73年8月から全国七大学区に各1校の割合で官立師範学校を設置していった。

1873年8月には大坂（第三大学区）と宮城（第七大学区）、翌74年2月には愛知（第二大学区）、広島（第四大学区）、長崎（第五大学区）、新潟（第八大学区）に設置された。また74年3月には東京に女子師範学校も設置された。だが、これ以外に伝習学校等の授業方法の伝習を目的とする学校は、全国的動向としては既に73年より多くの府県で教員講習所・師範研習学校・師範講習学校等の名称のもとに設立されており（水原克敏『近代日本教員養成史研究』1990年）、「別伝習所」「集成学校」もそうした学校の1つであった。集成学校発足当初の状況は、前述の通りである。

明治初期石川県学事行政の特色と石川県師範学校

石川県が置かれた1871（明治4）年当時、県庁内では正義党と奸物党に分かれて対立していた。正義党は薩摩人県令内田政風に付いて、国家的な立場から金沢藩の威信を石川県に再興しようとするいわば新体制賛成派の人々であった。中心は杉村寛正、大塚志郎、岩田秀雄であり、彼らは1869年大阪に設けられた大阪兵学寮でフランス式の近代的な軍事教育を受けた人々であった。これに対して奸物党は、県令内田政風に反発し、旧藩からの伝統的な政治手法や人材・文化的な蓄積を活用しつつ、かつての隆盛を取り戻そうとする加賀藩ナショナリズム派のことであった。県令内田政風からは「国家を度外に置き、官金を貪り、賄賂を取り、是非を分け」ない保守派の連中とみなされていた。この奸物党が中心になっていた部局が「会計掛」「学校掛」であり、県令内田政風に言わせれば、この二つの係は「一変せずんば粹然せず」、つまり人事の刷新が必要という考えであった。学校掛の中心は加藤恒、稲垣義方の2名であった。加藤は号松塙、金沢藩の世臣で父加藤豊房は藩校明倫堂教授兼侍読であった。

周知の通り、加賀藩は藩祖前田利家以来積極的な文治政策を展開してきた。とりわけ5代藩主綱紀は豊かな財力を背景に学問を奨励し、文人を招聘したり、書籍を収集し、当時第一の碩学新井白石をして「（加賀は）天下の書府」と言わしめたほどであった。こうした教育的伝統は学制以前の公教育機関として異彩を放つ「卯辰山小学所」に引き継がれ、学制が発布される直前ではあったが、1872年6月、石川県は「石川県区学校規則」を発して独自の公立小学校設立計画を目指したことに表れている。これは金沢藩時代の「小学所」を発展させたものであったという。また幕末1854年には、軍制改革に端を発して加賀藩洋学校壮猶館が設立された。そこでは軍事と、それに関連して広く西洋の学問が取り入れられ、蘭・英・仏学研究や医学研究が進展した。

県令内田政風からみれば、保守的である奸物党の手になる発足当初の石川県学事行政が、このような加賀藩以来の教育的伝統を継承しようとする基本的な姿勢をとったことは、当然のことであった。石川県は1873年1月から学制実施の態勢に入り、同年中に193校の公立私立小学校を開設したが、同時に旧藩立学校の流れをくむ変則中学校、専門学校、医学学校、病院の経営維持にも熱意を注ぎ続けたのである。つまり、明治初期石川県の学事行政は文部省方針そのままではなく、旧加賀藩以来の伝統を受け継いで、これを生かしながら

第2章 前身各校

中等学校や小学校を設立しようとしていた。こうした石川県の学事行政が批判され、その方針が転換されたのは、1874年に行われた文部省八等出仕加納久宜による石川県学事視察がきっかけであった。(第1章2節(1)参照)

加納久宜にとって石川県の学事行政は、新しい国家建設に向けた維新教育の何たるかを全く理解していないかのように映った。例えば、師範学校でさえそうであった。

1874年、加納視察時の石川県師範学校は集成学校と称されており、校舎は仙石町の石川県変則中学校と校舎を交換して移転し、公立仙石小学校を附属小学校として開校、師範学校としての整備を行いつつあった。加納が「この校名をみて『こんな気兼ねそうな雅名を用いないで、何故適切に師範学校と名称せぬのであるか』と当局者に難詰された」(超斎閑人、『石川県師範学校同窓会誌』78号、『石川県教育史』第1巻)という。石川県は1874(明治7)年11月22日、校名を集成学校から石川県師範学校と急遽変更せざるを得なかった。集成学校から石川県師範学校への校名変更はこのような文脈の中で理解されるべきである。師範学校校名がかくの如しであったから、金沢市内の小学校も当初は、清貞、徳香、淳正、静化、廉化、観成、勤成、婉成、養成、進徳、精練などの雅風名が多く用いられていた。

このように学制以前から独自の学事行政を展開し、順調な近代教育を展開しつつあったかに見えた石川県の近代教育は、1874年の加納の批判によって根本からの見直しが迫られた。ことに「洋学・高尚学」を中心とする中等教育重視政策は厳しく批判された。これらの批判は、「一変せずんば粹然せず」と、保守派の牙城となっていた学校掛の人事刷新の機会をうかがっていた県令にとっては、千載一遇のチャンスであったろうと思われる。石川県学務課員の入れ替えは逐次進められていった。75年6月、稲垣義方(後1889年、初代金沢市長となる)は租税課に転じ、加藤恒は9月に「六弊疑問」の連署者であった吉田温一郎とともに依願免職となった。加藤と入れ替わって学務課員となったのは、東京師範学校出身百束誠助であった(神辺靖光「明治初期石川県の学校設置問題 「興学六弊」とその「疑問」をめぐる」、全国地方教育史学会『地方教育史研究』第2号、1987年)。以後石川県の学校設置方針は小学校の設置に全力が投ぜられるようになった。結果的に石川県の学事行政は、1882年の文部省少輔九鬼隆一の報告(『文部省第十年報』47~48丁)に見られるように、「初等学校の普及、殊に女子の教育にすぐれ、金沢医学館を除いた中等学校、即ち師範学校や変則中学校にはみるべきものがない」と評価される、初等学校中心方針に重点が移されていったとみることができる。

石川県師範学校の整備

すでに述べたように1874年8月、兼六園内石川県英学校内に集成学校として開校していた師範学校は、74年10月の加納の指摘を受けて翌11月、石川県師範学校に改称、修業年限1年の小学師範学科と3カ月の下等小学師範学科を置いた。さらに翌75年5月には下等小学師範学科を内容とした石川県女子師範学校を誕生させ、また7月には附属小学校を

置いて師範学校としての教育体制の整備充実にあたった。また、同年8月には輪島と大聖寺に分校を設置し、それぞれ生徒40名を募集し、職員は本校から代わる代わる派遣して、指導に当たさせた。同月小学教則、師範学校教則が編成され、また東京師範学校卒業生3名が訓導として着任し、10月には空席であった石川県師範学校長に初代校長野村彦四郎(1848～95年)が着任し、石川県師範学校の教育体制が整備された。野村は後に、羽咋郡長を経て京都府学務課長、文部省体操伝習所主管、第一高等中学校校長、第五高等中学校校長となった人物である。

1876年10月には、広坂通りの北側(県庁西隣)の地に、男女師範学校および男児附属学校を新築し、また男子生徒の寄宿舎および明倫堂を移築する工事に着手し、翌77年2月完成した。工費は7,000円あまり、校舎は廊下が中央にあり、教室はその両側に位置していたため、校内は暗く、天井が低い建物であったが、ともかく県下においては各教室を正しく区画した初の校舎であり、生徒は新しく立派な学校だと大いに喜んだという。当時男子は向かって右、女子は向かって左で、互いに接しながらもそれぞれ表門を持っていた。男子校の斜め後ろに附属小学校、その後ろに寄宿舎があり、いずれも渡り廊下でつながれていた。また寄宿舎西隣の明倫堂は男子校に付属し、1878年明治天皇来校の時、便殿に充てられたが、後に県会議事堂になった(『石川県師範教育史』)。

1877年2月には敦賀県および越前7郡が石川県に合併されたのを機に、大野(福井県)武生(福井県)および大聖寺(石川県)、輪島(石川県)の支校を廃止し、金沢に石川県第一師範学校、富山に石川県第二師範学校、福井に石川県第三師範学校が置かれた。しかしながら、1881年には福井に、83年には富山にそれぞれ男女各師範学校が置かれ、石川県第一師範学校は「石川県金沢小学師範学校」と再改称された。また80年8月には輪島に輪島小学師範学校が設立されたが、83年には存続の可能性が少ないとされて「石川県金沢小学師範学校」に吸収され、また女子師範学校もあわせて「石川県師範学校」と改称された。1886年からは「石川県尋常師範学校」と改称されたが、98年には再び「石川県師範学校」と改称されるなど、その時々々の県域や地域情勢の中でめまぐるしい変更を遂げてきた。

さらに第四高等中学校の開校に伴い、1889年11月には金沢市広坂通り88番地に新築移転、さらに1914年4月には男女師範学校の分離に伴い、男子師範学校は石川郡野村(後に野町、現在金沢市弥生)の新校舎へ移転した。なおこの野村校舎は1949年に金沢大学教育学部が金沢城内に設立された後、金沢市に移管されて金沢市立泉中学校となり、また隣接の男子師範学校附属小学校は金沢市立野町小学校弥生分校から弥生小学校となって使用された。これらの校舎図の多くは、『石川県師範教育史』などに収録されてきているが、今回は従来明らかでなかった1877年2月に金沢市広坂通り6番地に新築移転した時の校舎見取図を掲載しておきたい。これは1878年に天皇が石川県師範学校を訪れた際の公式報告書『御巡幸石川県公報』(石川県立図書館蔵)に天皇の視察経路図として残されているものである(図2-10・図2-11)。「加能地誌」所載の概観図(図2-12)と合わせるとその概要がほぼ把握できる。

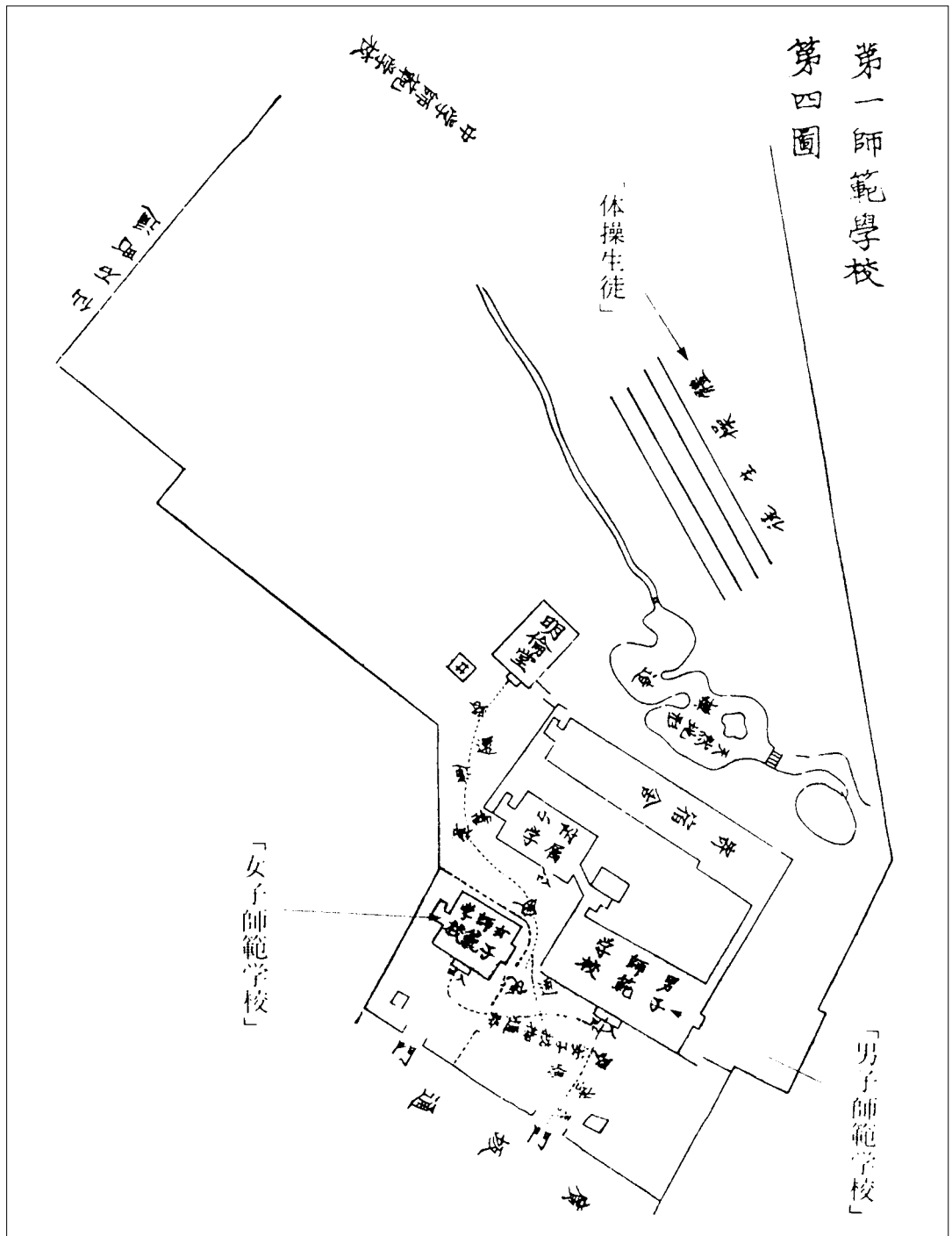


图 2 - 1 0 石川師範學校 (1877年新築) 配置圖

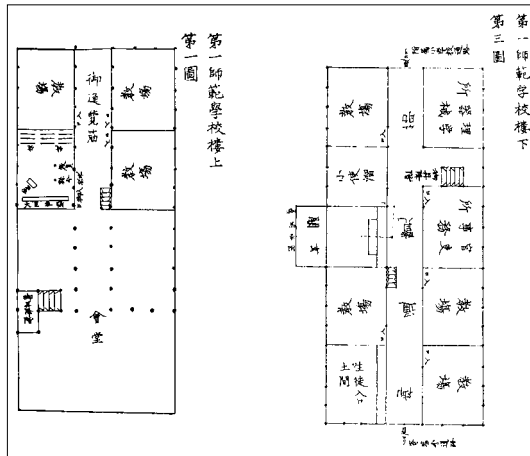


図 2 - 1 1 石川師範学校（1877年新築）
校舎見取図

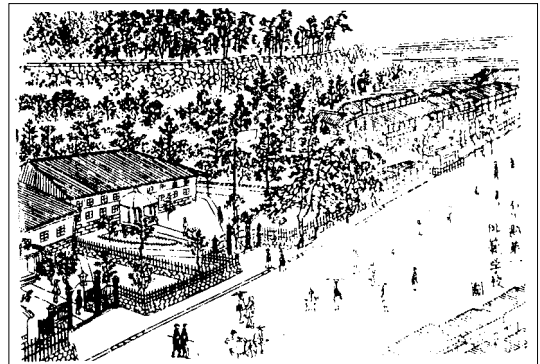


図 2 - 1 2 石川師範学校（1877年新築）概観

石川県師範学校の落成式

次に、大正期の石川師範学校の様子を見ておきたい。石川師範学校に期待された役割について、1914（大正3）年4月、男女師範学校の分離に伴い、男子師範学校が石川郡野村（後に野町、現在金沢市弥生町）に移転した際の、石川県師範学校落成式（1915年7月2日）に寄せた一木文部大臣の祝辞（武部督学官代読）は、次のように述べる。

石川県師範学校新築其の工を竣へ本日をして落成の式を挙ぐ。本大臣深く之を喜ぶ。今や我国義務教育の施設は各地に遍く其の内容亦年を逐ふて進む。是れ素より市町村の努力と国民の教育に対する熱誠とに因るは言を俟たずと雖も抑も亦各府県が斯の教育の源泉たる小学校教員の養成上鋭意計画せる結果に職由せずんばならず。而して本県小学校教員養成の機関として従来一校の師範学校を置くに過ぎざりしが、時勢の進歩に伴ひ、客年女子師範学校を設置せられ、今亦茲に本校の新築落成を見るに至れり。本大臣は本県当局者の教育に対する計画宜しきを得たるを喜ぶと共に、本県民が師範教育を重んじて克く其の計画を翼賛したるを多とす。自今両校互に切磋攻究益々其内容の改善を図るに努めば、本県教育の効果完からん、期して待つべきなり。

惟ふに、人の師表たるべき責務の重且大なるは敢て嗽々を要せず。而して他日国民教育の重任を荷なふべき教育者の養成を以て其の任とする師範学校の責務は更に一層の難きものなくんばならず。而も本校舎の成るや偶々欧州列強の戦乱に際し、我國民教育上一層の努力と刷新とを要する最も切なるの時に会す。国運の将来に鑑み、世界の大勢に徴し、今日以後本校の考究施設すべきもの洵に少なしとせず。本大臣は、本校の校長教員諸君能く此の設備の完成を利用し、協心戮力以て生徒の徳性を涵養し良教員の養成上遺算なからんことを期し、また本校の生徒諸子常に能く師長の教訓に従ひ、他日人の師たるべき本分を自覚し、奮励努力以て本校の期待に副はんことを望むや切なり。（『石川教育』138号、1915年8月）

すなわち、「欧州列強の戦乱に際し、国運の将来に鑑み、世界の大勢に徴し、国民教育の重任を荷なふべき教育者の養成を以て其の任とする」国家主義教育を担う指導者の育成がいやが上にも強調されたのであった。

では、こうした期待を担った大正期の師範学校の生活は如何なるものであったろう。師範学校生徒は多くが寄宿舍生活であった。

今一日の生活を絵巻式にくりひろげてみよう。起床は五時半である。小使が廊下伝いに時鈴を鳴らして廻る。それを合図に一齐に跳ね起きる。それでもまだ太平楽に寝そべっている奴は、隣の者が容赦なく叩き起こす。

毎日室員から当番が一人割り当てられて、全員起床三十分前に起きて、室内や廊下の掃除をする。当番は一日中だからその外にもいろいろな雑用も勤めねばならぬ。起きると直ちに、寝具の始末をして、それから便所、洗顔、整容の段取りとなる。六時になると朝礼の点呼となる。その間三十分だからなかなか呑気に構えてはいられぬ。

朝礼点呼が終わると、直ちに食堂へ繰りこむ。昼晩は自由だが、朝だけは全員集合を待って、舎監と共に会食する。食堂には生徒から選ばれた三人の炊事係がいて、食堂内では、一切のこの炊事係の指揮に従うのである。炊事係は、賄方を監理して、毎日の献立や食品購入などについて案をたてて、舎監にいちいち報告の上その指令を仰ぐもので、面倒でうるさい仕事である。

飯櫃は「めんこ」といって、一人一個の小型櫃である。汁は六人に一個の桶で配給される。皿物は別であるが、飯碗と汁碗に箸箱は各自負担で、食事がすむと、自分で洗って、食堂前の指定された棚に並べて置くことになっている。汁は何杯でもお代わりができるし、桶がからっぽになれば、炊事場へ補給にも行ける。

朝食が済むと、始業の七時までは、自由の時間であるが、大概はその日の課業準備に費やされる。毎日の授業は午前七時から午後三時まで、五十分授業で、午前五時限、午後二時限の七時限で、土曜日は午前で終わる。

授業が終わって夕食の五時半までは、自由時間で、門限までは外出を許される。門限は午後五時で、外出の場合は必ず入り口にかけてある門鑑を門衛に出して行かねばならない。時間が経過すると、残った門鑑は、そのまま舎監室へ廻されてしまう。遅れた者は、特別な証明がない限りは、舎監から糾問されるわけである。

しかし外出については弾力性がないわけではない。事情を具して申し出れば、八時か九時頃までは、特別に外出が許されるし、土曜から日曜にかけて外泊もできる。外出の要のないものは、運動、読書に耽ろうが、入浴、洗濯をしようが、自分の思うままの行動の執れる一番くつろいだ、のんびりとして過ごせる時間である。

風呂はたいいて隔日に開かれる。これはいつでも自由にはいれるというわけにはいか

ない。四年、三年、二年、一年といった順位で、一年生などは、夕食後でないと、減多には入れない。しかも上級生がいた場合には、湯を汲んでやらねばならない。これが不文律の階級制度の現れなのである。

この時間には、間食がよくはやって、食堂の片隅には、うどん屋が店を開く。小使室には、菓子屋がやってくるし散髪のおっさんまでがこっそり菓子を買っている。

夕食は時間にさえなれば、各自自由に食べる。外出して食事をとらぬ者や、外泊した者は欠食簿に記入する。記入外の者で残った分は、所謂健啖組の連中がいて、きれいに平らげてくれるから減多に残飯は出ない。

夕食後から自修時間までの間も、自由で、この時は室員も皆そろっているから、歓談放語やいろいろな遊びに打ち興ずる。他の室へ油を売りに行くものもある。掛け取りに追い廻されるのもたいていこの時間であるらしい。食費を集めたり、いろいろな触れが廻るのもこの時間である。

午後七時から九時までは、自修時間であるが、土曜日の晩だけは、この時間が省かれる。自修時間は課業の予習や復習に当てられるもので、共同生活をやっているおかげで、互いに励みも出るし、わからぬ事は互いに聞き合わず便もあるわけだから、下宿よりずっと能率も上がる筈であるが、どういうものが一般にこの時間を敬遠する。試験勉強以外には、実を入れてやらない。ぼかんと坐っているものやしゃぐものはいないが、小説を読んだり、無駄話をしていたり、舟を漕いだりしている者の方が多い。日中随時巡視で舎生の虚を衝くこともあるが、自修時間中には、たいてい一度舎監の巡視がある。こっそり猫足を使って廻るから、ちょっと気がつかない。居眠りをしていたり、談笑でもしていたりすると、注意を受ける。煙草などをふかしていたら、現物を押収された上に、舎監室に引っ張られて、うんと油を絞られる。だからこの時間はもっとも警戒すべき時間である。

自修時間が終わると誰でもほっとする。急に舎内がざわめき出す。こうして九時十分になると各室前に並んで終礼点呼を受ける。朝礼と同じように第一室から順に、舎監が週番随行で、提灯を持って巡視するのである。ところが、消灯になって床の中にもぐり込んでいてもなかなか眠らない。お互いに無駄話をやっている。上級生になると、他の室まで乗り込んでいって、一時間もしゃべっているものがある。祝日とかその他特別行事のあった場合には門限が午後八時乃至九時半まで延長される。その日は勿論自修時間はないから、外出しないでものんびりと過ごせる。

寄宿舍には舎監から指定された出入商人があって、毎日のように、舎内で店を開いたり、出入りしたりして、生徒の需要を満たしていた。先ず舎内では学用品類の出張販売をやっているのに、立野商店がある。浴室の隣に売店を設けて、毎日主人が直接経営に当たっている。この店は相当古くから店を出しているもので、舎監には極めて信頼されているということである。品は市価に比べては、幾分安いし、品質も吟味し、その上学用品ばかりでなく、運動用具、運動服、洋服類、日用雑貨品まで、殆ど日常生徒の必要

なものは大概そろえてあるので、何かと便利で、よく繁盛したものである。主人は十年一日の如く、根気よく出張している。何しろ主人は長い間の経験で、全舎生の顔も名前も覚えて居り、新入生でも大てい一月も経ぬうちに覚えてしまうということである。

次に菓子屋であるが、越田という老舗で、舎内では独占的な動かぬ地位を持っているが、別に売店を持っていなかった。喰い気盛りの舎生を相手にして、個人ばかりでなく、学校寄宿舎、各室などの団体などの団体の大量注文をも一手に引き受け、毎日午後になると、何回でも配達にやってくる。店では、師範生のために特別に会合のための部屋も設け、上級生などはよくそこで懇親などをやったものである。

出入り商人ではないが、豎町の塩瀬という菓子屋、石川屋、森八などへは、外出の際よく出入りしたものである。

舎の食堂で店を出すうどん屋があった。六斗林のうどん屋で、唯うどんだけを商い、極めて無愛想なものであったが、かけ二はいで五銭という安いものであったから、すき腹を満たすには、おあつらえ向きなので、放課後になるとどンドン押しかけたものであった。このうどん屋は夏になると、サイダーやラムネを販売し、生徒の注文によっては、卵などもよく世話してくれた。試験期になると毎朝生卵が大繁盛であった。

立野の売店の後側で、まるで土蔵のような陰気な室に店を出しているのが散髪屋であった。五十を越したいが栗頭の人相のよくない親爺であった。技術は下手だが、丸刈客ばかりであるから、無難に通していた。料金は舎監との協定で市中の半額位で刈ってくれる。とても扱いが荒っぽくて、手が早い。安いだけに、数で補うという寸法らしい。刈るのと剃るだけで、洗髪も化粧もマッサージもやらない。店内には縁の剥げた小型の鏡にバリカンと剃刀、それに石けん、刷毛だけの頗る殺風景な環境や道具立てである。椅子も籐張りの寄りかかり椅子である。ところがこの親爺のサービスは、散髪よりも世間話の方にある。なかなか話し上手で相手次第に、いろいろの話題を持ちかけては、うまく生徒の歡心をかうことに専念する。外見は物騒な男だが、接してみると、なかなか愛想がよく、興の尽きない気さくな男であるから、生徒によく親しまれていた。時にはようかんや餅菓子などを仕入れてきてこっそり販売する。生徒の中には外出して散髪するものも若干あるが、大部分はこの親爺のバリカンに当たる。一日平均十人位の客があったろう。

これらの出入り商人は何分財布の軽い学生相手の商売であるから、薄利多売主義でやっている。しかも競争相手のいない気楽さがあった。その代わり、必ずしも現金払いとは限らない。一年生あたりはそうでもないが、上級生になると殆ど月払いで、一々帳付にする面倒があり、月末になると掛け取りに廻らねばならない。それもきちんと払えばよいが、中には来月払いと逃げたり、こっそりと曇かくれしたり、徹底したのになると半年も一年もためている奴もいるからやっかいであった。(『石川県師範教育史』)

一方、教師の側はどうであったか。石川師範学校の教師は高等教員免許状、または中等教員免許状所持者であって、「1、人物優秀・識見高邁、2、学力才幹を有し指導力大、3、研究心旺盛・教育精神熾烈、4、思想堅実・身体強健なるを要す」ことが採用時の基準であり、毎週の講義時間数は最高24時間、最低8時間、平均14.5時間を担当していた。また附属学校の教師は、「既に国民学校において数年教師としての経験を持ち、附属が必要とする教科研究にて優秀なる識見と技術を持ち、かつ附属学校教師として適当と認められる者」が採用されたが、その際には「採用せんとする学校長より現在勤務校の校長の承認を得たる上必要書類を調製して文部省に手続きすれば発令される」システムであった（『昭和二十一年石川師範学校調査報告』）。

こうした石川県師範学校教師のひとり、体操教師岡部時次郎は、1917年ごろ、東京で陸上競技の講習を受けて、初めて石川県に近代的な陸上競技を紹介した人であった。帰校後は荘重な語調と態度で「オン・ユア・マーク」（「位置について」）とか「円盤はこうして投げるんだよ。君やってみな〜」などと伝授したらしい。それまで長ズボンにゲートルという先生が、以来急に短いユニホームとパンツを自ら召されて、野村の運動場に近代的なスポーツ風景をもたらしたという。もっとも選手がこの恰好で放課後長距離練習に出ようとすると、校門脇の交番巡査がこの肢体露なユニホーム・パンツ姿を風紀紊乱ととがめ、いくら説明しても通過させてくれなかった。そこで当時最新の野口源三郎著の陸上競技書を持って行って、欧米スポーツ界の写真を資料に説得した結果、ようやく納得してもらったという。（『石川県師範教育史』）

当時は「堅忍持久」のマラソンが体育の代名詞として長く通用しており、師範学校を卒業して赴任すると、まず老校長は「君はマラソンをやれるか、マラソンをやれぬとだめだぞ。」と、眼鏡越しに聞いたものだという（『石川教育』260号、1927年）。このような風潮から石川県師範学校はマラソンや長距離走を頻繁に行っている。1920年夏休みには石川師範学校継走部は県下各都市訪問長距離走を行った。コースは大聖寺を振り出しに小松、金沢を経て羽咋から外浦の奥能登を輪島、飯田と走り、内浦を穴水、七尾に道をとって金沢に帰るといったコースであった。時あたかも競技熱勃興の気運に、この企画は大変な人気で、至るところ熱狂的な歓迎を受けたという（『石川県師範教育史』）。大正の終わりから昭和^{けた}一桁の時期は、石川師範学校にとってスポーツの開花時代であった。

だが、こうした大正デモクラシーの比較的自由的な空気は、アジア・太平洋戦争の勃発と深刻化に伴って次第にしぼんでいく。石川師範学校の教育目標は、「1937～1942年までは愛国の念に富む善良な教師の養成」、「1943年には至誠尽忠に燃え徳操識見高き国民の指導者の養成」、1944～45年は「右のほかに戦局の苛烈に伴い戦力増強に挺身すること」と変化していった。さらに戦争の苛烈化に伴い、45年以後は「勤労働員のため生徒は相次いで各工場に出動し学校も亦一部工場化し、以後1カ年半は殆ど正規の授業行はれず生徒の学力は著しく低下した」（『昭和二十一年石川師範学校調査報告』）と、報告されている。

そして1945（昭和20）年の降伏の結果、「降伏後は低迷を免れなかつた」が、「年頭の

第2章 前身各校

詔書を拝してから漸次常態に復し、学習意欲を取り戻し、特別の問題は起こらなかった」と報告されている（『昭和二十一年石川師範学校調査報告』）。このように敗戦直後の師範学校が天皇の年頭詔書（1946年）によって漸次常態に復し、学習意欲を取り戻していく実態と、後述する石川女子師範学校自主改革案『昭和二十一年三月 新教育方針』とを照らし合わせると、師範教育における天皇や教育勅語の存在がいかに絶対的なものであったかがうかがい知れよう。

石川師範学校は1949年4月に金沢大学に包括され、51年3月に閉校となるまで、77年間、初代校長野村彦四郎（1875年10月）から第20代校長徳光八郎（1950年10月～51年3月）まで、20代の校長のもと、約8,000人の卒業生を輩出した。先に述べたように、1943年に文部省直轄学校として「石川師範学校」とされたが、創設以来一貫して変わらなかったのは石川県内各地域の主として小学校教員を養成するという役割であった。

傷痍軍人教員石川養成所

1939（昭和14）年、政府は尋常小学校准教員養成所を、福島・埼玉・石川・愛知第一・和歌山・島根・和歌山・松江・大分の全国9つの師範学校に設置した。目的は「傷痍軍人にして教育者に適する素質と熱意とを有するものに対して必要なる教育を施し、小学校教員たらしめ以て傷痍軍人に新たなる報国の途を開くと共に其の貴重なる体験を通じて児童に国防に対する認識を深めしめ傷痍軍人に対する尊敬感謝の念を篤からしめんとす」のものであったが、拡大する戦争被害にともなう戦傷者の生活保障政策という性格を持っていたことは、主たる所管が軍事保護院業務局補導課（後に職業課）であったことからもうかがえよう。

教育機関は1カ年半、定員は各所40名であり、入所資格は、戦闘又は公務中の傷痍又は疾病者、高等小学校以上の学歴、品行方正・意志強固・思想穩健にして小学校教員に適するもの、などであった。また授業料は徴収せず、月額25円以内の学資が支給され、終了後は無試験検定により尋常小学校准教員の資格の資格が与えられた（「昭和十五年傷痍軍人小学校准教員養成所入所志願者要覧」）が、初任給は師範学校本科卒業生より10円程度減じた額であった。（軍事保護院業務局補導課長「各道府県学務部長宛傷痍軍人の尋常小学校准教員養成講習科修了者の就職に関する件、1940年6月18日」、石川師範学校・傷痍軍人尋常小学校准教員養成石川養成所『傷痍軍人尋准関係書類綴』）

石川県男子師範学校では1939（昭和14）年9月11日、「傷痍軍人尋常小学校准教員養成講習科」として開設した。長野・新潟・富山・石川・福井の北陸・信越5県の各県から推薦を受けた35名が受験し、29名が入学を許された。試験では、年齢・軍階級・傷病概要・最終学歴・試験成績（学力・身体・人物）が総合判定された。受験者の軍階級は下士官または兵で、最終学歴は高等小学校・中等学校・青年学校の卒業又は中退などであった。また傷病内容は貫通銃創・膝蓋骨骨折・上腕の切断などの戦傷や胸部疾患が多かった。そうした専門的な身体検査のために、当初は金沢陸軍病院から医官が派遣されていた（「金沢

医甲第三五五号」)が、1944年からは「傷痍軍人教員養成所入所志願者身体検査要項」が作成され、江沼郡篠原村傷痍軍人石川療養所から軍事保護院の医官が派遣されて検査に当たることになった(「昭和十八年度傷痍軍人国民学校初等科訓導養成石川養成所学規例規綴」)。また彼らは全員師範学校から500mほどの弥生町の木造2階建て市営住宅に入寮していたが、希望者の全国的な増加により、第2・3希望で東北・関東地方などからの入所生も増加し、1942年には、これ以上の増加に対しては教室、寮の新営が必要であるとの報告書が軍事保護院宛に提出されている(「庶第五二八号」、『傷痍軍人尋准関係書類綴』)。

彼らの修学態度はどのようなものであったか。1942年の入学生の「学習態度調」をみてみよう。

本年度入所生はきわめて従順且つ真剣なる態度を以て修学に努めつつある事は一般の認むる所にして殊に学習に不便なる民家中に寮舎を存するも、身を持すること謹厳各にその品位を保つ。猥りに外出無要の行動に出ること無く、常に学究的なり。而して健康に留意し体育に関心を持ち身体的故障なき限りは毎日朝礼前冷水或は乾布摩擦を行ひ、裸体体操を実施せり。なお進取敢為の精神に富む。 中略

然れども本人或は家庭に事故多く別紙学業成績表の示すが如く、その努力に比較し成績の揚らざるは遺憾とするところなり。

つまり、傷痍軍人教員石川養成所は1カ年半という短期間ということもあり、やはり戦傷者の生活保障政策から生み出された特殊なタイプの教員養成であったという性格を免れることはできなかったと思われる。

この制度は、1940年には文部省・厚生省所管から厚生省軍事保護院の所管に移り「傷病軍人尋常小学校教員養成所」と改称、次に41年には「傷病軍人国民学校初等科准訓導石川養成所」と改称し、さらに45年からは国民学校初等科訓導免許を授与する「傷病軍人国民学校初等科訓導養成所石川養成所」と改称された。この養成所は1947年まで存続した。(逸見勝亮『師範学校制度史研究』1991、『石川県教育史』第2巻1975、『石川県師範教育史』1953)

石川師範学校女子部

石川師範学校女子部は、1943(昭和18)年師範学校令改正により、それまでの石川県女子師範学校を石川師範学校に合併し、女子部としたものである。その名称や制度・校舎所在地などは、男子部以上の変遷を経ている。

1874年12月、石川県は小学校の女教員を養成するために生徒募集法を定め、翌75年1月に至り、師範学校の教場を区分して、女生徒22名を入学させて下等小学師範学科の課程を興した。これが石川県女子師範学校の始まりである。また同75年5月には幼児教育者の養成を目指して金沢市公立松原町女児小学校内の敷地に石川県女子師範学校を創立し、女

第2章 前身各校

教員2名を置き、生徒20名を入学せしめた。女子師範学校の創設は官立東京女子師範学校に次ぐもので、府県立としては全国最初であった。県域の変更により、1876年には一時石川県女子師範学校富山支校が置かれたが、1880年には旧に復され、「石川県金沢小学女子師範学校」と改称されている。また1883年には富山支校は応募生徒数の減少から輪島師範学校と共に吸収され、石川県師範学校に合併・改称されている。1908年には再び石川県師範学校から分離し、「石川県女子師範学校」と改称した。

女子師範学校の大きな役割の1つであった幼児教育者の養成のために、石川県尋常師範学校附属幼稚園が開設されたのは、1887年4月であった。

最初の校舎は1877（明治10）年2月金沢市広坂通り6番地に新設された男女師範学校校舎であり、さらに1889年11月に金沢市広坂通り88番地に新築移転した際も男女師範学校一緒の敷地であった。男女師範学校校舎が分離独立したのは1914年4月からのことである。石川県師範学校（男子のみ）が石川郡野村（後に野町、現在金沢市弥生）の新校舎へ移転したのを機に、石川県女子師範学校は金沢市広坂の敷地内に残り、さらに同地に石川県立第二高等女学校を併設して校長も兼任とした。以後石川県女子師範学校は第二高等女学校と姉妹校のように運営されていった。なお、この1914年の石川県師範学校（男子）の野村移転に伴い、15年からは附属小学校も野村（現在金沢市弥生町）と広坂とに二分されることとなった。「野村（町）の男子部」が豪放磊落な校風であったのに対し、「広坂の女子部」は緻密・温和な校風が特色であった。男子部・女子部、二つの師範学校、附属小学校が統合されたのは、1949年に金沢大学教育学部が金沢城内に設立され、附属学校の一文化が迫られたことがきっかけであった。

この間、石川師範学校女子部は創設以来、約2,000人の女子教員を輩出し、石川県内の女子教育に貢献した。

さて、この女子師範学校に入学してくる生徒たちはどんな生徒たちだったのだろうか。女子に限らないが、師範学校予科入学者の半数は県の推薦による。その他は下級学校の校長推薦、口答試問、筆答試験、身体検査の四つの総合判定によってなされている。卒業生は、卒業と同時に学業成績、個性観察事項、ならびに本人の希望などの参考資料を所在県庁に提出し、県知事が赴任校を指定するシステムであったから、少なくとも卒業さえすれば就職の心配は皆無であった。

今ここに1940年度の入学試験問題が残されているので、そのいくつかを見てみたい。次頁は筆記試験の問題の一部であり、他に、国語、地理、数学、博物、物理化学、家事、裁縫（理論）、図画、音楽が課されている（これらは省略する）。

師範学校は、早くから小学校で教えるあらゆる教科を網羅するために、科目数が極めて多く、入学試験もこれに対応して網羅的である。しかし内容はその分だけそう高度なものではないとみることができる。

「作文」	「肇国の精神」
「歴史」	「神武天皇のご事業を概説しその御所維新が明治維新に如何にあらはれたかを述べよ。」
	「鎌倉時代の新興仏教について述べよ。」
	「阿片戦争の顛末を問ふ。」
	「アメリカ合衆国独立の原因を記せ。」
	「左記につきて記せ。 三国干涉、耶蘇教、朱舜水」
「数学」	2次方程式と3次方程式、
	「円に内接する正四角形と正六角形の面積比」

次は口答試問である。

第一試問

親権者との続柄。(実父ならざる場合の状況は明にする)

原籍現住所調査の際に両者相違する場合は其の理由を明確にし将来家庭は何処に住むかの見当を聞く。

家庭の職業及び状況。(学資の出所、生計の資源、資産の状況)

戸籍面より見て死亡者多き時は其の疾病等、職業は具体的に。

教員志望の強否。(本校志望の動機、受験準備、受験度数)

本人の思想。(宗教、読み物等)

五十四条該当者には符号を付すこと。(父母に限り兄は採らず)

第二口答試問

あなたの名前は。

あなたの学校は何処ですか。

あなたの学校では去年から今年にかけてどんな勤労作業をしましたか。

あなたはどんな心得でその勤労作業をしましたか。

種々作業をしたようだが、その作業が嫌だと思ったことはなかったか。

辛いと思ったことはなかったか。

愉快だったか。

どの点が愉快だったか言ってごらん。

もしも生徒の中に皆と一緒に勤労作業をするよりも独りで勉強した方がいい。さうすれば成績が良くなると考へるものがあるとする。あなたはこれについてどう考へるか。良

くないと考へればその理由。

あなたは学校で種々の勤労作業をしている様だが、家ではどんなお手伝いをしているか。

(手伝いを数例問ひ手伝いかたを研究して観察する)

何のために手伝いしているのか。自発的か、規則的か。嘘じゃないか。

第三口答試問

興亜奉公日は何日ですか。

あなたはこの日をどんな心掛けで送ってきましたか。

今度の事変が始まってから足かけ四年になる。このように事変が長く続けば日本の経済力が勝つか、支那の経済力が勝つか、所謂経済戦が大事になってくる。あなた方生徒の立場としてこの経済戦にお役に立つにはどんな事をしたらいいですか。

あなたはどんな風に消費節約をしていますか。例を挙げて言いなさい。(例三つ)

買い溜めということを知っているだらうね。(知らねば指導)

買い溜めはいけないことと思ふか。

買い溜めは何故いけないか。

今度の事変はどんな目的でしているのか。あるいはどんな理想でしているか。

(答のできないものには新東亜の秩序建設と教えて)新東亜の秩序建設の事業は日本一国でするのか。

この資料は師範学校の内部資料であり、公開されることを想定していないために、プライバシーに絡むかなり赤裸々な内容を含んでいる。また戦争遂行中の政府の政策への理解や社会的な関心の持ち方および消費節約や買い溜めなどに関する個人的なモラルの在り方が試問されていると言えよう。重要視されたのはこうした口答試問による人物・思想評価であった。

さて、これまで明らかにされてこなかった石川女子師範学校の資料中、教育史資料として価値の高いものの1つに、「昭和二十一年三月 新教育方針」と呼ばれる戦後の改革案がある。これは物資の不足した当時の状況を物語るように、粗悪な藁半紙に手書きのガリ版刷りで印刷された12丁の冊子で、その内容は「1、目次、2、校訓、3、職員数調、4、校務分掌、5、学級数及生徒数調、6、生徒生活状況、7、新教育方針の運営、8、学科課程、9、自由研修、10、自治会、11、校友会組織表(附)校友会会則、12、寄宿寮ノ運営、13、職員一覧表」からなる。

まず、最初に1、「新教育方針」として、「教育原理トシテノ教育勅語ヲ恪遵シ、^{かくじゅん} 国体護持ノモト年頭ノ御詔書ニ基キ、新ニ敬愛信ノ校訓ヲ定メ、民主主義思想ニ拠ル自由ト自治ヲ推進シ、個性ノ完成ヲ期シ、教育者特ニ女子教育者トシテノ教養品位ノ向上ニ努ム。」を示している。さらに第2に、校訓として、「敬。敬八人格向上ノ根本ナリ、謙虚敬虔以テ皇室ヲ尊崇シ、上長ヲ敬慕シ、真理ト道義トニ生キン。愛。愛八文化教養ノ地盤ナリ。至

誠醇情以テ利己心ヲ一擲シ、人類愛ニ拡充シ親睦ト平和トニ生キン。 信。信ハ公民生活ノ紐帯ナリ。誠実寛容以テ責任ヲ自覚シ、結束ヲ強固ニシ、信賴ト感謝トニ生キン。」を掲げている。こうした「新教育方針の運営」としては、1、軍国主義並ニ極端ナル国家主義ノ打破、2、画一主義ノ打破、3、国体ニ即シタル民意暢達ノ思想涵養、4、個性ノ完成ト国家社会ヘノ奉仕、5、教育ヲ学校外ニ及ホスコト、6、科学教育ノ振興、7、勤労教育、8、体育振興、を示した。例えば「1、軍国主義並ニ極端ナル国家主義ノ打破」の内容はさらに次のように具体化されている。

一、軍国主義並ニ極端ナル国家主義ノ打破

文化的平和的ナル新校訓ヲ制定シ、新日本建設ニ強力ニ発足ス。

1. 教科科目ノ教授ニ於テハ教練武道ヲ廃止シ、修身公民、日本歴史地理ノ授業ヲ停止スルト共ニ、各教科科目ヲ通ジ文部省教科書修正基準並ニ諸指令ニ基キ教材ノ削除修正ヲ実施シ、如上ノ主義傾向ノ払拭ニ努ム。予科ニオケル外国語時数ヲ増加、之ヲ強化ヲ図ル。
2. 備品図書等整理
軍事智識ノ涵養ニ資スルモノ、軍国主義的侵略ヲ正当化スル如キ図書、国防上ノ備品等廃棄シ、校舎内外ノ好マシカラサル施設掲示ヲ撤去スルト共ニ、新ニ平和的ナル学習環境ノ整備ニ努力シツツアリ。
3. 時局室、時局教育ノ廃止。
4. 神道の行事ノ全面的廃止。
5. 朝礼、定期的儀礼的ナル職員朝礼、全校朝礼、学級朝礼ハ之ヲ廃シ、隨時必要ニ応シ訓話示達等ノ為、召集スル事トス。
6. 服装ハ省令ニ準拠スルヲ本体トスルモ需給関係ニ於テ入手困難ナル者ニ対シテハ生徒ノ分ニ悖ラサル程度ニ於テ之ヲ認ム。
7. 敬礼。 集団ニテ敬礼ヲ為ス場合ト雖モ、原則トシテ号令ニ依ラスシテ之ヲ行ハシメ、而モ礼ヲ失シ、マタ甚シク不揃ヒナラサル様訓練ス。

さらに「3. 国体ニ即シタル民意暢達ノ思想涵養」の項目では、「生徒自治会」を新設したり、「学級会ナドノ集会開催ノ許可基準ノ簡素化」などを挙げるが、しかしながらそれは「教育勅語、終戦ニ賜リタル勅語、一月一日ノ詔書ニ則リ国体ノ護持ニツキ各教科ニ於テ滲透ヲ期ス」と「教育勅語」の遵守や「国体ノ護持」を前提としたものであった。

このように石川女子師範学校の戦後改革案は、教育の科学化や経験主義、実証主義、生徒中心主義の方向性を打ち出したのではあるが、教育における天皇制を超える思想を打ち出すことはできなかった。だが、それは石川女子師範学校だけではなく、全国各地の戦後

第2章 前身各校

改革案にほぼ共通する当時の時代状況そのものの限界であった。1945（昭和20）年9月15日に文部省から示された「新日本建設の教育方針」では「国体護持」が強調され、「新教育方針中央講習会」では、前田多門文部大臣が「教育勅語を教育の教育実践の基本とすることを要請」していたのであり、石川女子師範学校もそうした方針の範囲にあったのである。敗戦直後の日本教育界は思想的な虚脱・混乱状態にあり、「皇国の道」「臣民教育」に代わる新たな教育理念として、「民主教育」を標榜した教育基本法が施行されるまでは、「教育勅語」の遵守や「国体の護持」は生き続けたのであった。教育勅語の運命が決したのは1947年3月31日、法律第25号として教育基本法が成立・即日施行され、ついで48年6月19日、衆議院において「教育勅語等の排除に関する決議」が、参議院においても「教育勅語等の失効確認に関する決議」がそれぞれ行われたことによる。

（2）石川青年師範学校

明治政府は富国強兵政策の一環として尋常小学校卒業後から徴兵前の勤労青年教育を重視せざるを得なかった。明治期後半から全国に実業補習学校が作られ、また1926（大正15）年からは青年訓練所が設けられた。この2つの勤労青年教育機関は1935（昭和10）年から「青年学校」として統合され、39年からは男子のみ義務制となった。このため公立以外に工場や事業所に多数の私立青年学校が設けられた。青年師範学校はこうした勤労青年教育に当たる教師養成機関であった。

石川県は1918年にこうした勤労青年教育に当たる教員養成に着手した。1918年4月「石川県立農業教員養成所」を石川郡松任町の石川県立農学校に付設し、4月13日開校式を行った。第1回入学者は28名であった。勤労青年の多くが農業従事者であったため、農業を中心とする実業教育を担当する教員養成が構想されたことは当然のことであった。

この学校はその後1921年4月からは「石川県立実業補習学校教員養成所」と改称され、さらに35年からは勤労青年の訓練や教育に当たる青年学校の教員養成機関として「石川県立青年学校教員養成所」と改称された。

1943年3月8日、師範教育令（勅令第109号）は「青年師範学校」を修業年限3年の青年学校の教員養成機関と規定し、文部省直轄の官立学校となった。こうして1944年4月1日、「石川青年師範学校（男子部・女子部）」は石川県立女子青年学校教員養成所のあった河北郡津幡町加賀爪の津幡農学校に併設された校舎に移転し、開校した。職員は校長五坪茂雄ほか、教授9名、助教授2名、判任助教授12名、事務官4名であった。入学者数は昭和10年代を通じて男女とも6～28人、平均15人前後であったが、石川青年師範学校発足に伴い、生徒定員は男子部120人（3学年）・女子部80人（1946年から120人）に増加している。在籍者数は男子部が90～126人と定員をほぼ充足していたのに対し、女子部は53～71人と定員の6～7割の充足率であった。生徒は下級学校校長の「推薦調査書、口答試問、筆答試問、及び身体検査」の結果を総合して入学を許された。ちなみに1944

年の入学試験問題を見てみよう。

男子部数学

矩形ノ一辺ヲ測定セルニ155cmヲ得タリ、此ノ矩形ノ面積ヲ求ム、但シ測定ニ0.1mmノ誤差ヲ含ムモノトス。

1億人1人ガ毎日米3粒宛節約スルトセバ、1ケ年間=如何ホド節約スルコトニナルカ。但シ米1升ノ粒数ハ67000トス。(3問目省略)

国語

上代国文学ノ中デ第一級二位スヘキ古典三ツヲ挙ゲ夫等ニツキ知ル所ヲ記セ。

平易ナル口語文ニ解釈セヨ。 略

和文ニ書改メヨ。志士仁人、無求生以害仁、有殺身成仁。

漢文ニ書改メヨ。

ヤスクニジンジャ トウジ アンキョハイスイ スゲガサ タンボ

農業科

作物(農学校出身者に対する分)

石川県下ノ水稻奨励種ヲ述ヘヨ。

中耕除草ノ目的ヲ問フ。

(中学校出身者ニ対スル分)

選種ニツイテ述ヘヨ。

石川県ニオケル食糧作物ニツイテ知レル所ヲ記セ。

園芸

(農学校出身者に対する分)

果樹栽培ニ実生ノ行ハレサル理由ト其ノ特ニ行ハルル場合ヲ述ベヨ。

茄子ノ作物ノ青枯レ病ニツイテ知ル所ヲ述ベヨ。

結球白菜ノ間引ニツキ注意スヘキ点ヲ記セ。

(中学校出身者に対する分)

接木ノ種類ヲ挙ゲソノ行フ季節ヲ記セ。

大根ヲ季節ニヨッテ分類シ、其ノ各々ノ品種ヲ挙ゲヨ。

(林業)以下省略

このように、青年師範学校入学試験は農業、作物、林業などの実業科目に大きな比重が置かれていた。これは勤労青年の従事する産業が農業中心であったため、青年学校教師となる者には当然そのような知識が必要とされていたからであった。青年師範学校の卒業生も他の師範学校と同じように、卒業生名簿が県庁に通知されて赴任校が決定される、指定

第2章 前身各校

就職制度であった。

戦争の終結に伴って、1946年6月には附属の青年学校と共に金沢市野田町の元騎兵隊跡に移転し、19棟の独立校舎を持つに至ったが、元兵舎の転用のため図書館や体育館もなく、また所蔵図書も142冊のみで教育研究施設は貧弱であった。ただし、実業科目、例えば作物、畜産などにおいては農事試験場、農業会、種畜場などと協力し、種苗、種畜の育成あるいは講習実地指導を行うなど地域社会との連携が密接であった（『石川青年学校調査手引』1946年8月）。またこの年、初代校長五坪茂雄は、戦後の衆議院議員選挙に立候補し当選、代わって難波得三が校長となった。

1946年の石川県内の公立青年学校教師数は男子358人、女子291人、合計649人であるが、このうち石川青年師範学校卒業生は男子48人（13%）、女子50人（17%）、合計98人（15%）に過ぎなかった。つまり石川青年師範学校は数字の上では十分にその機能を果たしていない。これは1937年から46年までの10年間に「男子生徒の大半は徴兵された」（1946年8月『石川青年学校調査手引』）「一九三七～一九四六年間にどんな特別な問題が起こったか」に対する校長回答）影響によるものとみられる。ともあれ石川青年師範学校は1918年の石川青年学校教員養成所（男子）創設以来、45年までの28年間に392名の卒業生を送り出した。その後の卒業生数は残念ながら確認できていないが、1949年4月には金沢大学に包括され、1951年3月に閉校となった。

（3）金沢高等師範学校

全国の高等師範学校

高等師範学校・女子高等師範学校（以後高師・女高師と略称）は中等学校教員養成を目的とした、官立4年制の全寮制の学校として、まず1872（明治5）年に東京に設立された。1874年に東京女高師、1902年に広島高師、1909年に奈良女高師が設立され、1944

表2 - 20 全国中等学校教員構成

	1915年 (大正4)	1925年 (大正14)	1935年 (昭和10)
公私立中学校の教員数(人)	5,153	8,737	12,406
公私立高等女学校の教員数(人)	3,177	8,414	14,214
師範学校の教員数(人)	1,514	2,069	2,159
高師入学志願者数 (入学者数)	930 (360)	4,501 (567)	5,531 (583)
女高師卒業生数(保育実習科、保母養成科を除く)	175	188	168
師範学校教員中高師・女高師・臨時教員養成所卒の占める割合(%)	62.6	51.4	47.2
公私立中学校教員中高師・女高師・臨時教員養成所卒の占める割合(%)	25.2	24.1	26.1
公私立高等女学校教員中高師・女高師・臨時教員養成所の占める割合(%)	41.2	33.3	28.7

注)『日本近代教育百年史5 学校教育(3)』国立教育研究所 第4章「教員養成」第3節「中等学校教員養成の拡充」の各表から抜粋。

(昭和19)年の金沢高師、1945年の岡崎高師・広島女高師の設立まで、高師2校・女高師2校の状態が続いた。学科は、文科(教育学・歴史・法政経済、国語・漢文、英語の3部から成る)、理科(数学、物理・化学、植物・動物・地理の3部)にわかれ、その他に東京高師には体育科、広島高師には教育科、女高師には家事科があった。

受験資格は、中学校・師範学校・高等女学校卒業程度(16歳~)であった。入学者は1915(大正4)年には師範学校卒が5割以上、女高師は2割以上を占めていたが、35年には高師は中学校卒業者が8割、女高師は高等女学校卒がほぼ10割を占めるようになっている。高師・女高師の卒業生の7~8割は師範学校・中学校・高等女学校の教員となり、残りの大部分はその他の学校教員や官立大学生となっている。中等学校の拡充につれて入学者数は増加したが、需要に応じきれず、師範学校・中学校・高等女学校の教員の中で高師・女高師卒の占める割合は次第に減少してきている。

高師は1930(昭和5)年に東京と広島に文理大学ができるまで、教員養成の最高教育機関として、女高師は1920年代の女子大学・女子専門学校の急激な量的拡大を見るまでは、女子の最高の教育機関としての地位を保っていた。中等学校の教員構成は高師・女高師卒のほか、臨時教員養成所卒、大学・専門学校卒などの無試験検定合格者、試験検定によるものから成っていた。高師には高師卒業生・大学卒業生を入学資格とした修業年限2年の専攻科(1918年設置)が置かれていたが、東京・広島両文理大学の設置に伴い廃止となった⁽⁴⁾。

金沢高師設立の経緯

金沢市に北陸帝国大学を設立したいとの運動は明治時代からあり、明治40年代に「北陸帝国大学設立」が国会を通過したという記録が残っている。中等学校の量的拡大に伴い、中等学校教員の中での高師・女高師卒の比率が低下し、軍需ブームで大学・高専の理工系卒業生は工場技術者に迎えられ、低給与の教員になるものは少なかったため、全国的に中等学校の教師、特に理数系の教師は不足しがちであった。当時の北陸地方の中等学校でも例に漏れず、他の地方から赴任してきても長続きしないという事情があった。

反面、1923年に第四高等学校のなかに臨時教員養成所が併置され、前後3回にわたって約90名の物理・化学の教師、また1回だけ約30名の国語漢文の教師を世に送った。その中に地元出身者が多数いて、石川・富山の中等学校に定着している。このような状況から、昭和期に入ってから北陸帝大の設立が困難なら、ひとまず金沢に高師を設置しようという声が高まっていた。また戦争末期、文部省が戦争のための科学教育の振興を軍部から要請され、理数科中等教員養成の拡充を企画するという国内情勢があった。

1940(昭和15)年に文部省視学委員の委嘱を受けて富山県下の中等学校を視察した第四高等学校の榎本竹治教授(設立時から閉校まで金沢高師教頭)は、その所見を文部省に報告した際、北陸に中等教員養成機関を設ける必要を強調した。1942年の夏、中等教育理化学協会の年会在金沢で開催され、講師の1人として招かれていた当時の文部省督学官

第2章 前身各校

倉林源四郎（樫本竹治の恩師、金沢高師初代校長）から、文部省に高等師範学校増設の意向があることを漏れ聞いた樫本竹治は、早速当時の金沢市長沢野外茂次に誘致運動の有望なことを進言し、連絡者として倉林の名を紹介した。金沢市は通学児童を他のいくつかの小学校に分散させるという、たいへんな無理をして、新築間もない中村町小学校校舎を提供したために、東北仙台・九州熊本の高師誘致運動を抑えて、1943年の暮れに金沢高師の創設費が翌44年の国の予算に計上された。1944年初頭、倉林源四郎は創設事務を委嘱され、職員組織選考に着手した。中央では文部次官菊地豊三郎を創設委員長とする委員会が組織され、金沢では創設事務所を石川師範学校男子部に置き、同校校長清水暁昇がその衝に当たり、樫本竹次もこれに参画して開校準備に着手した。樫本竹治は金沢市のこの熱意を思っ、学校の帽章を決めるに当たり輪郭に金沢市のマークの剣梅鉢をとり、中に高師とした。後に定められた校旗も同じものである⁽⁵⁾⁽⁶⁾。

金沢高等師範学校の内容

課程 金沢高師の学科は1946（昭和21）年までは理科のみで、

第一部：数学、第二部：物象・物理・化学・地学、第三部：生物
各部定員30名であった。

47年に文科第一部：英語、第二部：地歴、各部定員30名が追加された。

第1回入学式に際し、教育方針三綱領が発表されている。終戦後の1945（昭和20）年10月13日、校旗入魂式・校友会発会式と同時に発表された校訓・自誓五則は次の通りである。

校 訓 真実一貫

自誓五則 一、気魂弛みなし 一、純情濁りなし 一、叡知曇りなし
一、信念揺るぎなし 一、修業怠りなし

『金沢高等師範学校沿革史』第三「学則」には3種の教科課程表が収録されている。第1は1944年4月1日より実施となっている。第2は昭和22年10月15日の日付が付いているが、その前文に、「連合国軍総司令部より発せられたる日本教育制度に対する管理政策（昭和20年10月22日発表）に則り」とあること、並びに文科の教科課程が載っていないことから、日付が間違っていることは確実で、おそらく1945年のある時期に作成されたものであろう。第3は「学校教育法」（1947年3月29日公布）制定後の1947年5月24日改正のものである。

高师生徒は、1944年度は勤労働員は免除されていた。このカリキュラムは第1回生が1学年修了まで実施された。その後は勤労働員のため実施されなかったからである。第2回生は、このカリキュラムに従った授業を受けることなく終戦を迎えた。

1944（昭和19）年に作成されたものは3年から専門中心になっているが、1947年改正

表2-21 金沢高師教育課程表(1)

各部、週あたりの総時間数は1・2年36、3・4年37~38
 各部・各学年共通のもの 教練4 修練2 体操2
 各部共通のもの 1年 国民道徳2 国史2 講読作文2 教育史1 心理学2 英語2 独語4
 2年 道徳史2 哲学概論2 教育史1 心理学1 英語か独語4
 3年 道徳学2 学問論1 教育学2
 4年 国家生活2 錬成論教育行政2 教科教授法1 教育実習約6週間

	1年	2年	3年	4年	専門科目名
理科第1部	9	9	20	25	代数 解析幾何 幾何三角法 微分積分 関数論 確率統計 力学 測量 図学 数学考究 数学特論 教材研究
理科第2部	8	10	21	26	無機化学 分析化学 地質鉱物学 有機化学 天文気象 電磁気学 原子物理学 理論化学 化学実験 物理実験
理科第3部	8	10	23	24	植物形態 植物生理 動物生理組織 動物発生組織 古生物 人体生理 遺伝 植物特殊研究 動物特殊研究

各部専門以外の理科学目を1~3年に計17単位を履修

注1) 1944年制定のもの。

2) 『金沢高等師範学校沿革史』第三「学則」にある表を組み替えたもの。

表2-22 金沢高師教育課程表(2)

各期28時間、3年後期は教職教養の講義演習2 実地演習10 計12のみ
 各科・各部共通のもの 体育各期2 教職教養講義演習各期3・4年1・2期は4
 一般教養社会科学2(1年1・2期) 人文科学2(1年1・2期) 自然科学2(2年1・2期) 理科3部のみなし
 理科共通のもの 一般教養 社会科学1(2年1・2期)
 文科共通のもの 一般教養 社会科学2(2年1・2期)

学 年	専門教養								選択科目							
	1年		2年		3年		4年		1年		2年		3年		4年	
部 期	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2
理科1部	14	14	15	15	19		18	18	5	5	5	5	4		4	4
理科2部	14	14	15	15	18		18	18	5	5	5	5	5		4	4
理科3部	14	14	17	17	18		18	18	5	5	5	5	4		6	6
文科1部	14	14	14	14	17		17	17	5	5	5	5	6		5	5
文科2部	10	10	10	10	17		16	16	9	9	9	9	6		6	6

選択科目は英語・独語・仏語・ラテン語・国語・漢文・美術・天文気象・科学史・科学概論・文科史・農業から選択

注1) 1947年5月24日改正のもの、2期制となっている。

2) 『金沢高等師範学校沿革史』第三「学則」にある表を組み替えたもの。

のものは1年からかなり専門科目が入っている。各部の専門教養の科目名は次の通りである。数字は総単位数である。

理科第1部 代数学11 解析学20 幾何学16 応用数学12 特別研究28 物理学18
 数学教育論4 教材研究4

理科第2部 物理学17 物理実験演習5 化学18 化学実験4 地学8 数学14
 工作8 科学概論2 物象教育論2

物理専攻 物理学(地球物理学を含む)18 数学2 天文気象2
 特別研究12

第2章 前身各校

化学専攻 化学18 化学実験4 特別研究12

地学専攻 地学(地球物理学を含む)18 天文気象14 化学実験2
特別研究12

理科第3部 動物37 植物37 古生物3 人体生理6 物理4 化学4 数学4
特別研究18

文科第1部 講読65 作文文法18 英語(発音会話16 英語学史・英文学史6
言語学2)

文科第2部 地理通論4 史学概論4 人文地理・自然地理・地誌のいずれか17

国史・東洋史・西洋史のいずれか18 文化史4 選択専攻30 研究12⁽¹⁾

校舎・寮・施設設備 『金沢高等師範学校沿革史』の「沿革」と「校地校舎」によれば、校舎・寮の変遷は表2-23のようである。

表2-23 校地・校舎・寮

1944年 4月 1日 (昭和19)	金沢市より提供の中村町国民学校の校舎並びに校地の仮引継ぎを行う。 校地 校舎1,100坪 運動場2,009坪 校舎699坪(本館510 講堂148 附属建物39)
4月 7日	寄宿舎として犀川下川除町元料理店「川新」を代用することに決定。
5月 1日	校舎・校地・工作物の実地引継ぎを完了、文部省より校長に対し引継終了。
9月 19日	西御影町石川県蚕業試験場建物及び敷地並びに附属桑園を本校寄宿舎及び研究作業園として借用することに決定。
45年 9月 30日	「川新」の借入契約解除。希望者を蚕業試験場に収容。全寮制を解く。
46年 5月 30日	旧山砲隊兵舎払下申請。 富士真空株式会社所有の木曽町社員寮舎の借入。 建坪32坪 2階30坪 建坪26.5坪 2階4.5坪 建坪41.5坪 2階40坪の3棟
7月 1日	元陸軍経理学校金沢分教場校舎中、生徒舎4棟128坪、生徒用附属舎2棟36坪払下を受ける。
9月 17日	金沢市野田町百八十番地、元第五十二部隊兵舎及び敷地の一部を使用許可、移転準備に着手(校地校舎では旧東海第九七部隊他二筆 校地4,332 寮舎708 運動場7,970 農耕地9,230 演習林3,408 その他12,451 計38,099坪)。
49年 3月 7日	午後11時40分工作室より出火、3棟焼失。焼失坪数206坪。
50年 12月 5日	国家警察予備隊金沢駐留のため本校校舎を挙げて移譲。 高師は金沢大学理学部校舎の一部に移転。 附属中学及び高等学校は野田中学校校舎の一部に移転決定。移転作業開始。
12月 14日	五誓寮金沢市立野田中学校校舎の一部を改装して移転。

注)『金沢高等師範学校沿革史』第一「沿革」、第七「校地校舎」から抜粋。

校舎は3度変わり、金沢高師8年間のうち野田町(旧山砲隊兵舎)に4年余り過ごした。理学部に移ってから、特に文科系の生徒は「教養部や法文学部の教室を点々とし、間借生活のようであった」と述べている。寮は、元料亭「川新」、県蚕業試験場、野田町に移転してからはその中に五誓寮があった。校舎が金沢大学理学部に移転後、五誓寮は金沢市立野田中学校校舎の一部を改装して移転した。木曽寮は教官と生徒共用の寮舎であった。「設立当初、机・椅子さえ満足に揃わず、市内の学校から借り入れたり東京都下の専門学校で

不要になったものを譲り受けたりした。当時、菓子屋や飲食店の整理が行われ、供出された営業用の戸棚・テーブルなどを、教職員が手分けして検分し、その中から希望の品を申し出て配給を受けたりした」「理科の学校として不可欠の実験設備は殆ど入手できず、自作して間に合わせる方針をとった。第一回生に製作課題をあたえたが、材料入手にも苦心し、暇さえあれば町を歩き買い漁った」などの記事にみられるように、施設・設備とも最悪と言える状態で出発した。そのような状況の中で、インクピンのアルコールランプ・試験管立ては言うに及ばず、結晶の原子模型・焦点距離測定器・偏光装置・天体望遠鏡も苦心の末、作り上げた。「この経験が後でおおいに役に立った」との記事もみられる。戦後、陸軍第七研究所の研究設備を入手し、顕微鏡・電気メーター・抵抗器などの機器や薬品を譲り受け、物理や化学もやや面目を保った。1945年8月8日より9月10日まで、図書・備品を戦災に備えて鳥越国民学校に疎開させた⁽¹⁾⁽³⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾。

職員 1944（昭和19）年4月1日倉林源四郎が初代校長に任命され、45年6月23日病気のため依願退職、文部省図書監修官第二編修課長塩野直道が任ぜられた。46年12月12日塩野直道教育職員適格審査委員会で不適格者の判定を受け休職、榎本竹治が校長事務取り扱いとなる。47年9月6日元台北帝国大学工学部長庄司彦六が校長に任ぜられた。8年間の間に事務取り扱いも含め、4人が校長を勤めたことになる。

高等師範学校官制によると金沢高師の職員構成は、表2-24のようになっている。

1948年の職員名簿によると、校長1、教授30、教官11、講師20が在籍、教授は帝大卒が20、文理大卒が9、東京外語・高師卒が各1で錚々たるメンバーが揃っていたといえる。

金沢高師へ着任するや、どの教官も講義案の作成に追われ、また施設・備品整備などの新設学校の整備に尽くさざるを得なかった。創立後間もなかったため解決すべき問題が山積し、教授会は毎週のように頻繁に行われていた。「学校のために自分の研究の一時中断を余儀なくされ、専門の研究だけが尊いとされる新制大学で、高師8年の苦心経営が将来ある教官諸氏にとってマイナスになったのではあるまいか」と、当時教頭の榎本竹治が述懐している。勤労働員・食料確保のための農作業・校舎移転・特別科学学級の指導・附属中学校の設立・教育方針の変更などを考慮すると、その忙しさは十分に想像できる。そんな中であって、科学教育研究生の指導・教師講習会がなされていたのである。

表2-24 金沢高師職員数

	校長	教授	生徒主事	助教授	助手	書記	生徒主事補
1944年	1	8	1	3	1	3	1
45年	1	15	1	6	2	5	1
	文部教官				文部事務官		
	学校長	教授(1~2級)		2級	3級	2級	3級
46年	1	15			7	1	5
(6月21日改正)	1	19			11	1	6
47年	1	29		6	23	1	9

注)『金沢高等師範学校沿革史』第二「官制」から転記。

第2章 前身各校

科学錬成所・科学教育研究室 1944年11月3日、金沢高師は蚕業試験場に科学錬成所を開設すると発表した。中等学校・青年学校・国民学校の理数科教員のみならず、工場・事業所の技術者をも集めて、高師の教官がこれを錬成指導するというものである。実際の化学錬成所の活動は教員の現職教育であり、教科指導が主であった。この活動は、1944年8月25日から11月2日まで行われた文部省主催、中等教員長期講習会を開催しただけで終わっているように思われる。

それを引き継いだのが文部省の指示に基づき、1946年6月1日に発会式を挙行了した特別科学教育研究室であろう。小・中・高の教員に科学の本質、特に研究についての体験をさせ、その資質の向上と科学教育に関する指導力の充実を計るため、短期間ではあるが高師に来て特定の教官の指導により、1つの課題について研究する制度である。塩野校長を室長とし、主事として佐藤和韓鷄教授他、高師・医大・四高・工専・師範の教授各1人、石川・富山・福井の視学官をあて、高師教官15名、大学・工専教官4名、県農事試験場1名を指導員とする研究室を組織した。開会式と同時に、北陸3県から、第1回の研究生25名（石川15・富山7・福井3）、研究員34名（石川15・富山13・福井6）を入所させ、8月31日に修了式を行っている。第2回は同年10月1日から12月25日まで20名（石川12・富山6・福井2）、第3回は1947年6月1日から8月30日まで16名（石川11・富山1・福井4）、第4回は同年9月16日から12月17日まで14名（石川10・福井4）を入所させ、修了式後毎回研究生研究発表会を開いている。「研究生・研究員は熱心な研究意欲を持っておられる方が多く、私たちはそれに追いつてられるような気持ちで、研究体制を整えるのに努めました」と、理科第二部主任井田光雄教授が述べている。この研究室は、石川県下に教育情況視察並びに科学教育指導のため、教授を派遣し、次のような講習会をも開催している。

表2 - 25

1947年 2月 17日 (昭和22)	第1回科学教育講習会を開く 数学科 至22日 32名 物象科 至27日 24名 生物科 至19日 32名
8月 22日	第1回新制中学校教員講習会を開く 講習科目 数学科・理科・英語科 期間7日間 受講者46名
48年 7月 21日	科学教育研究室主催科学講習会開催

注)『金沢高等師範学校沿革史』第一「沿革」・第八「特別教育施設」より。

科学教育研究室の記録は、1946年4月25日から始まり、47年9月16日で途切れている。48年の講習会は『沿革』から拾ったものであり、研究室の活動はその後も続いているに違いない。「第1回研究員34名（石川15・富山13・福井6）」の記述があるが、『沿革』には「8月31日第1回特別科学教育研究室終了式、終了者研究生25名研究員6名」の記述があり、研究員の人数が合わず、研究生と研究員の相違も書かれていない⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

生徒 1944年に第1回目の生徒を募集し、48年に最後の生徒募集をした。1年から4年までの生徒が揃ったのは、理科でさえ僅か2年間であった。48年入学者の卒業生数が少ないのは1949年度から発足した金沢大学へ1学年終了後転校したのが多いからである。49年から募集を停止し、理科5回生、文科2回生が卒業した1952年3月に閉校した。

『金沢高等師範学校沿革史』第五「生徒」によると、生徒の出身学校は、実業学校卒が10名、師範学校卒が1名その他が6名あるのみで、他はすべて中学校卒となっている。しかるに、『無限』の中に「理科一部3回生では3分の2が、理科一部4回生では1名を除き、理科二部5回生では10名が陸士・海兵等陸海軍諸学校の経験者で占められていた」との記述がある。連合国総司令部から、陸海軍諸学校出身者は定員の1割以内に押さえよとの指令が出され、理科3回生の入学式が9月16日に延期になったこともあった。

在籍生徒の出身を地区別に見ると、石川172人(32%)、富山・福井121人(23%)、それ以外の中部86人(16%)、近畿82人(15%)、関東22人(4%)、その他の地区49人(9%)となっている。特に文科は116名中北陸3県で79名(68%)を占めている。

表2-26 金沢高師入学者数(卒業生数)

	理科1部	理科2部	理科3部	文科1部	文科2部	合計
1944年	30(26)	30(22)	30(24)			90(72)
45年	30(28)	30(29)	31(25)			91(83)
46年	28(26)	28(28)	26(26)			82(80)
47年	30(22)	28(26)	27(27)	30(27)	30(24)	145(126)
48年	27(15)	30(10)	29(11)	28(5)	30(14)	144(55)
合計	145(117)	146(115)	143(113)	58(32)	60(38)	552(415)

注1)『金沢高等師範学校沿革史』第五「生徒」より抜粋。

2)『金沢高等師範学校沿革史』第一「沿革」にある卒業生数と1~2名のずれがある。

表2-27 金沢高師入試倍率(受験者数÷合格者数)

	理科1部	理科2部	理科3部	文科1部	文科2部	全体
1944年	6.17	6.73	7.80			6.90
45年	7.07	9.27	9.58			8.74
46年	6.69	6.69	5.46			6.29
47年	2.33	4.29	3.93	2.87	2.47	3.14
48年	2.37	1.60	2.93	受験者数不明	受験者数不明	2.29理のみ

注)『金沢高等師範学校沿革史』第五「生徒」より作成。

生徒の生活並びに活動 「寮の食事、朝 フキの味噌汁、昼 フキと筍の煮付け、夜 鰯の塩焼きと筍の煮付け、以下毎日のように筍が出ることになる。終戦1年有余前にしては、まだのんびりしていたようだ」「大豆・大根・いも・野菜入りお粥雑炊ともいうべき内容でよく下痢を起こした」「夕飯が雑炊を皿に一杯、次の日はさつま芋を2~3本、芋の蔓の茎の入った雑炊」などの記述が、『無限』のなかの方々に見られる。修練はもっぱら食料不足を補給するため、校庭や蚕業試験場の研究作業園を開墾し、麦・芋・野菜を作ることで

第2章 前身各校

あった。生徒にとっても教官にとっても終戦直後の混乱期には食料確保が生活のなかの最重要課題であった。

「放歌高吟するようなことも少なく、ストームと称する蛮行も行われなかった。静かに勉強し、散歩し、人生を語り合っていた先生の卵、金沢高師の学生の姿が印象的である」との「川新」の主人の言葉は、金沢高師の学生の一面を表していよう。

1944（昭和19）年は勤労働員を免除されていたが、休暇中に長江谷薪材伐採・開墾（7月29日～8月3日、8月14～19日）、県蚕業試験場の桑園地開墾・耕作（8月4～7日）、二塚村稲刈奉仕（9月1～6日）などに従事している。翌45年にはこの特権はなくなり石川県内各所（金沢医科大・松任国民学校・和倉温泉・赤座繊維（興亜精工）株式会社工場など）に疎開してきた第七陸軍技術研究所に分散動員され、研究の助手を務めた。理科2回生は45年1月31日に合格発表があったが、各自の中等学校の動員先において勤労働員に従事、卒業後も勤労働員を続け、高師には五月雨式さみだれに集まるしかなく、入学式は7月23日によろやく行われている。入学式後直ちに陸軍航空工場の疎開先である元大和紡績工場に勤労働員された。終戦時には陸軍航空工場の洞穴工場のため、道法寺で穴掘り作業をしていた。

1946（昭和21）年に旧山砲隊跡に校舎を移してからは、自由が開け何となく明るさがあった。職員生徒の自治組織である校友会（1945年10月13日発会式、48年解散、自治会となり、一真会と名乗る）も発足し、部活動は、水泳部・箏球部・ハンドボール部・サッカー部・自動車部・庭球部・卓球部・野球部・排球部・山岳スキー部・体操部・競技部・馬術部・機甲部・演劇部・講演部・音楽部・美術部・文芸部・高師短歌会・高師Y M C A・厚生部があり、運動会や野球などスポーツを楽しむゆとりもでてきた。

高師演劇は、最初は1946年11月8～11日の開校記念行事の中でクラス対抗の形で行われた。「苛烈な戦争がおわり死の脅威と非文化から解放され、何かの文化創造をして生きる喜びを体で味わいたい」との念願から出たものである。演劇部の部員の多くは北陸新協劇団にも所属していて、47年6月に行われた学生演劇コンクールに出演、山本雄三「命の冠」を演じ優勝した。1949年6月17～18日に行われた第1回高校演劇コンクールから、高師最終年度の51年の第3回までを主催し、現在石川高文連の演劇コンクールとして継承されている。また、ハンドボール部は北陸の草分け的存在であり、第2回国民体育大会のハンドボールとラグビーの会場となった。

1948（昭和23）年11月30日～12月3日の4日間、金沢高師自治会主催開校記念文化祭のメイン行事として「日本古代史展覧会」が中央公民館で催された。創設間もない文科第2部地歴科の学生が当時の学会の成果を結集し、皇国史観にとらわれた人々を再教育する目的で県内各地の遺物・絵図をパノラマ的に展示し、分かりやすい言葉で説明したものである。これが大変な人気を呼び、その後小松市・鶴来町・飯田町でも開催された。また、金沢高師生物学会主催、小・中・高校生を対象として「生物採集会」を1950年に何度か行っている。校友会発足後の1946年以降、開校記念祭を盛大に行っている。運動会・演

奏会・演劇・講演会・美術展・短歌会・弁論大会など多彩な催しをしているが、なかでも講演会は記念祭行事以外にも度々なされている。『沿革』に記載されたものを列記すると、表2-28のようになる。

表2-28 金沢高師における講演会

	講演者	内容
1944年	9月14日	文部省教学局長 近藤寿治
	9月15日	広島文理大学教授 下斗米直昌
	9月16日	東京工業大学長 八木秀次
45年	9月28日	大日本教育会会長 岡部長景
	12月15日	暁烏敏
46年	6月15日	東京文理科大学教授 藤岡由夫
	9月28日	文学博士 曄道文芸
	11月28日	高橋勇 宮本三郎画伯
47年	5月2日	第四高等学校教授 三由信二
	5月27日	暁烏敏
	11月11日	京都大学教授 湯川秀樹
48年	5月19日	東北大学教授 松隈健彦
	11月7日	東京大学教授 中野好夫
	49年 12月5日	京都大学教授 桑原武夫
		等

注)『金沢高等師範学校沿革史』第一「沿革」から転記。

貧しい中、高師生徒の文化活動は、非常に盛んであったといつてよいであろう。1950年以降の『沿革』の記録が少なくなっているのが惜まれる。

金沢高師に起きた学生運動は、まず1946年の塩野直道校長の教職追放反対運動を挙げることができる。学生大会を開催して留任運動をすることを決議し、署名運動や代表を上京させ、留任請願を何度か行っている。49年には「大学管理法」に反対して、金沢高師自治会も全学連ストに参加し、金沢市内をデモ行進をしている。またGHQ顧問W.C.イーブルズ博士の「赤い教授追放演説」に対し「学問の自由侵害」を主張し、数回のデモ行進をしている。警察予備隊のため校舎明け渡しを迫られた時には、緊急学生大会を開き反対を主張したが受け入れられなかった。寮が警察予備隊の真向いに移転してからも、窓にピラを貼ったりして平和と真理と自由を守ることを主張している。軍国主義教育をしていた教官が急に民主主義を唱えだしたことに対する反発もあり、1949(昭和24)年5月31日に校名が金沢大学金沢高等師範学校となり、その名称が卒業証書に書かれたことに対する反発を感じた卒業生も多かったと記録されている⁽¹⁾⁽³⁾⁽⁸⁾⁽¹⁰⁾。

特別科学学級

『金沢高等師範学校沿革史』の第八「特殊教育施設」によると、1944(昭和19)年12月26日に文部次官より特別科学教育研究実施の通牒が到着した。科学に関し高度の天分を

第2章 前身各校

有する学徒に対し特別なる科学教育を施し、わが国の科学および技術の飛躍的向上を目的とした教育の研究班と学級が全国に4カ所、東京・広島・金沢各高師と東京女高師に編成されることに決定した。なお、次年度に京都府立1中も追加された。

金沢高師では12月29日に金沢一中第1学年から16名（後に編入者4名追加）、石川師範男子部附属国民学校第4学年から16名を選定し、特別学級を編成した。1945年1月15日に学級の入学式と研究班の発会式を行い、授業はそれぞれ附設された学校で行うが、週2回高師で高師教官の指導を受けることに決定した。初年度の生徒の選定は学校が指名した。

1945年度の生徒は、選定委員会を設け北陸4県に候補生徒の推薦を依頼し、中学校第1学年28名・国民学校4学年24名を選定している。中学生は金沢第一中学校で、国民学校は石川師範学校男子部附属国民学校で特別学級（通称5組）を作り、授業が行われた。

1946年度は中学校第1学年を16名、国民学校4学年を14名を選んでいる。授業は、国民学校4・5年は高師教官が出張指導を週3日行い、国民学校6年および中学1年は週1日、中学2・3年は週2日高師で授業を受けている。中学校3年の生徒には自由研究課題を選定させ、各指導教官のもとに専門的研究を試みさせている。1945年度特別科学学級生徒名簿が残っていて、この段階では中学2年20名・1年29名、国民学校5年16名・6年26名在席している。

1946年10月29日文部省から「国としては特別科学教育は昭和21年度をもって中止せざるをえないが、学校により自主的にこれを行うことが望ましい、この場合援助を惜しまない」との通達があった。検討の結果、1947年度には生徒募集はしないが、学級に在籍する生徒は1947年度よりできる高師附属中学（旧制）に収容し、国民学校4・5年児童は附属小学校において引き続き教育を実施することに決定した。金沢高等師範学校附属中学校と石川師範男子部附属国民学校に引き継がれたとはいえ、特別科学学級は卒業生を出すことなく、2年3カ月で終了したのである。

教育方針・内容・方法は各高師の自由裁量に任されていた。金沢高師では生徒の自主性を尊重し、自由研究を取り入れ、中学校第3学年には自由研究課題を選定させ、各指導教

表2-29 特別科学学級教育課程表（案）

	国民学校			中学校			
	4年	5年	6年	1年	2年	3年	4年
国民科	8	9	8	5.5	5.5	4.5	5.5
理数科	数 学	6	6	7	7	8	8
	理 科	7	7	9	10.5	11	13
	工 作	4	4	4	4	3	2
体 練 科	5	5	5	6	7	6	5
芸 能 科	5	4	3	3	2	2.5	3
外国語科				4	4	5	5
計	35	35	36	40	40.5	41	42

中学4年の数学理科は、数物、化鋳、生物に分かれ、専門科目は11.5単位履修

注)『金沢大学教育学部附属高等学校 附高五十年』にある表を組み替えたもの。

官の下に専門的研究を試みさせている。理数科は、現行国民学校4学年以上旧制高等学校第2学年終了までの全教育内容を、中学校第4学年卒業までに理解把握させることを建前としていた。幹事私案として教育課程表(科目細目省略)が残っている

数学・理科各科の教授細目が残されているが、そのレベルを数学で見ると、中学1年で対数、2年で微分初歩・三角関数・確率統計、3年で微積・微分方程式・複素数、4年で偏微分・重積分・行列式・計算器械・歯車研究が取り入れられている⁽¹⁾⁽⁹⁾。

金沢高師附属中学校から金沢大学教育学部附属高等学校へ

高師の理科第1回生が4年になり教育実習が必要となった1947(昭和22)年4月15日、金沢高等師範学校附属中学校は旧山砲隊を校舎として、入学式・転入学式を挙行している。この年の在籍生徒数は中学1年80名・2年15名・3年21名・4年19名、計135名であった。特別科学学級の最高学年の中学4年を見ると、20名の科学学級生徒のうち6名が金沢一中に残り、14名が高師附中に転入している。さらに他の中学校から6名編入し、1名が転校して19名となっている。その後毎年編入生を受け入れ、50年3月には27名が金沢大学金沢高等師範学校附属高等学校を卒業している。『附属高等学校同窓会名簿』の第1回生の数が40名となっているのは旧制中学4年または5年修了者も含めているからである。3年には特別科学学級29名中18名(附属2回生)が、2年には16名(附属3回生)が入っている。『附属高等学校同窓会名簿』と『附属国民学校特別科学学級名簿』を対比すると、4回生の中に26名中13名、5回生の中に16名中13名が附属高等学校を卒業している。1946年にも国民学校4学年の募集をしているので、6回生のなかにもいるはずであるが、特別科学学級名簿が1945年のものしか残っていないため不明である。以上のように、金沢高師附属中学校の創立年度の2～4年はほとんどが特別科学学級の生徒で占められていた。このことが北陸三県の穎才を集めるという以後の附属高等学校の伝統を作ったのである。『石川県教育史』に「特別科学学級の生徒は大学進学時に半数は文科系に進んだといわれている」との記述があるが、同窓会名簿によると文科系に進んだものは各学年2～3名であり、そのことが大げさに伝えられたものと思われる。

1948年4月1日に附属高等学校(新制)、附属中学校(新制)が付設され、金沢大学が発足した49年6月1日から、金沢大学金沢高等師範学校附属高等学校同中学校と校名が変更され、50年から中学1年の募集を停止し、1952年度から完全に新制高等学校となった。

1950年12月4日警察予備隊設立に伴い、校舎を旧騎兵連隊跡地に移転、野田中と同居することになった。52年4月1日、金沢大学金沢高等師範学校の閉校に伴い、金沢大学教育学部附属高等学校と名称を改め、同年5月24日高師の校旗から師の字を抜いただけの校旗の樹立式を行っている。1960年から新校舎建設にかかり、62年4月26日新校舎に移転している。以後、自由の校風を伝統として教育研究の実験校として地域に貢献し、有為な人材を世に送り続けている。1998(平成10)年には創立50周年を迎え、それまでに卒業生6,614名、教育実習生も6,000余名を数えている⁽¹⁾⁽³⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。

第2章 前身各校

金沢高等師範学校同窓会の活動

金沢高師が第1回卒業生を出した1948(昭和23)年にすでに同窓会が存在したことは、同年11月発行の『無限』3号の「編集後記」に、本紙を同窓会の機関誌と一緒にしてくれとの依頼があった旨記されていることから分かる。しかし、その活動はあまり活発ではなかったようである。これは1989(平成元)年発行の『無限』第11号に「金沢高師同窓会の古い記録」と題して理科三部1回生の玉鉾良三が1951年の同窓会準備会の記録を紹介している。この時同窓会の新しい会則と組織が一応整い、『会員名簿』も完成し『無限』6号に掲載され、同窓生全員に通知された。閉校式の午後、同窓会入会式と懇親会が行われ、その席上塩野前校長から各ブロック3年ごとに大会を開催しては如何にとの提案があった。支部は新会則で北海道・東北・関東・甲信越・北陸・東海・近畿・中国四国九州の8支部を定めることになっていた。その後の同窓会の活動は、『無限』の発行の状態をみても塩野前校長の提案を受け入れて活動していると考えてよい。支部の活動に関しては関西地区が紫水会、関東地区は白山会、東海地区は金沢大学の卒業生と合同して兼六会と称して活動を続けている。理科二部だけの理心会という会も存在する。紫水会には啓林館取締役をしていた塩野前校長が、存命中ほとんど毎回参加していたとの記事がある⁽³⁾⁽⁸⁾⁽¹⁰⁾。

金沢高師の閉校以後

1944(昭和19)年5月、金沢市中村町に誕生した金沢高等師範学校は、理科5回生・文科2回生卒業者総計415名を送り出して、1952年3月31日学制改革により金沢大学に包括され、金沢大学理学部と並びかかっていた校門の表札を撤去した。戦局苛烈を極めたところから戦後の混乱激動の8年間の存在であったが、全国、特に北陸の教育界に与えた影響は極めて大きなものであった。

金沢大学に5教室21講座という他県の大学とは比較にならない大きな理学部ができたのは、金沢高師と四高の理科教官がいたからに他ならない。金沢大学、特に理学部・教育学部の人的基礎を作ったと言ってよい。1950(昭和25)年以降の『職員名簿』を見ると金沢大学との兼任が多くなっている。その内容を51年の教職員名簿で見ると、校長の庄司彦六が金沢大学理学部長になったのをはじめとして、理学部へ26名・教育学部へ16名・法文学部へ7名・工学部へ1名・附属高等学校へ6名移動している。金沢高師の教頭であった樫本竹治は『私の歩んできた道』のなかで「新制大学の教官の定員は、大体旧制の学校の定員をもとにすることになっていた。高師の教官は理科系は理学部に、文科系は法文学部に、教職教養系、体育科および附属中学は教育学部にわかれることになった。これと旧四高の教官とが新しくできた理学部の基礎になったのだから、金沢大学理学部を作るために果たした役割は甚だ大きいといわなければならない。教育学部の構成も金沢高師に負うところが大きいのであった」と述べている。金沢大学設立の混乱のなか「教授・助教授の資格審査が終わるまで高師に籍を置くということまで行われた。そのため名簿にはあるが顔も知らないといった事態が生じた」との記述もみられる。

戦前は高師卒の中等学校の教師は師範卒の小学校教師と比較してかなり高額な給与が与えられていた。戦後に入ると新教育制度の給与体系によって、小学校教師とほとんど差のない低給与に定められ、物資不足・インフレによって教師は極めて惨めな生活を強いられた。入試倍率の低下はその影響をものろに受けたと推測される。そのような世情のなか「1回生は卒業後旧制帝大へ進学したりして、創立目的の中学校理科教員にならないものが24%にも及び、文部省から苦情をいわれた」との記述も見られるが、卒業生の大部分は高校や中学の教師となり、北陸三県を中心にほとんど全国に散っていった。その地方の教育界で頭角を現し、若くして校長になったり、県の指導主事になったりしている。北陸三県の教育界は「高師時代」といってもよいくらい高師卒業生が教育界の要職につき活躍した時代があった。卒業生が教育界に果たした役割は、はかり知れないと言ってよい。

科学教育研究室の活動や、講演会を公開するなどに見られるように、高師の活動は常に教師の現職教育などの地域貢献を念頭においていた。演劇部の活動に象徴されるように、新制高校設立時に高師生徒が果たした役割も極めて大きかった。えび茶に金糸銀糸梅花の校旗を引き継いだ金沢大学教育学部附属高等学校は、高師の教育理念と特別科学学級の精神とを伝統に現在も活動を続けているものと信ずる。

【注記・参考文献】

第4節

(1) 『金沢高等師範学校沿革史』

第一 沿革 第二 官制 第三 学則 第四 職員 第五 生徒
第六 会計 第七 校地校舎 第八 特別教育施設

(2) 『金沢高等師範学校一覧』

(3) 『無限』1947・3・1創刊～1952・3・5、2～6号自治会発行

特集号1980 7号～14号1997 金沢高等師範学校同窓会発行

(4) 『日本近代教育百年史5 学校教育(3)』 国立教育研究所

(5) 『落葉を集めて』 榎本竹治

(6) 『私の歩んできた道』 榎本竹治

(7) 『石川県教育史』 1975

(8) 『二足のわらじ』 金崎肇 1988

(9) 『金沢大学教育学部附属高等学校 附高五十年』 1998

(10) 『随流導流(塩野直道先生の業績と思い出)』 塩野先生追想集刊行委員会 1982